

鸞ト己テリモ積モ塵

サボテンダーイオウ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

少女は自分が何者であるのか、まったく知らなかった。

ただ、気づいたら次元の魔女の傍にいた。意地悪魔女のお陰で退屈しない毎日を送ることができている。

魔女は少女を慈しみ込めて仮初の名を呼んだ。

少女には名前がなかったから。

けどそれでも少女は構わなかった。

今はまだ、きつと必然の時ではないのだから。

生きる意味を模索する不器用な少女の御話です。

## 目次

01	『人と化け物と人形』	1
02	『何かとは何かである』	6
03	『生きる上での意味』	12
04	『斬鉄剣げつと』	17
05	『知らずに君を追っているから』	26
06	『それが決められたことなら覆す』	31
07	『選択肢は一つではない』	37
08	『唄』	44
09	『竜の娘よ、感謝する』	51
10	『今日は素敵な日』	58
11	『あの子とえれなのcooking』	63
12	『素顔の魔女』	71
13	『君が隣にいてくれてありがとう』	77
14	『紛い物』	83
15	『おかえり』	87
16	『餌』	96
17	『バブル爆弾爆発3秒前！』	104
18	『ゆうこのきょういく』	110
19	『ゆうこのぶざい』	116
20	『嫌いの嫌いの好き』	123
21	『予兆』	130
22	『あそぼ』	140
23	『わたし』	147
24	『雪月花』	152

25	【壊れたマリオネット】	158
26	『夢の道』	164
27	『M19 コンバットマグナム』	172
28	『願えるのならば』	176
29	【有終の美】	184
30	【END】	188
	必然に抗おうとした男の話。	191

## 01 『人と化け物と人形』

『人』とは何だろうか？

ある一人の龍を内に潜めた女は産まれたばかりの赤子を抱きながら言った。

『私は『人』よ、あの人も『人』。鬼と呼ばれ蔑まれてもそれは外見だけに過ぎない。人間めいた異能を持つていたとしても、それはその人を彩る部分に過ぎない。ただ外見がそうなだけ、ただ『人』から逸脱した存在なだけ。だから私は幸せよ。たとえ迫害されようとたとえ恨まれ蔑まれようと私とあの人の『子供たち』が『人』として幸せに暮らしていけるのならこんなに『幸せ』なことはないわ』

そして一人の龍を内に潜めた女は静かに眠った。兄と従兄を残して永遠に眠った。

では『化け物』は何であろうか？

ある一人の黒髪に紅い瞳を持つ少女は美しく微笑みながら言った。『私は『化け物』、『人』ではなくなった。だからなんでもできる。目をえぐられようが耳を斬られようが鼻を削がれ口を引き裂かれ四肢を切り落とされ臓器を引っ掻き回されようが心臓を喰われようが何をされても私は『あの子』を救う為なら全てを捧げる。私は『化け物』だからなんでもできるのよ。私はただ『あの子』に『幸せ』になっただけ。ただそれだけを願うの』

そして黒髪に紅い瞳を持つ少女は死んだ。器として相応しいのに器として覚醒する前に死に堕ちた。

そして、そのどちらとも言えない『人形』である茶色の髪を、黄緑色と灰色の異色の瞳を持った少女は淡々と言った。

『わたしは『人』でも『化け物』でもどちらでもない。わたしは生きる意味を理解していないもの。わたしは誰なのか誰の為に今生きてそして誰の為に喜んで悲しんで苦しんでいればいいのか。まったく理解していない。だから『幸せ』が何なのかわからない。ねえ、教えてわたしは何をすればいいの。わたしは誰であればいいの。わたしは誰の為に泣いて笑って怒って生きればいいの。わからないワカラナ

「わからない」

『人形』である茶色の髪を、黄緑色と灰色の瞳を持った少女は今日のぼんやりと空を見つめた。生きる意味を模索しながら、今日も少女は空を見上げる。

侑子は少女の頭を優しく撫でながら言った。

『時はかならず満ちるわ、だからゆっくり勉強しなさい。くー』

さて、ぼんやり少女はいったいどちらに当てはまるのだろうか。

◇◇◇

四月一日少年は今日も憑かれていた。なんともどよよんとしたモノに。

「だから、離れろっつーのー！」

大声で叫び「くそーくそーくそー！」と言い続け疾走しても背後のどよよんは離れない。周りの行き交う人間たちにはまったく四月一日少年がわめきちらかしていても理解していなかった。それどころかちよつと怪しい学生と思っていた。当然だろう。

だって『視えていないのだから』。

四月一日少年はいつもこんな感じに何か背負っていた。日常的に毎日毎日。けど、今日だけは違っていた。何かが。

「重てー！…このー！」

どよよんとしたモノは四月一日少年に覆いかぶさった。

「ウグー！」

四月一日少年は押しつぶされ息苦しきを感じ、倒れこむ直前、民家の塀に手をついた。すると、

「……あれ？消えた……」

どよよんとしたモノは一気に霧散した。さつきまでの息苦しきや重苦しきはまったく消えていた。そして自然と目に入ったのは、ビルが立ち並ぶ中ポツンと隠れるように存在する民家。何とも言えぬ雰囲気に四月一日少年は不思議な気持ちになった。そしてなぜか、

「おわ?!体が勝手に動く!?!」

自分の意思とはまったく関係なしに体が動くことに驚きまくる四月一日少年。自分の体はまっすぐに民家に侵入してく。己の意思と

は関係なく。なので四月一日は踏ん張ろうとするもまったく抵抗すら無駄に終わる。民家の扉がガリりと開き、驚く彼を出迎えたのは同じでないようで同じな女の子二人。二人は声を揃えて彼を出迎えた。嬉しそうに嬉しそうに。

「いらつしやいませ！」

「主サマにオキヤクサマ！」 「主サマにオキヤクサマ！」

勿論、勝手に侵入してきた四月一日少年は慌てる。

「ちが、俺は客じゃっ!？」

少女二人が言う「客」という単語に気がついたから、四月一日はここはなんかのお店なのかと思った。問答無用で少女二人にぐいぐいと引つ張られ無理やり奥に連れていかれると、ある女の声が耳に入った。

「来たようね」

彼は導かれるまま目の前の襖に手をかけ開けた。彼の前に広がるのは椅子に寝そべりキセルを吸う着物を着た黒髪の女だった。

「必然の内にアナタは来た」

女はニタリと妖しい笑みをつくり言った。

「ヒツゼン？」

「話せば長くなるから意味を知りたくば辞書を調べなさい」

「誰に言ってるんすか？」

「読者によ」

「は？」

女は頭がイカレテいるのかと彼は思った。悪徳商法か何かと危険な香りを感じ四月一日少年は踵をかえそうとした。が、しかし女は止めた。

「名前」

「え？」

「貴方の名前」

女は促すように言った。四月一日少年は素直に自分の名前を名乗っていた。

「四月一日君尋（わたぬききみひろ）」

「誕生日は」

「：四月一日」

女は突然「プッ！」と笑いをこらえるように吹き出した。

「素直すぎ、知り合つて数分の相手に暴露しちゃうなんて」

「正直ダー！」「正直ネー！」

遊ばれたみたいだと彼はすぐに直感し、

「何なんスか!?!あんたら人おちよくつて!」

と怒つた。女は態度を変えて名乗つた。

「あたしの名前は壺原侑子、この二人は『マル』と『モロ』」

自分の側にいる二人の少女の名前を言い終わつた後、「そして」と一旦は言葉を切る。キセルである方向を指し示した。四月一日少年はつられるようにその方向に視線を動かした。

「あの子が『くー』よ」

四月一日少年はある光景に釘づけになりました。思考全てをその『くー』と呼ばれる少女に奪われた。中国風の衣装を身に纏い畳に座りこみ、天井近くまで積み上げられた巨大な皿に乗せられた大量の肉まんを両手で頬張つておいしそうに食べていたのだから。

なんだ、あの子は大食い大会のチャンピオンなのかとツツコミしたくなるくらい山の。

もぐもぐもぐもぐ、もぐもぐモグモグ。

茶色い髪はくるくるとしていても可愛らしい。もしかしたら四月一日少年よりも年下である様子。少女の体はスレンダーで、とてもじゃないがあ量の肉まんは食べきれないだろうと思うが、もしかしたら本当に四月一日の予想通り大食いチャンピオンなのかもしれない。とにかく圧倒されて何もいえない四月一日少年の代わりに侑子はピシヤリと少女にしっかりつけた。

『くー』、食べてばっかりいないでちゃんと挨拶しなさい」

「うへへ」

『くー』は注意されてようやく彼にみられていることに気がついた。

もぐもぐさせていたものをようやく噛んで飲み込むのに数秒かかりましたが、『くー』は両手に肉まんを欠かすことなく四月一日少年に



あいさつした。

可愛らしくにつこりと、四月一日少年のハートをぶち抜くくらいに。

「こんにちはー！」

「お、あー！」

「新しい『おさんどん』入れてくれたんだね！ゆうこ」

彼女の言っている意味がよくわからない四月一日少年。

「は？」

「だってわたしのご飯作ったりするの大変だもんね。量がハンパないからね。育ちざかりだから仕方ないね。だから新しいおさんどんさん雇ったんでしょ？ゆうこ？」

『くー』ちゃんは侑子に言いました。そしてぽんつと手を打った侑子も

「その手があったわね、よしそれ決まり！」

と簡単に決めた。

「は？」

四月一日少年だけが話の内容について行けず取り残されている中、

『くー』ちゃんはにまくと笑いながら彼に手を差し出した。

「よろしく、君尋。わたし専属のおさんどんさんなんて嬉しいな」

「なんでやねんっ！」

とりあえず四月一日少年は全力で突っ込んだ。

『くー』専属のおさんどん＝アルバイトを強制的にすることになった

四月一日少年にとって『今日』は違う『今日』になった。

## 02 『何かとは何かである』

強制的にアルバイトすることに決まった四月一日の願いは『アヤカシを視る力が無くなること、アヤカシがこの『血』に惹かれないこと』でした。

侑子はそれをここで働くことで叶えてあげましようと言った。

だから四月一日はこの『対価を支払う代わりに相応の願いを叶える』お店で働くことにしました。彼の最初の仕事はおさんどんさんでした。割烹着来てしゃもじもって目の前の少女を見やります。

「君尋く、ご飯大盛り頂戴！」

「くーちゃん、これで何杯目？」

「知らない数えてないし」

あっけらかんくーは催促します。ごはん♪ごはん♪と。

「教えてあげる、ご飯15合炊いたのにもう空なんだよ」

「え？終わり？」

「終わり」

キツパリと言い切り「ええく？」と不満そうに箸をかじるくーをしかりつけます。

「行儀悪い」

「満たされないなんか作って」

とせがむくー。だが四月一日は、

「ダメ、食べ過ぎは体に良くないんだよ」

と言って斬り捨てました。容赦なく。するとくーはふてくされごろんと畳に転がりました。

「君尋が苛めるくー」

と言いながらのの字を書きま。恨みがましい目で四月一日を見るのでした。

「苛めてないの！くーちゃんが大食いなだけなんだよ」

まったく！言いながら食器を片づけ台所に戻る彼。がしかし後でくーの大好きな肉まんをつくってあげる四月一日なのでした。そしてくーはやはりおいしそうに言うのでした。

「君尋って優しー!」

そしてやっぱりくーには甘い四月一日なのでした。無邪気に食べる彼女は彼にとつて『癒し』なのです。そんな君尋の次の仕事は埃まみれなお部屋の掃除でした。

「汚い!?ここって掃除してないんじゃない」

頭痛いと唸る四月一日にゆつと顔を出したくー。四月一日はまたお菓子を催促されるのかと思ったのだがそれは違いました。

「君尋、わたしも手伝う」

なんかじーんとこみ上げるものを感じ、四月一日は

「ありがと、くーちゃん」

と礼を言い、とりあえず箒で掃いてもらおうかなと言葉を紡ごうとした瞬間、くーは満面の笑みで

「えへへ、なんかトレジャーハンターみたいな気がするよね」

そう言つて楽しげに周辺をあさり始めました。

「遊びたいだけかっ!」

見かけに騙されるな四月一日少年よ。くーの頭の中は食べる↓遊ぶ↓寝る↓また食べるの繰り返しなのだ。とにかく掃除しようと手当りしだいに叩き（はたき）で叩きまくるとあるものを発見。

「何だ?コレ…」

なんとも可愛らしい『羽』がついたステッキのようなもの。その疑問に答えたのは侑子でした。

「それは『魔法』を使う時に使用する『杖』よ」

「『魔法』?」

「魔女っ子つて奴?お決まりの台詞とかで変身☆する奴?決めポーズとか必要な奴?それとも本当は格闘技しちゃう魔女っ子とか?」

四月一日とくーが突飛抜けた話を理解するまでに時間がかかりましたが侑子は無視して話を進めました。

「可愛い女の子が使つてる模造品(レプリカ)なんだけどね、もうすぐその女の子と逢うわね。そのお相手とも。…まあ違う相手だけど」

くーと違つて天然純粹培養みたいな子よと毒を吐く侑子。毒牙一発女と文句いうくー。四月一日は二人を無視して掃除を再開しまし

た。すると、ある所に目がいきつきました。

「アレ、ここだけなんかデカいような」

目の前にはデカい筒のような、人一人余裕で入れる大きなガラスばりのモノが『二つ』並んでいた。それは中まで見えないように何かが施されていてただ『何か』あるとしか言えない代物。くーも四月一日にくっ付きその、ものを覗ようとします。

「え？どれどれ…アダー！」

だが、侑子の手によってそれは止められた。

グイツと首元に手を回され、強制的に引っ張られ侑子に連れていかれました。

「駄目よ、『ソレ』はまだ」

ズルズルとくーの腕を掴み、くーはずるずると引きずられながら文句を言う。

「えく、ケチ!!いいじゃんか減るもんじゃあるまいし」

「誰がケチですって」

「ゆうこのドけちドS大酒女」

「あら褒め言葉ばかりじゃない」

「毒牙一発女！」

「やかましい」

そういつて侑子は無理やりくーを連れていきました。

「なんなんだ？」

四月一日は首をかしげつつ、もう一度目の前の大きなガラスを見やりました。

中が真っ黒でそれでいて何か眠っているような気がするのです。

そう、『何か』が。

でも疑問は『客』が来たことで消えていきました。

そして宝物庫はまた静かになります。

静かに、眠り続けるのです。静寂から切り離された空間で、ひっそりと。

◇◇◇

お店に来た客は困った『癖』がある女だった。自分がこの店に来た

理由もわからずなぜここにいるのかわからないと女は首を傾げ困った風に言っていた。

でも侑子が「ここは対価を払う代わりに願いをかなえるお店」と説明し「アナタの願い、叶えましょう」と妖しく押し売りすると女は、実は小指がうまく動かないと訴えた。

すると侑子は、一つの指輪を差し出した。彼女は言う。

「嵌めてもいいと思っただら嵌めて。捨てるもいいと思うのなら捨てて」

決して女に強要をすることはしなかった。ただ自分で決めろという。

女は困惑した様子でそれを受け取り、小指に嵌めた。

そしてマルとモロにつれられ女は帰って行った。

あの女からは黒いどろつとした『何か』が少なくともはあるがあふれ出していた。生理的に受け付けないものであるのは間違いない。あの時の嫌悪感を思い出して、くーは「げえ」と顔を歪めた。君尋が学校で憧れのひまわりちゃんと言っていると喜んで会話してる間、

『小指は大切なものよ』

侑子が言った言葉をじつくりと考えていたくー。

くーはクイクイと自分の小指をなんとなしに動かした。

「ねーゆうこ」

侑子がもたれる椅子に寄りかかりながらくーは声をかけました。

しかし侑子は黙ったままでした。

なのでくーは再度声を掛け直しました。

「ねー毒牙一発女」

「やかましい」

今度は反応しました。よほどの言葉が気に入らない様子。引きずるんじゃないわよと文句十口をみよーんと引つ張られた。

「いしやい」(痛い)

「生きるって痛いものよ、良かったわね勉強できて」

「へにややによほへご」(勉強じゃなくて拷問と読む)

「チツ、知恵をつけてきたようね」

舌打ちし手を放すとくーを見下ろし「どうしたの」と問うた。

くーは容赦なくのばされた赤くなつたほつぺを撫でつつ、疑問をぶつけた。

「あの女、『次』に来たときに終わっちゃうよ？」

小指を動かせないと言つた女のこと。くーは彼女のことを言つて  
いる、あの女は、わからないと困つた風に言つたが本当の意味を理解  
してはいなかった、それが女の命取りとなつたことだろう。

『小指』が動かない。終わる＝死。

「そうかもしれないわね」

くーはなんとなくわかつていたから、教えてあげないのかとゆうこ  
に尋ねる。

侑子は別段なんとも思わないらしい。淡々と言いかけた。

「いいのよ、慈善事業してるわけじゃないのよ」

確かに！くーは納得し

「ゆうこに似合わないもんね」

と言つと

「お黙り」

叱られた。でもめげないしよげないあきらめない。

「そうかー。『人』ってあーいうのもいるんだー」

面白いね、そういつてくーは笑つた。

侑子は目を細め、そつとくーの髪を撫でた。

「そうやってたくさん学びなさい。『知る』ことは決して悪いことでは  
ないわ。どんな事でも『知る』権利はある。それを拒むこともできる。  
アナタには選択できるのよ」

どんな『道』でも侑子は付け足した。

それからルンルン気分でお店にきた四月一日に飛びついたくーは  
彼を押し倒しながらさつそくお菓子を催促し、四月一日は「重いー」と  
言いながらくーの為にお菓子をつくらうとし、マルとモロが「お菓  
子ー！」「お菓子ー！」と踊りながらくーの周りをくるくる回り面白そ  
うに侑子は眺めました。

それからあの女がお店にまたやってきて、まだ自分の『癖』に気が

ついでなくて

侑子は「はやく気がつきなさい」と助言して女は理解できずに帰って

て  
四月一日に「ひまわりちゃんと会う時は気をつけなさい」と忠告して

四月一日は意味がわからんままアルバイトを終えて「明日も来てねー」と手を振って送り出してくれたくーに手を振り返して家に帰ろうとしたとき

憧れのひまわりちゃんと『偶然』出会って一緒にお茶しないと強引に誘われて

行った先にあの女を見かけて、あの女のどろっとしたものが濃くなっていく様子を吐き気がするくらい見て、そして女が『癖』を言い続けるたびに指輪が壊れていくのを感じて

女に「やめろ、外しちゃいけない!!」と叫ぼうとしたけど、女は指輪を横断歩道の真ん中で外し、体が身動きとれなくなった状態でトラックに轢かれてあっさりと死んだ。

その頃くーはぼんやりと縁側に座り

『癖』って大変だなー」

とのんきに肉まん頬張りながら呟いたそうなの。

(きょうは『人』の『癖』についてまなびました。)

### 03 『生きる上での意味』

四月一日は、女が遺した指輪を持ってお店にやってきた。

『癖』に気がつかなかった女のことについて四月一日は侑子に聞いただしていた。

彼曰く、忠告することはできたはずでは？と。でも侑子は言った。「彼女はウソをつくことを意識していなかった、していないということとは彼女にとつてそれはどうしようもない『癖』だった。『癖』というのは意識してできるものではないわ。仮に忠告したとしましょう、それでアナタだったら意識して直そうとする？ずっと意識していられる？不意に出してしまうことはないのかしら。『人』は完全ではないわ。自分が考えるよりもずっと脆い、だからこそミスをしてしまう。あなたが助言しなかったからと言って結果が変わるとは限らない。最後に決めるのはたとえ気がつかなくとも『自分』なのよ」

侑子は、四月一日が持つてきた、彼女が遺した指輪を手にとった。すると、指輪は音もなく崩れボロボロと下に落ちていく。侑子はそれを何とも思わない様子で見下ろした。

「侑子さんは俺がこの後どうなるかも全部知ってるんですか。だからあの女の人を助けなかった？」

「くーにも言ったのだけれどアナタにも同じこと言っただけあげるわ。ここは慈善事業をしているわけじゃないよの、ここは『対価を払う代わりに相応の願いを叶えるお店』。アレは相応の対価だったのよ」

「俺はどうなるんですか、願いが対価よりも大きいものだったら払えきれないなんてことはありませんか？」

「アナタがそう思うのならそうなのでしょうね、アナタがそう思わないのなら違うのでしょうか。決めるのはアナタ自身であり、アナタの世界である」

四月一日は頭がおかしくなりそうだと、頭を振る。

「意味わかんねえッス」

「わからなくていいのよ、わかっていたらつまらないじゃない？それに世界を知らないのは四月一日だけじゃないわ。くーもアナタと『同



じ』なのよ」

そういつて、侑子はマルとモロとプロレスごっこで遊んでいるくーを見やりました。

「あの子も今は『勉強中』なのよ」

「勉強中？そういえばくーちゃんつて侑子さんと親戚関係とか？」

「いいえ、まったくの赤の他人。ただ古い友人の遠い親戚の少女から古い友人の遠い親戚の『血』を受け継ぐくーを預かっただけよ」

「は？なんかややこしくなってきた…」

「いいのよ、今はややこしいままで」

そこで話は切られた。なぜなら

「君尋ー！」

ドス

「ぐえっ!!」

何処から来たのか気配なくくーが勢いよく四月一日に突進したからだ。受け止める事は出来たが反動で倒れ込む。くーは四月一日の上に抱き着き腹減った〜と言いまくる。

「おなか減った、なんか作ってー」

「それもそうね、あたし鯛茶漬け食べたいわ」

侑子も賛成し、ニヤリと笑みを浮かべる。

「お！いいねえ〜。ソレ！わたしも食べたいー！君尋作ってー」

作って作ってコールに四月一日はふるふる震え、そして我慢できずに叫んだ。

「女の子が突進するんじゃないやありません！」

くーはきよとんとした顔で

「え？まずそこなん？」

と突っ込んだ。

侑子は、心の内で感じていた。

もうすぐ、『アレ』を出す時だと。もうすぐ、『彼女』が来る時だと。

世界は小さく波紋を引き起こし世界は大きくうねりだす。全ては

『必然』の内に。



さつきからくーは寝ている侑子に話しかけてばかりいました。まったくと言っていいほど反応はありませんでした。ゆっさゆっさと揺らしてもまったく反応はありませんでした。椅子にもたれかかるその姿は死人でした。

「ゆうこく、暇だよ」

「……………」

「ゆうこく、遊んで」

「……………」

「ゆうこく、酒ばつか飲んでるから死んじゃうんだよ」

「死んでない、マルとモロで遊んでなさい」

即答で返してきたのでちゃんと生きてる。死人ではありませんでした。侑子はただ二日酔いで沈んでいるだけでした。マルとモロで遊んでも楽しいのですが、いかんせん二人は同じこと言うだけなのでつまらないのです。くーはもっと張り合いのある遊びがしたい様子。そんな時彼がようやくお使いから帰ってきました。

「ただいま」

「あ！君尋帰って来た！お帰りー！」

タツタカとくーは嬉しそうに彼を出迎えに行った。まるで母親の帰りを待ちわびた子供のようです。

「ただいま、くーちゃん」

四月一日は自分の帰りを喜んでくーをみて微笑みました。

ああ、なんかいいなあ。

ここは決して自分の『家』ではないのにまるで『帰ってくる家』のような気がするのです。自然にそう彼は思っていました。理由はまだよくわかっていませんでしたが、彼にとっては大きな変化といえるものでした。

四月一日は自分の腕に絡んで「遊んで君尋」とせがんでくるくーの頭を撫でながら、侑子に頼まれていた液○ベを彼女に渡しました。

「はい、どうぞ。少しは控えたらどうですか」

皆まで言わずともわかるはずと四月一日はそれ以上言葉にせず、視

線で訴えることにした。しかし侑子は一蹴し

「あたしから至福の時を奪おうなんて1万年早いのよ」

と液○○ベをぐびぐびと飲みほします。そして「うげえ〜」と言いながらシャキツとしだしました。

「ゆうこ、単純」

「くーも酒飲んでればわかるわよ」

「いらない、肉まんあればいいの。勿論君尋の作った肉まんが一番」

そう言つてニツコリと四月一日に微笑みました。

「ありがと」

ホント、可愛くて仕方がないと四月一日は思いました。二日酔いから復活した侑子がズバリ言いました。

「さて、出かけましょうか!」

「え?どつか出かけるんですか」

四月一日はくーと遊ぼうかと思つたのですが、というか遊ぶつもりだつたんですが侑子が無理矢理

「これもバイトよ」

と強制的に連れていくことになりました。しかもくーも同じようです。

「やったー!お出かけ〜」

はしやぎつぷりがすごいので四月一日は好奇心から聞いてました。

「そういうえばくーちゃんは外にでた事ないの?普段家にばかりいるよね?学校とか行かないの?」

くーはこてんと首を傾げ不思議そうに

「学校?どうして必要なの?」

と聞き返しました。

「え?だつて必要じゃ」

『ないか』と続けようとした言葉は遮られました。凍てつくような抑揚のない声に。

「生きる上で学校は必要なの?知識としての事を言っているのならわたしには必要ない。知識はすでにこの体に備わっている。以前の記憶は消去されたけど知識だけは消去されていないから。必要なのは

わたしが何で『生きてる』って事。何の為に『今』こうしているかという事」

「くー、ちゃん…」

まるで『人』が変わったようにガラリと印象を変えた事に戸惑いを隠せない四月一日。

すると侑子がタイミングよく声を掛けた。

「ホラくー、着替えてらっしゃい。置いていくわよ」

「ほーい！」

くーは固まる四月一日の脇を通り抜け自室へと走っていききました。

侑子は固まっている四月一日の背中に蹴りをいれました。

「えい」

「イタっ!？」

不意打ちだったが正気を取り戻すにはちようど良かったみたいで  
す。

「何ショックを受けた顔してるのよ」

「何すんスかっ?!」

「言ったでしょう、あの子は『勉強中』だと」

「は？」

「あの子に必要なのは『生きる上での意味』。学校以前の問題なのよ」  
それにくーは義務教育はすでに終えているわと侑子は付け足した。  
けどそれ以上くーの事を語ろうとはしませんでした。

四月一日は何やら、くーにとてつもない『何か』を感じました。

嫌な意味ではなく何かを捜す為に、くーは侑子の側にいるのだと思っただけでした。

## 04 『斬鉄剣げつと』

侑子のお手製通り抜け道から銀座へとやってきた一行。

「うわっ！おいしそうな匂いがいっぱい！」

興奮気味に四月一日の腕にしがみ付いたくーはさっそく「おなかすいた」とねだつてきました。ウサギの耳がついたしま模様の青のパーカーに黒のショートパンツに茶色のショートの格好のくー。パーカーを羽織った姿は可愛らしいものでした。四月一日と歩く姿はまるで仲の良い兄と妹のよう。

「あとでね」

と四月一日は苦笑いしつつ、侑子の目的地へと到着します。

「ついたついた」

「スポーツシヨップ？」

「ゆうこ、運動するの？酒ばっか飲んでるから健康に気を遣う年になつたんだね。歳よりだしねゆうこは」

無邪気に毒を吐くくーは

「くーは一言余計よ」

と侑子にほっぺをぐみよーんと伸ばされお仕置きされてました。

「いしやい」（痛い）

「いいから何買うんですか」

と冷静な四月一日に言われ満足したのか侑子はようやくくーを解放しました。

そしてお目当ての品物を見つけたご様子。

それを手に取りご満悦に浸ります。

「これよ、これー！」

彼女が手にしたものをみて「結構柔らかいな」とくーのほっぺをぐにぐぐにゆしてる四月一日と「うみゆー！」文句ありまくりそうなくーは怪訝な顔をしました。

「赤い金属バット？」

「そうよ、赤ってなかなかないのよねえ」

「ゆうこ、その格好で野球はないと思うよ」

歳考えろとクーはまた毒を吐きます。

「誰が野球やるって言ったかしら」

「野球以外で何に使うんですか？」

四月一日の疑問に侑子は自信たっぷりと言い切りました。

「決まってるじゃない、斬るのよ」

まったくもって意味不明。

◇◇◇

ゆうこの突撃！お宅訪問でゆうこは『ハナハナさん』家に突入した。

『ハナハナ』さんはサイト上の知り合いの『キンドーちゃん』ことゆうこに助けを求めたらしい。パソコンばかりに気になってしまつて家事や育児に手を付けられないからどうすればいいか？と。

ゆうこは『ハナハナさん』にパソコンをやめる『覚悟』はあるかと尋ねた。

『ハナハナさん』はやめたいんです、と涙ながらに言った。

ゆうこはなら『あの』パソコンをやめる手伝いをしましょうと言つた。

『ハナハナさん』はあのパソコン？と首を捻った。

ゆうこは対価に子供椅子を要求した。

『ハナハナさん』はそれを承諾した。

ゆうこは、君尋が背負っていた赤いバットに『斬鉄剣』とマジックで字を書いて机の上にあるパソコンだけを斬った。

君尋は驚愕してた。わたしは面白い！と喜んだ。

『ハナハナさん』は呆氣にとられてた。

ゆうこはこれでおしまいと微笑んで『ハナハナさん』に別れを言った。

『ハナハナさん』は呆然と斬れたパソコンを見つめていた。

帰り際、わたしは君尋が背負う、斬鉄剣が気になって気になって仕方がなかった。

「斬鉄剣ってこういうのなんだ、本物初めて見た」

「クーちゃん、これはバットなんだよ、只の赤いバットなんだよ」

君尋はすごい怖い顔して言ってくる。でもそれはわたしにはどう

でもいい。

「ゆうこ、これ頂戴？遊びで使う」

「ダメだよ?!こんな恐ろしいモノで遊んじゃダメ!」

君尋はすごい怖い顔して言ってくる。でもそれはわたしにはどうでもいい。

「駄目よ、金払いなさい。安くしといてあげるわ」

「侑子さんも売ろうとしないで!」

君尋はすごい怖い顔してゆうこを怒る。でもそれはわたしは気にしない。

「えー、幾ら?ゆうこの安いって高いなんだよね」

「くーちゃんも買おうとしないで!」

君尋はすごい怖い顔してわたしを怒る。でもそれは気にしない。

「出世払いにしといてあげるわ」

「えー!ホント!?やった!」

「侑子さーん!」

最後は泣きそうな声になって君尋が叫ぶ。あんまりにも君尋が怒るので

しようがないから『斬鉄剣』はいずれ遊ぶときに使おうと思ってしまふことにした。

出世払いっていつなんだろうと思いつながら。

(きょうは『本当に大切なモノって何?』についてまなびました。)

◇◇◇

ああ、暇だなく。

ぼんやりとくーは縁側の部分に座り込み降りしきる雨空を見上げました。

そしてずっと振り続ける雨の中、衣裳が濡れるのを構わずに外に出ていく彼女に言いました。

「ゆうこ、気合入ってる。ってというか雰囲気が違うね」

「アンタはだらけてるわね」

「だってわたしには関係ないもん」

そういつてくーは眼鏡少年Ⅱ四月一日君尋が用意した肉まんを

ひよいつと手に取りぱくつとかぶりつきました。  
んぐんぐ…

「……うま〜！」

ほっぺがおちそうなほどとろけた笑みを浮かべ、君尋が作った肉まんを大絶賛しました。

「君尋、これめっちゃうまいよー！」

彼女はこうしてこれが好物なのかわかりませんでした。

ただなんとなく好きな感じが残っていました。

「そう？良かった。」

君尋は素直に感情を出すこの少女が可愛くて仕方がありませんでした。

まるで妹が出来た気持ちになれたからです。

「くーちゃんは好き嫌いとかしなくて嬉しいな、細かい注文とかしないし。どっかの誰かさんと違って」

「うん、食べるの大好きだし。食べられれば何でもいい」

「だからって君のその小さな体に16人前の特盛親子丼があつという間に消えていくのは不思議だなんていうかちゃんと消化されてるのか心配だよ」

「ミラクルだね」

「七不思議でもいいかもしれないよ」

「不毛な会話は終了しなさい、来たわ」

ゆうこが会話をストップさせると同時に彼らはやってきました。

『くー』は肉まんを手にしたまま頬杖ついてお客様とやらの視線を向けました。

この雨は誰が誘ったかそれはさておき、目の前に魔法のように現れた少年と少年の腕の中に眠る少女。

「貴方が次元の魔女ですかっ!?!」

「そうとも呼ばれているわ、ね」

ゆうこが淡々と言っている…。ああ、何かが始まるのかな、なんて考えつつまた一口で肉まんを食べ終える。そしてまた肉まんを片手に持ち必死に叫ぶ少年を見守りました。



「さくらを!! さくらを助けてくださいっ!」

少年と眠りについた少女、黒装束に身を包んだ目つきが悪い長身の男にへらへらと笑みを浮かべる青年。

皆、様々な異国の衣装に身を包みゆうこに何かお願いをしにきたという。

少年たちは侑子に『対価』を払って異世界に行くらしい。モコナがぴよんぴよん跳ねている。でもまた行かないらしい。侑子が「もう一人来る」と言って少年たちは怪訝な様子だった。

ああ、暇だなく。

バクバクと肉まんを食べるスピードは緩むことはなくただすべては風のように過ぎ去っていくのだとクーは思った。

けど、違った。最後に来た人物を目にした時にクーは囚われてしまった。

あの紅い瞳に。龍の咆哮のようなものが庭に響き渡り天から一筋の雷が地面に突き刺さった。

あの異国の少年たちが驚き身を竦ませ君尋は仰天しまくっていてクーも顔を庇って目が眩みそうな視界の先を見定めた。

侑子だけが平然とし、「派手な登場ね」と呟いた。光が収まった場所には片膝をつき頭をたれている形でいる人物。艶やかな黒髪が揺れ顔がゆつくりと上がっていく。

整った顔立ち、それよりも目を奪われたのが紅い瞳だった。

少女と呼んでいいのかわからないがその人はまず侑子に目をやった。

侑子はその少女の視線を黙った受け止めた後こういった。

「……………こうして逢うのは初めてかしらね…。蒼龍姫」

「…貴女が次元の魔女、か」

「ええ」

「私の対価は」

「既に払ってもらっているわ」

「……………どうか、あの子を頼む……………」

頭を下げて侑子に懇願した。侑子は浅く頷き「わかっているわ」と

言う。あの人がゆつくりとくーを見た。

黒髪で血のような真つ赤な瞳がくーを捉える。

くーはなぜか、身動きできなくなった。

肉まんを持っていた手が力が入らなくなりもったいなくもあるが肉まんは床に落ちてしまう。

でもくーはそれを気にする余裕もなくむしろ眼中にあらざった。

ただ、目の前の少女に釘付けになってしまった。

少女は言った。たぶん、くーに向けて。

「……………かならず、また逢えるよ。』』」

寂しそうに顔を歪めでも無理やりに笑顔になってその少女はくーに言ったのだ。

「……………っー！」

ひゅつと喉が鳴った。

何か言わなくちゃ、何か言わなくちゃ！

だがくーの意思とは裏腹に体は石のように固まり床に吸いつけられたように動かなかった。声さえもまるで喋るといふ行為さえ封印されてしまったかのようになにも音を出せなかつた。

手を伸ばしたいのに、待ってと叫びたいのに！

「その時まで、さようなら」

『』』とあの人の口だけが動いた。

あの人の姿は少年たちと一緒に消えてしまった。

くーが動けるようになった時はあの人は行ってしまった後で雨は止んだ。

でもくーの心は晴れない。

(どうして『』』とあの少女はそうわたしを呼ぶのだ。どうしてわたしは何も言えなかつたの)

「…くーちゃん…」

君尋がくーの様子を見て心配そうに名を呼んだ。

くーは胸が痛くて苦しくてぎゅつと服越しに手で心臓部分を掴んだ。

でも痛みは治まるどころか増すばかり。

(わたしはこの感情を知らない。知らないはずなのにどうして知っている気がするんだ)

「…く、るしい…なんで、…なんで?」

なんで、なんでと言い続けた。君尋は戸惑った顔をしてクーを見た。

侑子だけがクーの疑問に答えた。

「それは『寂しい』からよ」と。

「…さびしい…」

(わたしは寂しい? どうしてだろう。見ず知らずの人にどうしてそう感じるんだろう)

「今の貴女はまるで『母親』に置いていかれた子供みたいね」

侑子がそう言ったのに気がつかすにクーはただあの人を立ていた場所を見つめ続けた。

◇◇◇

あの紅い瞳の少女は一体何なんだ?

自問自答を繰り返し、繰り返しては堂々巡りして撃沈する。

なんで問うても答えが見つからない。当たり前かもしれない。だってわたしは、何も『知らない』んだから。ただこみ上げてくるのは『懐かしい』気持ちだけ。

それからあの人と出会って、あの人がこの世界を旅立ってからクーはちよつと食欲不振になった。とかぼんやりとすることが増えた。縁側でぼーつと座りこみ、空を見上げてはため息の連続。見かねて君彦が声を掛けた。

「ホラー!クーちゃんの大好物の肉まんだよ?!しかも超特大バージョン」

「……………いらない、君尋食べれば」

あつさりと振られた。だが彼はめげない。

「あー!だったら今俺が考案してるスペシャル特大アップルパイ食べる? すっごいおいしいよ」

「……………いらない、君尋食べなよ」

二度目振られた。今度は駄目だった。

「くーちゃん……いつものくーちゃんじゃないっ!」

ダツシユで泣きながら君尋は廊下を駆けていった。「いつものくーちゃんがいい〜」と叫びながら。

「……………」

くーは内心なんだそら?と言いたかったがやっぱり気持ちが沈んでいた。

だから君尋が駆けていった方向をちらりと見ただけでそっちはおしまい。またぼんやりと空を見上げることにした。

「くーは今捜してるんだね〜」

のんきに彼女の膝に座る黒モコナは喋った。

「そう、捜してる」

「見つければいいね〜」

何を、とはモコナは言わなかった。ただ一緒にいるだけ。

「うん」

くーはそう返事したまた黙った。

あの人は誰?と問うても答えが出ない事を知りながらくーは何度も何度も答えを見つけようとしていた。

※

一方その頃、泣きながら廊下駆けて行った君尋は、「くーちゃんが……くーちゃんがあああああああ!」と未だ叫んでいた。

そこに「煩い」と侘子登場。スラリとした長い脚で遠慮なくげしつ!と蹴った。

当然の如く君尋は悲鳴あげながら

「どうあ!?!」とごろごろどガンツ!

壁にぶつかつた。2回ぐらい回っていた。そして当然の如く復活し抗議の声を上げた。

「何すんスかっ!?!」

「ちよつとくーの食べる量が減つたくらいでガタガタやかましいのよ。男のクセに女々しいわね」

「何ってんスかっ!?!俺としちゃ大問題ですよ!俺の可愛いくーちゃんにもしものことがあつたらどうするんですよ!?!」

君尋の叫びに侑子は、真剣そのものの表情を作り眩いた。

「…そうね…」

その雰囲気にも君尋は思わず息を呑んだ。もしやそれほど重大な事なのかと。

「……………」(ゴクリ)

そして侑子は口を開いた。

「まず食費が浮くわ」

「まずそっちかよっ！」(ビシイイイイイ！)

とにかく、くーが心配で心配でたまらない君尋は次の日、憧れのひまわりちゃんとお昼を一緒に食べるチャンスを得たので思い切って相談してみることにしました。

## 05 『知らずに君を追っているから』

浮かれたいけどくーの事が気になって気になってしょうがない君尋。いつもの自分だったら隣にひまわりちゃんがいることに喜んでるが今はその実感すらない。

「あのさ、普段ご飯をバクバクおいしそうに食べてた女の子が急にご飯を食べれなくなっちゃうことってあるのかな？溜息ばかりついてぼうつとしたりして話しかけても上の空みたいな感じで」

ひまわりちゃんは、首をかしげて思った事を口にした。

「うーん、それって『恋煩い』？」

「こっ！恋煩い!？」

君尋の頭に『恋煩い』のデカイ字がガン！と衝撃を与えた。それは相当強かった様で半分君尋は放心状態へと陥った。

「くーちゃんがくーちゃんが俺のくーちゃんが」

頭の中ではなぜか花畑を走るくーを妄想中。ひまわりちゃんはその様をおかしそうに笑みを浮かべながら眺め「四月一日君ってその子のこと好きなんだね」と言った。

だが君尋は放心してるので彼女の言葉は必然的にスルー。彼の頭を占めているのはくーが誰かに『恋』をしたことだけ。ひまわりちゃんはカバンからごそごそと何かをとり出した。

「ね、その子って何座？」

「え？」

「相性占いの本持つてるの、四月一日君はいつ生まれ？調べてあげる」

「ええ、俺？…4月1日…。くーちゃんは…：知らなかった。そういえば…」

(俺は何も知らない。くーちゃんの事を)

それもまた君尋にある意味ショックを与えた。

「その子の誕生日はわからないんだ…うーん、私と相性はぼつちりなんだけど」

「ありがとう、わざわざ教えてくれて」

「ううん、気にしないで。もしだったらその子に誕生日分ったら教え

てあげるね?」

「…うん、聞いてみるよ」

なんとか返事だけをかえすことはできたが、君尋の意識はお店にいるであろう一人の少女へと囚われていた。今もまだ、あの子は空を見上げているのだろうか、と。

学校が終わったらずくに君尋はバイト先を目指し息が切れるくらい足を駆けていた。玄関を開けていつもよりも早足で開いた襖の先には侑子がぐびぐびと酒を煽るように飲んでいった。

「バイトしにきましたー! って昼間から酒かよっ!？」

「あらそれがあたしだもの」

「少しはくーちゃんの心配とかしないんですかっ!？」

視線はすでにくーちゃんの背中を捜している。が、ここにはいないらしいと分ると君尋の足は自然に動いていた。そこに侑子が声を掛けた。

「心配したところで解決するものでもないでしょう」

ぐさつ、確かにその通りである。でも、理屈じゃない。そう強く思った彼は、

「そりゃ、そうですねけど…でも俺は…心配なんです…」

後半絞り出すように切なげに言ったのを本人はわかっていない。

その様子に侑子は何かピン!とキタようだ。

「アラ…」

口元に手をやり面白そうなもんを発見したような顔になっていく。

君尋はそれを訝しみ「…ナンスカ…」と睨んだ。

「…いいくえく? オホホホホ。楽しそうな事でもいいじゃない? 『若

い』って」

「は!？」

「オホホホホホ」

「モコナもオホホホホ」

いつの間にか出現した黒モコナと侑子と同じ動作をして君尋を見る。やる。

二人?に「オホホホホ」と言われ続け我慢できるほど君尋は大人

ではなかった。

「だから何なんすかつ!？」

笑われる理由が理解できなくて君尋は我慢できずに叫ぶ。

そんな時、黒モコナが突然メキョっ!と目を大きく開き口をぱかりと大きく開け

「届いたー」

とのんきに何かを吐いた。

「何かキター!？」

「さっそく届きものが来たようね」

侑子の手にはほい!とブツを渡しモコナは「くーのどこ行ってこよー」とびよんびよん飛んで行った。残された君尋と侑子。視線は侑子に預けられた一つの果物に注がれる。

「…それ林檎ですか？」

「サあ?どうかしら。これで何か作ってよ。四月一日」

「…別にいいですけど…それってどっから」

「小狼達を送ってきてくれたものよ」

「へえ、すごいっすね。普通に」

感心する君尋にほいつ!と林檎?を投げ侑子はこんなことをアドバイスしました。

「もしかしたら」

「はい?」

「くーも食べるんじゃないかしら?珍しいものだから」

「すぐ作ってきますっ!」

君尋は音速の如く台所を目指して消えた。独り残る侑子は「フフ」と妖しく微笑んだ。恋ねえ?と思いつながら。

◇◇◇

食べて欲しい。いつものくーちゃんに戻って欲しい。

その願いを込めて君尋はいつもより丁寧に心こめて作った。そして、縁側でぼーっと座り込んでいる彼女の隣に座る。彼女は君尋が隣に座ったことに気がつくこともなく空を見上げるばかり。君尋は意を決してバツとくーの前に出した。



くーはいきなり目の前に差し出された皿をぱちくりと見て間をあげて一言。

「……なにこれ……」

「林檎？のコンポートだよ」

なぜ？をつけたかは名前がわからないからだ。でもそこは大した問題にならないのでスルー。くーは興味なさげに一蹴した。

「……いらない……」

だが君尋はめげないしよげないあきらめないの精神で言葉が続けた。

「異世界の林檎らしいよ、小狼君たちが送ってきてくれたんだって。だから「食べる」え？」

言い終わらぬ間に用意していたフォークは消え、目の前のくーの手に。そして彼女はむしゃむしゃと大きき口で食べていた。君尋は驚いて固まって台詞も止まる。

「……おいしい……」

「くーちゃんが、食べた……」

これは奇跡？それともおなががすいていたから？どちらでもいい。もうなんでもいい。

心底、君尋は思った。

「おいしいね、君尋」

久しぶりに見るくーの笑顔。こみ上げてくる想いが君尋を動かす。身体が動いてただ嬉しかったのだ、彼は。

「良かったー！」

むぎゅっ

「おわっ!？」

「良かった良かったー！」

嬉しさのあまりくーを抱きしめていることにすら彼は気がついていない。

くーは理解できずにただ君尋に抱きすくめられたまま一時呆然。だが悪い気はしなかった。ぎゅっと君尋の首に手を回し

「ありがと、君尋」

と小さく礼を言った。

(迷い子は少しだけ温かさに包まれた)

## 06 『それが決められたことなら覆す』

クーはいつも通りの食欲を取り戻した。最近のクーのマイブームは『八宝菜』。お気に入りなので毎日17人前もりもり食べている。食欲旺盛でいつも食費を圧迫している。

でも本人はまったく気にせずに笑顔で「育ちざかりだから仕方ないよ」と言っただけ。昨日まで頑なに食べることを拒否していた本人は

「もぐもぐおぐおぐおぐおぐ?」「これでおしまい?」

「クーちゃんまず口の中のもの食べ終わってから喋ろうね」

君尋に注意されクーはもぐもぐ言っていた口を閉じ、んぐんぐと飲み込んだ。

そして同じセリフをもう一度言う。空になったどんぶりを片手に首を傾げながら。

「これでぐ飯おしまい?」

「うんおしまい」

君尋は爽やかに終了宣言を出した。ちえくとクーは拗ねた顔して我慢することに。

だってこれからおでかけなのだ。侑子がクーと君尋に言った。

「さっそくクーが元気になった所で占いにでも行ってみましょーか」

「わーい待ってました!おでかけおでかけー」

「は?いきなり?」

なんで?と君尋は突然のことに混乱してしまう。あれよあれよと言う間に、一行はお外へおでかけに。くまさんの耳がついた紫のパーカーを上に着込んで下は黒のプリーツスカートをはいて紫のチェック柄のスニーカーを履いたクーと、いつもの制服におっきなカバン片腕に持ちもう片方の手でクーと手を繋いだ君尋。彼の表情はどこか納得いかない様子で

「なんで俺がコイツ持って行かないやならねえんすか…」

と愚痴る。その隣でクーは無邪気に声を上げて喜んでいる。

「わーい!モコナとお出かけー」

「わーい！くーとおでかけもごっ」

「喋るな！バレルだろ!？」

「アンタがデカい声ださなきやバレないわよ」

侑子のツツコミに君尋は「あ」と気がついた様子。

すでに行き交う女性たちはモコナをぬいぐるみと勘違いしてそれを君尋が持っていることにくすくすと忍び笑い。だがそれだけが理由ではないらしい。

仲良さげにくーと手を繋いで歩いているので仲良し兄妹と微笑ましいとも見て取れたのだろう。

さて突然のお出かけ先は一体何処やら。

◇◇◇

「そいでどこ行くの？」

「くーちゃん聞いてなかったの？」

「うん腹空いて全然聞こえなかった。君尋くおなかすいたく」

「えっ！どこで!？」

いつものことながら突然である。くーのおなかすいたコールは。が、しかし君尋は思った。

これが俺のくーちゃんだよ、やっぱコレなんだよ！俺が求めてんのは…

「やっぱイイ！」

声に出してすることに気がつかないで本人は叫んだ。くーがこうして自分に飯を要求してくることに快感を覚えてきているのだ。これは人を末期症状と呼ぶ。そんな変な君尋を無視して侑子は

「さて…おばあちゃんの家はあっちね」

と言った。が、くーは突如「違うよ」と否定した。侑子は目を細め無言でくーを見つめた。

君尋は彼女の雰囲気ガラリと変わってしまった事に戸惑いながら声をかけた。

「くー、ちゃん？」

「違うよ、そっちじゃない。こっち」

くーはまるで何かに導かれるかのように君尋の手を無理やり引つ

張りながら歩き出す。侑子は黙ってそれに続いた。

「くーちゃん…。一体どうし」「静かに」

心配して声を出した君尋に侑子は口元に指先を立てて静かにしろとジェスチャーする。

「え?」

「見なさい。くーは今何かを感じているのよ。声を掛けない方がいいわ」

侑子の言った通り、くーの瞳にさつきまでの無邪気な様子は一切なくまるで神の宣託を受けた神子のように感じられる。まっすぐに目的地が分かっただけで迷わずに歩いていき結局住宅街。そして一軒の家の前までたどり着いた。くーはその家の前まで来るとピタリと止まり

「……はれ?…なんでこんなところ来てんの?」

と周りをきよろきよろ見回すばかり。見かねて君尋が教えた。

戸惑いを無理やり隠しながら。決してくーに悟られないように。

「くーちゃんが連れてきたんだよ」

「ほえ、そうなん?わからなかった」

にへらと笑うくーは、さつきまでの雰囲気さがさっぱりとなくなってしまうている。そして家の玄関がガラリと開きある人が出てきた。

「いらっしやい、侑子ちゃん」

「お久しぶりおばあちゃん」

普段の侑子なら考えられないほどフレンドリーな様子にくーと君尋は顔を見合わせた。

「?」

なんか優しそうなおばあちゃんが現れた。

◇◇◇

「くーちゃん、かりんとう食べる?」

「食べるー!」

おばあちゃんは皿いっぱい入っているかりんとうの山をくーに差し出した。

ニコニコと嬉しそうに食べるくーを見つめ、おばあちゃんもほんわ

りと微笑み返す。

「さて、じゃあやろうか」

おばあちゃんは占い師だった。

侑子は君尋に本当の占い師を教えようとしていた。偽者ではなく本物を。

おばあちゃんは必要以上の言葉は言わずに君尋にとって本当に聞きたいことを教えてくれた。君尋が今一番聞きたいことは

「…安心しい、っ両親はちゃんと成仏されておるよ」

そう、それだった。君尋はおばあちゃんに

「…あり、がとうございます…」

と声を震わせて頭を下げた。

(俺、ちゃんと生きてるから。今、少なくとも前よりは『幸せ』と感じることができてるから。毎日、毎日そう思う。大好きな両親だったからこそそう伝えたいと思ってた。安らかに眠っていて欲しい。それが俺の心に引っかかっていた。だって俺は視えるけど会いたい人は視えないんだ。この力が危ないものなのか、わからない。でも最初からこの力がなかったら侑子さんのお店に行くこともなかった。アルバイトすることもなかった。くーちゃんに、逢うこともなかった。だから、感謝の気持ちで今はいっぱいだ)

思わず零れた言葉は、君尋の本当の気持ちだった。

「俺、両親から生まれてこれて良かったです」

「そうやね。これからもいい兆しがいっぱいあるかもしれないね。友達とか。気になる女の子とかねえ？」

「え!? 気になる女の子!?!」

おばあちゃんの言葉に君尋の心臓がドキリ!と高鳴る。そしてなぜか視線はモコナと無邪気に戯れている、くーに向けられた。

「いだっ! 蹴るの卑怯だー!」

「モコナ絞め殺そうとしたくせにー」

「してないモン、抱きしめてあげようとしてただけだもん」

「首絞めながら抱き込もうとしてたんだよー」

「モコナの首ってどこかわかんないから別にいーじゃん!」

「酷ー!」

君尋はちよつと首を傾げながら違うような気がしないでもないと思つた。

「……………ある意味気になってんだよな…」

そう、確かに気になつてしようがないのだ。とにかく。だがこれがどんな意味でなのかは君尋にはわからなかつた。

『恋』なんて出だしはそんなもんでしよう。

おばあちゃんと侑子はおかしそうに笑つた。

「若いつてええわな〜」

「若いつていいわね〜」

◇◇◇

最後におばあちゃんは君尋にこんな事を教えてくれた。

くーが最後のかりんとうをモコナと奪い合いしている様を微笑ましそうに見守りながら。

「君尋君は、『傍観者』にならんでもええんよ?」

「え?」

最初は何を言っているのか理解できなかった。

「ほんとに大好きな子が困つてんのやったら迷わんで助けにいきや」  
「……………」

でも大好きな子と言われて、なんとなくわかつた。

「苦しゆうて仕方ないかもしれん。その子にとっては必要な『筋書き』なのかもしれないけど、でもその子の苦しむところ悲しむところ。大好きやったら見たくないやろ?」

「…はい……………」

大切な人ほど、その人が悲しむようなことはさせたくないし見せたくない。出来るなら守つてあげたい。

「やったら、『その時』が来たら迎えに行つたらええ。自分が思うように動いたらええ。『心』は自由なんやから。男やったら気張いいや?」  
「…はい……………」

今は『その時』がどんな時なのかわからない。けど君尋は決めた。  
『その時』が来たら大好きな子を守ろうつて。

(その先で待ち受ける者がなんであろうと、俺は守る)



## 07 『選択肢は一つではない』

くーside

「暑い。ゆうこくエアコン所望する」

「……………」

日本の夏はとても暑い。じめつとしていてカラッとしていない。実際今ゆうこはくたばっていた。次元の魔女も夏には勝てないらしい。

「暑い。ゆうこくエアコン所望するぞ」

「……………」

屍状態。なので呼んでも答えは返ってこず。屍状態だから。

「暑い。ゆうこくおなか減った」

「五月蠅い、なんかあるでしょうが。勝手に食べなさい」

屍から脱したようだ。面倒くさそうに言い返す。

「えく？メンドイ。ゆうこなんか作って」

「あたしが作ると思ってるの」

「思っていない！」

そこはきっぱり言い返す。だって実際そんなことはないと分かり切っているから。

「だったら我慢なさい」

「できん！」

そこはきっぱり言い返す。だって実際そんなことはないと分かり切っているから。

「四月一日が来るまで我慢なさい」

「えく？君尋いつ帰ってるの？っていうか一緒に暮らせばいいのに」

わたしの疑問にゆうこはなぜか苦笑した。

「帰ってくる、ね。ねえ、くーにとってここは『帰る家』なのかしら？」

珍しくゆうこの意地悪な質問。わたしはそれが当たり前のことならんじゃないかって思った。だからこう返した。

「違うの？」

と。そしたらゆうこは

「それも『選択肢の内』ね」

とわたしの頬に手を伸ばしてきた。ゆうこの指先はすべすべでほんのりと温かかった。

「自分が壊れてしまう前に逃げることも必要なのよ。くー」  
「にげる?」

ゆうこの赤い瞳がわたしを捕捉する。それは『あの人』と同じ紅。一瞬でわたしを束縛するの。

「そう。立ち向かうことも必要。見定めることも必要。逃げることも必要。何か欠けても真実は応えてはくれない。最後を迎える瞬間を見誤ってはいけないわ」

「やい、い?」

さいごつてなに。にげるってじゆうようなことなの?

わたしはわたしの頬を撫でるゆうこの手に縋ってた。ぎゅって。放さないように。

ゆうこはそれ以上何も言わずに黙ってわたしの頬を撫でてくれた。  
(ひつようなのはにげること?)

◇◇◇

「暑いから怪談話しましょー」

「楽しそうだから賛成ー」

「かいだん☆かいだん。ドロドロ」

「いきなりなんですか!」

君尋がお店に来たとたん二人と一匹のテンションはMAX状態。なんか百物語やるぞ〜!という雰囲気になったらしい。

理由? 勿論、と侑子は不敵に微笑んだ。どこに向けての視線かわかりませんが角度はばっちり。

「ノリよ」

ビシィイ!

「ノリかいっ!」

暑い中君尋のツツコミは反応抜群。日々の修行のおかげかもしれない。さくて。今宵は怪談話に華を咲かせるらしい。

なぜか百目鬼君の御寺にていきなり百物語することになったのメ  
ンバーも初対面なわけで、皆浴衣姿であいさつ。髪の毛二つにしばつ  
てカランコロンと下駄を鳴らして近づいてきた女の子はぺこりと丁  
寧に挨拶をした。

「初めまして、九軒ひまわりです。侑子さんとくーちゃんですよね？」  
「ええ、あたしが壱原侑子。この子が」

「くーです。よろしくおねがいします。最近のマイブームは君尋か  
ら餌付けされることですよ」

なんとも爆弾発言かましてくるのはたとえ初対面の人の前とい  
えど彼女が独自のスタイルを崩さないからか。君尋にしてみれば  
ツツコミどころ満載である。

「くーちゃんそれマイブームって言わないから！」

実際突っ込んでいるし。ひまわりちゃんはクスクスと可愛らしい  
声で笑いながら優しい目でくーを見つめた。

「可愛い自己紹介だね。四月一日君が気になってしかたないのも無理  
ないかも」

「気になる？ご飯が？最近流行の料理とか？」

「ちよっ、ひまわりちゃん!」

意味理解できずに首かしげるくーと慌てる君尋。どっちもどっち  
である。

そんな二人の背後にもう一人メンバー出現。

「よう」

「あ、…百目鬼」

男らしくびしい！と見事浴衣着こなしている君尋の友達？の百目  
鬼。寡黙な男と第一印象を与えるみたいだが実際はどうであろう。  
くーはなんかわからんが気に入ったらしく、

「くーです！最近のマイブームは君尋に餌付けされることです！」

と気合十分な大声出して百目鬼の前に立つ。君尋は「ガン!？」と  
ショック受けて顎外しそうなほど口開ける。

「……………」

百目鬼は、キラキラと目を輝かせるくーを見下ろし

「ふーん。よろしく」

とくーの柔らかな髪を大きな手で撫でた。

「はによーん」

とくーは気持ちよさそうにイイ顔してにやけた。

反対に君尋はさらさらと砂のように抜け殻となった。侑子は意地悪そうににやにやしていた。隠れていたモコナもにやにやしていた。

(四月一日にライバル出現？ウッフ面白そうね)

◇◇◇

メンバーは揃った。侑子にくーに四月一日、百目鬼君、ひまわりちゃんの五人。

本来の百物語は話を百回続けていくというのがルールだが今回は一人一つづつ話をしていこうと言う風に変更。ちなみにくーは除外。なんでかって？

侑子がそういうから。が、素直にくーが従う女の子ではない。

それなりに暴れたくーをゆうこが叩いておとなしくさせてさつきから不満げなくーは侑子を睨んでばかり。ジト目で。だが侑子はスルーしまくり。さて準備はあと蠟燭に火を灯してそれぞれが持つていくだけ。ここでくーが動きました。隙をついて蠟燭を奪い

「わたしも蠟燭持つ！」

と一生懸命主張するもあつさりと侑子に蠟燭を取り上げられ

「くー、アンタはあたしと一緒よ。勿論蠟燭はあ・た・しが持つ♪」

「ムー・毒牙一発ゆうこメエー！」

「引きずるわねそのネタ。くーが持つてて火事になったら洒落にならないのよ」

くーはビシィ！と手をあげ「じゃあじゃあー！」と言い募る。百目鬼の背中に飛びつきながら

「百目鬼さんといー？ねー駄目？」

と可愛く訴える。かなり百目鬼がお気に召したらしい。

「……………」

「くーちゃん！俺とじゃなくて百目鬼と!？」

ていうか離れろー！と君尋がキレ気味に叫んで百目鬼を睨みつけ

る。抱きつかれて睨みつかれている本人は無表情。すかさず侑子が「駄目」と叱った。くーは「ケツ」と言いながらしぶしぶ侑子の方に戻ってきてドスつと不満そうに腰かけた。

「さて、始めましょうか？」

百物語のはじまり、はじまり。

◇◇◇

色々忙しいことは起こった。それぞれが怖い怖い話をしていて途中で雰囲気がおかしくなって実はと百目鬼が言ったのは隣の襖開いたところに明日葬式予定の御遺体を預かっているという暴露に怖さは本格さを増していつて「もうやめよう」と言った君尋に侑子が「途中でやめては大変なことになる」と脅してまた再開させてついに侑子の番になった時に変な気配を後ろで感じていたくーは思わず侑子の腕にしがみ付いていて侑子は振り払う事はせずにそのままに君尋たちに言った。

「うしろの、だあれ？」

それから怖い事は次から次へと起こったが、百目鬼の活躍に無事なきを得たメンバー。

くーは尊敬のまなざしで百目鬼を見つめ、

君尋は嫉妬の睨みを百目鬼に向け、

百目鬼は面白そうだとくーと君尋を交互に眺め、

ひまわりちゃんもモコナと意志疎通していて、

侑子はおかしな光景にどこか、羨望を含ませた視線で若い少年少女を見つめた。

※

さつき話せなかったことわたしも言うよとくーは淡々と物語を唄う。

「あのね、わたしは知らない話なの。でも鮮明に覚えている気がするの」

異国の地、こことは違う場所で一組の男と少女が結婚式をしていた。



ああああああああああ!!』

少女は、どこかに逃げてしまう。全てを投げ捨てて逃げてしまう。記憶すらも投げ捨てて。何もかもを捨てて。少女は、逃げる。誰も自分を知らない、追いかけてこられない『世界』へ。

◇◇◇

「おしまい、怖くなかったよね」

「くーちゃん……それって」

「君尋、そんな複雑そうな顔しないでよ。ひまわりさんも百日鬼さんも」

「これはただの『御話』、おとぎ話なんだから」

「……………」

侑子だけは何も言わずただ黙ったままだった。

「ただ時々頭の隅に浮かび上がるだけ」

そういつてくーは夜空を見上げた。

「ただ、そうおもう、だけなんだから」

スイカをかじりながら、くーはひたすら夜空を見上げ続けた。

(果てして本当に『御話』なのだろうか?)

誰かが、唄っていた。透き通るような泉にも勝るであろう透明度の高い声。心にすうっと溶け込んでいくような優しい声。でもどこか悲しい唄。

私はアナタの半身、私はアナタの鏡。求めてください、手を伸ばしてください。

私は正義です、私は悪です。私は両方を叶えます。私は賛成を反対をします。

私は全てを受け入れるでしょう。私は全てを拒むでしょう。

アナタが千の都市を壊せと言うなら私は千の都市を壊しましょう。

アナタが一万の人を癒せというなら私は一万の人を癒しましょう。

アナタがいて私、私がいてアナタ。

私は唄います。私は唄いつづけます。アナタが目覚めるその時まで。この声が枯れ果てようとも私は唄いつづけます。

アナタの為に、アナタの為にだけ。私はアナタの竜、私はアナタだけの竜。

求めてください、手を伸ばしてください。私はアナタの隣にいます、私はアナタの目の前にいます。

アナタが涙を零すならそれを宝石に変えましょう。

アナタが血を流すのなら全てをなかつたことにしましょう。

私はアナタの竜、私はアナタだけの竜。

彼のものは唄う。声を枯らし真つ暗な闇の中、孤独に耐えながら翼を閉じて飛ぶことをせず天上に輝くたった一つの明かりの為にだけに彼のものは唄いつづける。紅い竜はずっと自分の半身を待ち続ける。

◇◇◇

ずっと頭の中で木霊する歌声はどこか懐かしくてどこか胸を締め付けられてどこか、愛しくて。

「……………あ、…それは…」

あれは誰の為に唄っているんだろうかとかとくーは寝ぼけ眼で思った。けど、唄はもう耳を澄ませても聞こえない。だって



「くー! あっさだよ」

ぺしつと黒モコナに顔面を蹴られたから。くーはパチリと意識をはっきりとさせ、応戦する。

「おう!? いきなり顔面キックとはやるなくお主!」

「きやくモコナ喰われるう」

「妖怪大食いくー様登場也〜! 悪い子は茹でてマヨネーズかけて喰っちまうぞ〜!」

「きやく」

ぴよーんとくーの上から跳びはねてモコナは廊下へと逃げた。それをくーは布団跳ね飛ばして追いかける。

「待て待て!」

ドタドタ

「きやく」

ぴよーん、ぴよーん!

「待て待て!」

ドタドタ、ドタドタ!

朝から元気に廊下を駆けまわる一人と一匹に「朝からやかましいわね…」と青筋立てて布団からのそりと起き上った侑子の耳にあの悲し気な唄が耳に入った。

『~~~~~♪』

誰も気がつかない孤独な唄。彼の竜の歌声に耳を澄ませました。

「……そうね、たった一人の為に唄いづづける。それは永遠とも同じでしょうね」

気がついて私を思い出して。決して強要はしない。ただ気がついて欲しいと願いつづけて祈り続けて唄いづづける。

「まだ、時は満ちていないわ」

誰に言うでもなく侑子はポツリと呟いた。まだあの子は知らない、まだあの子は目覚める時ではない。それでも紅い竜は孤独にたった一人の少女の為に唄いづづける。それが少女の為だからと信じて。

◇◇◇

今日は天気がいいのでお外でピクニック。公園で野球をすること

になったいつものメンバー。くーは声を張り上げて最初はピツチャーの君尋に声援を送る。

「君尋ー！頑張れ」

「よっしやー！」

次は本命の百目鬼へ。若干先ほどよりも気合が違う。

「百目鬼さーん！メツチャ好きー！」

「ん」

「ぬあんとー!?!」

ガツテム!?!と衝撃走る君尋に対し、バッターで赤い斬鉄剣で待ち構える侑子は「フツ」

とほくそ笑んだ。くーは侑子には「紅い稲妻見せてくれー！」と無邪気に声援を送る。

「それってジャンル違うくないッ!?!」

見事なツツコミしながらボールを投げる君尋。ボールは剛速球：とはまでは行かなくともそれなりの速さでに侑子に迫る。だが「甘いわ！」キラリンと効果音を発生させ目を光らせた侑子には敵わなかった。

カキーンン！

何とも聞いていてスカツとする音が鳴りボールは見事空へ飛んでいき、見る見るうちに

ヤバい方向と共にがっしやーん！豪快に窓ガラスが割れる音がした。

「あー!?!」

「君尋」

「くーちゃん?」

キラキラと良い笑顔で親指をぐっ！と立てながらくーは君尋に言った。

「ドンマイー！」

「え?」

意味が解らずクエスチョン状態な君尋。

「ちよ、俺が取ってくるの!?!」

悲鳴にも近い彼の叫び声にくーと侑子は打ち合わせでもしたかのような見事な同じ動作でキラツキラな笑顔で「イエスっ!」と親指立てて送り出そうとした。

「そんなああああああ!?!」

理不尽すぎるううううと頭抱えて絶叫する君尋は大家さんにしこたま怒られてへこへこ必死に謝った。その間に侑子は

「さて快くまで運動して体を動かしたことだしお昼にしましょうか?」

爽やかに何事もなかったかのように振舞った。それにくーも両手を上げて

「賛成ー!」

と大はしゃぎ。百目鬼の腕に嬉しそうに引っ付きながらすり寄る。

「百目鬼さんの隣に座るー」

「おう」

百目鬼は表情変えずに子供用の遊具に腰掛けその隣にホクホク笑顔でくーも座る。

すると、ぴょーん!とモコナも跳んできて百目鬼の頭に華麗に着地。

「モコナも座るー」

とうかモコナはすでに百目鬼の頭の上に座っている。だがくーは気に入らなそうに眉間に皺を寄せた。

「ムっ!?駄目、わたしが座るのー」

「嫌々モコナも座るの〜」

とうかモコナはすでに百目鬼の頭の上に座っている。

「むきー!」「むきー!」

似た者同士な少女と黒いおそこに家主に怒られちゃんと平謝りして片付けまでしてさらに平謝りしてボールを取り返して帰って来た君尋が戻ってくると目の前の光景にショックを受けて固まってしまった。

「くーちゃんが、俺のくーちゃんが……百目鬼の隣でホクホク笑顔で密着してる……………」

「ライバル（恋敵）ね」

侑子だけは面白そうにお弁当に手をつけていました。

今日は本当にいい天気。

◇◇◇

四月一日 side

異世界にいる小狼君たちから連絡があった。どうやらお城の秘術？とか何とかを突破したいらしんだけどその手だてを侑子さんに頼みに来たらしい。ファイさん？で良かったか、その人が対価として使わない魔法の杖をこちら側に引き渡してきた。そして侑子さんは代わりに黒モコナに食べさせた、この間のアヤカシだった、今は黒い球体を向こうに渡した。話はそれで終わるかと思った。けど、違った。侑子さんはあえて連絡を切らずに向こう側にいるであろう彼女に声を掛けた。

「元気にしていた？く」

その人はあの最後に派手に登場してきた黒髪に紅い瞳を持つ少女だった。彼女は名を呼ばれないなや不機嫌そうに見やった。

『侑子、…なんで…呼ぶんだ…』

その声と表情にはある怒りが含まれていた。関わり合いになりたくないという閉ざされた感情も。でも侑子さんはそんなのお構いなしだ。

「アラ？心外。アナタが心配だから声を掛けてあげたのに」

『頼んだ覚えはない、サツサと切れ』

「い・や♪」

『何だど?!…サツサと切れと言っているだろう?!?というかそこにあの子はいない事を前提で私に声を掛けたんだらうな?』

あの子?とは誰のことだろうか。

その時の俺には分からなかったけど後に誰の事を指しているのかすぐに理解できた。

「いるわよ、あっちで無邪気にモコナと戯れているわ。呼んであげましょうか?」

『そうか安心…ハツ?!いい、呼ばなくていいっ?!だからサツサと通信



『……っ……』

『…天姫ちゃん…』

フアイさんが心配そうに声をかけていた。

天姫さんは逃げるようにまだ喋りたいなくーちゃんに背を向けて

『……………侑子、…礼は、言わないからな…』

とだけ残して一方的に今度こそ通信を切った。

「ええ」

終わった画面に向かって、ただ侑子さんは頷いた。

また、モコナと戯れだしたくーちゃんから少し離れた場所で侑子さんに思い切って聞いてみた。なんだが、もやもやしてしようがなかったから。

「……………侑子さん、なんで天姫さん…悲しそうな顔してたんすか？」

「さあ?…」

「さあつて!？」

あれじゃあまるで『他人』以上の間がらだつて丸わかりじゃ

「四月一日、控えなさい」

「え?…」

「アナタに介入する権利はないわ」

「これは彼女が決めた『対価』であり『願い』であり、くーが決めた『対価』でもある。『まだ』、『部外者』であるアナタがが首を突っ込んでいいものではないのよ」

『『部外者』つてそんな言い方…』

「あたしの話を聞いていた?あたしは『まだ』と言ったわ」

「…『まだ』…?…」

「ええ、『まだ』よ」

そういて侑子さんは話を終わらせた。

(四月一日君尋は『まだ』部外者。)

## 09 『竜の娘よ、感謝する』

くinside

今日の君尋はやんちゃだ。さつきから百目鬼さんにケンカばかり仕掛けてくる。眉間に皺寄せてこれでもかかっていうくらい怒った。

「百目鬼てめえく、くーちゃんから離れろ！」

「だとさ」

百目鬼さんに視線で離れたらどうだ？と言われてもわたしは首を振って

「嫌だ」

拒否してむぎゆつと百目鬼さんの腕にくっ付いた。そしたら、君尋は頭抱えて

「ガツデムっ!？」

って叫んだ。面白い、そして何がしたいんだ？なんで百目鬼さんにくっ付いてはいけないのだろうか？別に悪い事してるわけじゃない。好きだからくっ付いているだけなのに不思議でたまらない。いつも君尋にくっ付いているのは好きだから。

今日は普段一緒にいれない百目鬼さんだからこそくっ付いていたのにな。

君尋の意図がわからない。ま、いつか！今は百目鬼さんにくっ付いていれていいから。

時々すりすり顔と顔を寄せると百目鬼さんは

「ん」

と頭を撫でてくれる。わたしはそれが嬉しくてたまらなくて

「はにょーん」

と顔が緩む。自然とこうなってしまうのだから不思議だ。まったくもって不思議。ことさらわたしとは反対に君尋はだんだん青ざめていく。しまいには

「俺の、俺のくーちゃんが……」

と魂半分飛ばし気味。あれ？抜けていく寸前？それは困る、非情に

困る。

君尋がいなくなるのは嫌だ。おなががすいたら誰がご飯をつくってくれるの？

意地悪ゆうこは絶対レトルトカレーで誤魔化そうとするから栄養が偏る。

それは絶対避けなくちゃ。わたしは百目鬼さんの腕を離し、君尋に駆け寄った。

「君尋ー、帰ってこいー」

今にも召されようとしている君尋の魂の尾をむんずつと掴んで無理やり彼の躰に収める。

「……ハッ!?俺は何をしていたんだ?」

「君尋ー、家に帰ったらプリン食べたい」

ぱあああああああ!

「……うん!バケツプリン作るよ!」

顔が緩んで本当に嬉しそうに笑う君尋。なんか機嫌が一気に良くなった。なんでだろう?

わたしもなんだか嬉しい。?なんでだろう?ま、いつか!所で今日は野球をする為に来たわけじゃないらしい。ひまわりさんがゆうこに頼みたいことがあるから来たらしい。

なんかひまわりさんの知り合いの学校で「エンジェルさん」が行っていて怪異現象が発生しているらしい。困ってしまったらゆうこに頼みに来たらしい。

とりあえず君尋と百目鬼さんがその学校に行くことになった。わたしも行きたくなくてゆうこに頼んでみたら了承してくれた。でもゆうこはわたしに言った。

『百目鬼から離れないように。くれぐれも『力』を使いすぎてはダメよ』

わたしは意味がわからなくて首をこてんを傾げた。『力』なんてわたし、持っていない。

『使ったらどうなるの?離れたらどうなるの?』

ゆうこはわたしの頬に手で軽く触れてきて



『くー、いいからいう事を聞きなさい』

普段のゆうこらしからぬ、強い口調だった。わたしはなんだか不安になった。ぎゅつとゆうこの手に縫った。

『ゆうこ?』

『今はあたしが傍にいるから防いでいるけど、くーも本当は四月一日と同様に』

(アヤカシに『いつも』狙われているのよとゆうこは言った)

◇◇◇

四月一日 side

気味が悪かった。本当は気乗りしなかった。俺と百目鬼だけならまだしもくーちゃんも一緒に学校に潜入することに。最初に止めておけばよかったと後悔した。止めておけばくーちゃんがああなることもなかったのに。俺達は夜になって怪奇現象が発生するという学校に潜入した。侑子さんに『絶対はずしちや駄目よ』なんて言われて仕方なくつけているヘッドホン。が、俺は納得したわけじゃねえ。とどうか俺と同じようにヘッドホンをつけているくーちゃんにこそあるべきものだ。

「君尋、おそろいだね」

「え、あそろだね!」

屈託なく笑うくーちゃんに言われれば、これってある意味おいしいよなと思えた。

「GJ・侑子さん!」

俺は嬉しさのあまり、いつの間にか叫んでいた。そんな俺を残して百目鬼は

「届かない…」

と門でうろろうろしてるくーちゃんに

「くー、手、貸せ」

と俺のくーちゃんの手を差し伸ばしてくーちゃんは嬉しそうに

「かっちょE——!」

とその手に飛びついて引っ張り上げてもらい無事門を乗り越えていた。そして、百目鬼に抱き着いていた。

「百目鬼さん、おんぶ」

「ん」

「えへへへへ！」

「四月一日、行かないのか」

「お、俺のクーちゃんにいいいいいいいい!!」

ムンクの叫びみたいに絶叫してしまった。だってクーちゃんにためらいもなく触れているのだ。しかも、密着度の高い『おんぶ』を！俺にしか許されない特権をアイツはあっさり奪った。腸煮えくり返るのをなんとか抑えつつ、俺も門を乗り越えた。

「なんか、黒い…?」

「だよね。なんかアレいるし」

クーちゃんが指し示した校舎にはまるで大きなとぐろをまいた黒いものが校舎の壁を這っていた。

「クーちゃん、見えるの?」

「うん！」

「そうか、俺には見えないが。それがアヤカシなのか?」

「かも」

とりあえず校舎の中に入った俺達。けどすぐに足先はのろくなつた。

なぜなら、校舎内は鼻を突くにおいに満たされていて思わず口元を手で覆った。

「うう、…なんか匂う…」

「君尋、手、繋ごう?」

「え、う、うん」

すると、あれだけ異臭がしていたのがスパッと感じなくなった。なんで?

「…あれ?匂いが…無くなった?」

「わたしのおかげ?ま、いつか!」

クーちゃんはあっけらかんと笑いながら俺の手を引いて暗闇の校舎を迷わず進んでいく。そして、一番、濃い場所屋上に足を踏み入れた。

◇◇◇

アレは、『残り滓』と後に侑子さんに言われた。エンジェルさんを興味本位でやっていた素人たちが残したモノ。それが怪異現象を引き起こしていた。その怪異現象が、俺に牙を剥いた時窮地を救ったのはくーちゃんだった。いつもの彼女は何処にもいなくて底冷えするような声に、無表情の顔。くーちゃんはただ『言葉』にただけだ。何もしていない。

『消えろ』

ただ、『命令』しただけだ。

「くー、ちゃん？」

くーちゃんはただ繰り返した。『命令』を。

『君尋に触れるな、彼に近づくな、視界に入るな、この場所から消えろ、お前たち全部消えろ、邪魔だ、小賢しい、目障りだ、不愉快だ、消えろ、消えろ』

その言葉の通り、『残り滓』は苦しみ出した。もがき、もがき苦しみ敵意さえ感じた。けれど、くーちゃんはすうつと手を翳し

『全部、消えろ』

その言葉で、全ては霧散した。呆然とする俺と、百目鬼。そこに黒い黒い大きな蛇がやってきてヘッドホンから侑子さんの声が流れたと思ったら蛇は侑子さんからのヘッドホンを丸のみしてぼうつとしまったま立っているくーちゃんをしばし見つめて

』

俺に理解できない言語でくーちゃんに語りかけてきてゆつくりと帰って行った。

「……………はれ？……………君尋！」

がばつ！急に抱き着いてきて、俺の躰をペタペタ触りまくる。

「うわっ！」

「君尋、怪我不い？」

「くーちゃん…？」

くーちゃんは、いつものくーちゃんに戻っていた。

「百目鬼さんは〜？」

「……いや……」

「良かったー、……なんかお腹減った…君尋く帰ろう?」

「……くー、ちゃん……」

「?」

お店に帰って、即行くーちゃんは倒れるように眠った。というか実際、玄関で倒れた。慌てて抱き起すと、くーちゃんは完璧熟睡していて俺も正直どっと疲れが出た。

けどまだ俺は帰れないと思った。侑子さんに聞きたいことはたくさんあったから。

「無事だったようね」

「……くーちゃん、様子が変でした。なんかこう…なんて言ったらいかかわかんないんすけど…とてつもない大きな『何か』に操られていたような…いや、違う…あれは『最初』からある?…のか?」  
「そう」

「侑子さん、くーちゃんは自覚がないんです」

それはある意味危険な事ではないのか?あれが無人格であるならば尚更、自覚させた方がいいのでは?

「そうでしょうね」

「アヤカシは俺だけに惹かれているわけじゃないんですよね?くーちゃんも狙われているんですよね?」

「ええ」

「だったらっ!?なんで俺達と一緒に来させるようなマネなんかしたんすか!?もしものことがあったらっ」

「それが『必要』なことだから、よ」

「『必要』?危ない真似をさせることができますか!?!」

「ええ」

「くーの目覚めはまだ来ない」

「……侑子さん、一体アナタは何がしたいんですか?」

「あたしはただ『願い』を叶えようとしているだけ、全てはあの子たちが願った事だもの」

『所詮、あたしも『傍観者』なのかもしれないわね』

侑子さんの声が少し、寂しそうに聞こえたのは、俺の気のせいかもしれない。

(全ては、あの子たちの『成長』の為)



いよ。『石』はようやく、完全に止まれたんだから。

蔵には『猿の手』がひっそりと帰ってきていてわたしはゆうこが『猿の手』を封印するのを横目で眺めて言った。

「帰って来たね、ゆうこ」

「ええ」

「面白かったね、ゆうこ」

「くーにはそう感じたのかしら」

「うん。本当に『人間』って色々いるね？」

「そうね」

『猿の手』はようやくまた眠りについた。ゆうこの手によって封印されて。君尋の声で意識はすでにそれから対象を外した。

「くーちゃん、侑子さく、パスタ冷めちゃうよ？」

「ほーい！」

「一仕事終わり！」

ルンルンとわたしと侑子は蔵の扉を閉めて君尋の所へ歩いて行った。

(きょうは人の『過信』についてまなびました)

◇◇◇

夜、眠れなくて縁側でぼうっとしていた。あの人の事考えてたら、眠れなかった。あの黒髪に紅い瞳を持つ少女。名前を覚えてもらえた。ずっと知りたかったから。

神崎天姫。…なんだか、胸が苦しい。あの人のことを考えると、胸がきゅって鳴る。懐かしい、とも思う。でもわたしにはあの人が誰で、何者なのかわからない。けれど今はこれでいい。なぜだかわからないけどそう思えた。ぽっかり夜空に浮かぶのは綺麗なお月様。周りは闇ばかりで、寂しそうだけど。すると、急に声をかけられた。

『こんばんは』

女の人だった。でも生きてる人じゃない。あいさつをされたのでわたしも返した。

「…っ…こんばんは」

『綺麗な月明かりね』

おねーさんはふよふよと浮かんでいた。白いドレスに長い金髪の髪で外国の人っぽい。でも喋ってる言葉は日本語なのが変。

「おねーさんは透き通ってるね」

『ええ、私は幽霊だから』

「そっか、でも綺麗だね」

素直にそう思った。まるで妖精みたい。おねーさんはクスクスと小さく笑ってわたしの隣にふわりと座った。：座った形にいらるといった方が正しいかもしれない。彼女は幽霊だから。

『ありがとう、緋奈の血縁者さん。ホント緋奈に似てるわ』

「ひ、な?」

誰だそれは?

『ええ、私の大切な友達の名前。今は知らなくともいずれこの先で出会うから心配しないで』

この先?意味不明。

『私は、エレナ。初めまして『くーちゃん』。私たち、お友達になれるかしら?』

「うん、初めまして。『えれな』さん。わたしもお友達になって欲しいな」

こうして、時々えれなさんと夜会話することになった。わたしの友達の話。

(わたしとえれなさんの初めての日)

◇◇◇

コンコン、コンコン。狐のお揚げおいしそうだな♪ホツカホカであつつあつ♪うーん!おなか減った!居てもたつてもいられない。君尋の帰りは遅いしおなかも空きすぎて大合唱してるし。くーはんしょんしょー!とコートを着込んで侑子の腕を引っ張った。

「ゆうこ、いい匂いがする。お外出たい」

「駄目よというかくーの鼻はどこまで嗅ぎ付けてるのよ」

「なんでえ!?!」

「駄目だからよ」

「むきー!!ゆうこも来ればいいじゃんっ!」



「寒いから嫌」

「むきー！モコナ連れて行くからイイデショー!？」

そういつてモコナを持ち上げる。が「駄目」侑子はダメダメダメと容赦なくくーの意見を斬り捨てる。くーはモコナを放り投げてこれでもかというくらいに頬を膨らませて『わたし怒ってます』とアピールするも無駄に終わる。侑子が面白そうに「変な顔」と意地悪そうにくーの膨らんだ頬を己が両手でばしんっ！とはさむ。最終手段に出たくーは

「ゆうこなんか毒牙一発女だー!」

と捨て台詞吐いて駆けだした。けれど、

「いい加減それからはなれなさい」

と足を引っかけられ

どすん「んぎゃ」

見事顔面から床にダイブ。それを見たマルとモロが

「痛そー」「痛そー」

とくーの傍に駆け寄った。

「生きてる?」「死んでる?」

ツンツンと二人はくーを突つつく。くーは倒れたまま

「お腹減って力でない」

と倒れたまま。侑子はそれを見てしばし思案した後、「しばらく倒れてなさい」と軽く放置。それからしばらくして君尋がようやくお店に駆け込んできたとき、ある光景に度胆を抜かれた。

「スイマセン、遅れ、て……くーちゃんが倒れてるー!？」

大声を上げて荷物放り出して君尋はすぐさまくーを抱き起こす。

「くーちゃん!?!くーちゃんってばっ!」

「……君ひ、ろ……」

弱弱しくもくーはなんとか君尋の名を口にした。そして震える手を伸ばすと君尋もそれをガシツ!と掴む。

「くーちゃん!?!一体何が」

まさか、何かがくーの躰に起こったのかと青くなった君尋でしたが侑子が平然と言う。

「ただ単に空腹で動けないだけよ」

「……………え……………」

一瞬、呆けた君尋の耳にぐくぐくとおなかからの大合唱と共に  
「はら、ぺこりん」

と訴える無邪気なくー。いつその事清々しい姿に

「……………紛らわしいよ、くーちゃん……」

つと一気に脱力した君尋。それからみんなで仲良くきつねのおで  
んを食べた。

(一瞬、心臓が止まってしまったかと思った)

# 11 『あの子とえれなの cooking』

くー side

今日はバレンタインデーらしい。正確にはあともう少しでバレンタインになる。

つまり真夜中なのだ。しかしバレンタインなるもの、海外と日本のものとは一味違うらしい。日本独自に築かれた文化？らしい。だから女の子は好きな男の子にチョコを贈る。というか日本のお菓子メーカーがそう考えたとか？君尋はゆうこに「チョコ食べてえ〜」と夜中に呼ばれてせつせとフォンダンシヨコラっていうのを作ってる。

「おいしそう」

よだれが出てきた。

「くーちゃん、よだれ出てるから」

おっと、君尋に叱られてしまった。

「別にみてるだけだよ？ホントだよ？」

「その手は何？」

ぺしっ。手を軽く叩かれた。

「痛い…」

さて、君尋が鬼ババでチョコくれないから何しようかな？

ゆうこが「チョコチョコ」って煩いからすっかり目がさえちやった。

夜中にチョコ食べるなんて太ると思う。ニキビとかできると思う。

ゆうこは虫歯になると思う。というかあれは大酒飲みだから絶対健康体ではないと思う。

「くーは本当に素直なんだから」

みよーん。意地悪ゆうこが意地悪にわたしの頬を伸ばす。これで

もかというくらいに。

…むう、なんか面白くない。

君尋は誰にあげるんだろう…。ふと、思った。

わたしはもちろん！百目鬼さんにあげるつもり。だって『好き』だから。あげる。

ゆうこにもあげる、ひまわりさんにもあげる。モコナにもあげる、

えれなさんにもあげる。

あ！天姫さんにもあげよう！喜んでくれるかな？…逢いたいな…今何してるのかな？

でも、君尋には……なんでだろう。君尋はみんなとちよつと違う『好き』だから、みんなと同じものをあげるのはなんとなくいやだ。

何か、特別なものがない。

そうだ、えれなさんに相談してみよう！わたしは急いで自分の部屋に戻った。

そうしたら、えれなさんがニコニコして待っていてくれた。

『くーちゃん、今日はバレンタインね』

『うん、あのね。君尋にあげたいけど、何をあげたらいいかわからない。だから何をあげればいいのか教えて？』

『君尋君はくーちゃんにとって『特別』な人？』

『特別』？『特別』って意味がわからない…。天姫さんは大好き。あの人のこともっと知りたいって思う。けど、それとは違うし…。君尋はわたしにとって、『傍』について当たり前な人？とっても温かくて、毛布で優しくくるんでくれる人』

『そう、良かった…くーちゃんにそういう人が傍にいてくれて』

ぽん、とえれなさんは嬉しそうに手を叩いた。何か思いついたみたいだ。

『それじゃあ私の故郷のお菓子を作りましょうか』

『故郷？えれなさんって何処の生まれ？』

『イタリアよ』

「へえ？…なんで日本にいるの？魂って何処まで移動できるんだらう』

『私は『呼ばれた』という感じかしら…？たぶんくーちゃんに呼ばれたのかもね』

「わたし？全然呼んでないよ？というかえれなさんの事とかついこの間知ったもん』

『ええ、私もアナタが緋奈の『血縁者』だったなんて知らなかったわ。でも侑子が教えてくれたから』

「ゆうこ、が？」

初耳だった。あの『謎』と『大酒飲み』と『毒牙一発』が売りの怪しき爆発売り出し中のゆうこが？正直、信じられなかった。わたしは。

えれなさんはわたしの心情など知らずに、ウキウキとしていた。

『ええ、それじゃあ朝になったら始めましょうか。今は少しでもお休みなさいな。材料は任せて？用意しておくわ』

「え!?!えれなさん『幽霊』なのに大丈夫なの？」

だがそこは問題ないらしい。胸張って

『ええ、私これでも年季が入った『幽霊』だから』

と大船に乗ったつもりで任せなさいと張り切って『おやすみなさい』と手を振って消えた。……とりあえず、寝るか。

君尋の「くーちゃん？チョコ食べないの？」と呼び声が遠くで聞こえたが先に眠気がきてしまったのでその声に返答することはできなかった。

◇◇◇

君尋が学校に行ってる間に作ろう作戦開始！

いつも君尋が使っている台所はいつもピカピカですごい。思わず、指先で触つているときゆつきゆ！と音がした。感嘆しかでない。

『さあ！それじゃあ始めましょうか♪』  
「うん」

えれなさんはブリブリのヒラヒラがふんだんにあしらわれたエプロンをつけていて

わたしはゆうこに無理やりつけられた割烹着に三角巾という君尋スタイル。

『今日作るのは『カンノーリ』よ』

「カンノーリ？何それ？」

『カンノーリはね？小麦粉ベースの生地を薄くのばして、正方形に切ってから金属製の円筒に巻き付けて低温の植物油かラードで筒状に揚げた皮の中に、甘みをつけたリコッタ・チーズにバニラ、チョコレート、ピスタチオ、マルサラ酒とかローズウォーターやそのほかの

風味のうちいくつかをまぜ合わせたクリームを詰めたもので主にシ  
チリア島が発祥とされているお菓子なの。昔の有名な映画なんか  
も欠かせない重要なお菓子だったのよ？ちなみにカンノーリは複  
数形として言われていて、単体一つの場合は『カンノーロ』と言わ  
れているの』

「……ややこしい、…つまり今日作るのは複数形のカンノーリ？つて  
こと？」

『正解♪』

パチパチと拍手してくれたえれなさん。

ちよつと照れてしまうがな。

「よし！お勉強タイムは終了だ。頑張つて作つてやる〜」

『その意気込みよ！クーちゃん！』

えれなさんがなぜか赤いバケツを出して『えいっ♪』と豪快にひつ  
くり返すとなぜかそこからカンノーリの材料とか必要な道具とか  
ドバァ〜と出てきた。

「……えれなさん、魔法使えただ〜」

『え？ああ、コレ？雪彦に借りたのよ。クーちゃんとお菓子作るつて  
言ったら気前よく貸してくれたの』

「……ユキヒコ？なんかよくわからんけどすごい人なんだね？」

『ええ、それじゃ始めましょう？』

『Avviare la cottura!』（調理開始！）

◇◇◇

四月一日side

今日は散々な目にあつた。

せつかくクーちゃんにたべて貰おうと思つたのにくーちゃんは  
それはそれは可愛い寝顔で寝ていて、わざわざ起こすのは忍びないの  
で学校終わつてから食べてもらおうかと思つたのになぜか俺がひ  
まわりちゃん用にあげようと思つたフォンダンシヨコラがひまわ  
りちゃんがおやすみという事でせつかくなら自分で食うかと用意し  
ていたのにそれが百目鬼に目をつけられ！あわやアイツの胃袋に収  
められてしまうという最悪の事態に発展した。

まあ？それはいいさ。食べたければ勝手に食べればいい。

俺はくーちゃんに食べてもらいたいのであって、決して！百目鬼に与えようと思っただけじゃやない！……なのに、だ。

どうしてトラブルに合うんだ？

さつさと帰りたいのになぜか百目鬼と一緒に帰ることになってその帰り道突然見知らぬ女の子がバレンタインのチョコを捜していてちやうど良かったと嬉しそうに百目鬼の躰に手を突っ込んで俺が作ったフォンダンショコラだけ持っていたならまだしも百目鬼の魂まで一緒に持つて行ってしまう結果に。

焼き芋買いに外に出ていた侑子さんがにやにや顔しながら

「さつさと取り戻さないと百目鬼は一生寝たままよ」

なんて脅すもんだから俺は

「さつさと帰ってくーちゃんにたべてもらいたいだけなのにー!？」

と喚いて巨大な鳥を運転するモコナの後ろに乗っちゃって御空にふわりと飛んで行った女の子を追いかけることになった。

そこから俺の大冒険が始まった。

遙か上空、本来来ないような高い空の上で空飛ぶスノボ？に乗った子供からハリセン攻撃を仕掛けられ俺はその一発を避けつつも、人数は向こうのほうが上で全てをよけきれずに、鳥から落っこちてしまいああ、俺死ぬ？と思ったその時、

「四月一日さんっ！」

追っかけていた女の子の『力』なのかわからないけど、地上に叩き付けられることは回避された。というか助けられた。少女の意図がまったくわからないまま百目鬼の魂チョコを返して欲しいと言うとなぜか少女は

「アナタに渡したかったんです…」

と逆に差し出される結果に。

「えっ？」

少女はあっという間にスノボに乗った口調荒い子供たちと一緒に御空の彼方へ消えていった。

後から侑子さんに言われてわかったこと。

あの少女は座敷童で、俺にどうしてもチョコを渡したかったけどそこからへんにあるチョコでは納得がいなくて結果、『力』ある俺が作ったフォンダンシヨコラと『祓える力』を持つ百目鬼に一度取り込まれたチョコこそ、少女が求めていたチョコが出来上がったわけだ。

俺は魂チョコを百目鬼の胸に溶け込んでいくのを見届けながら焼き芋を喰う侑子さんに尋ねた。

「侑子さん、結局これって俺がもらったことになるんスか？なんか違うような…」

「『言葉』でいうならまさにそうでしょう？」

「言葉？…意味わからん…」

「『次』でわかるわよ」

そういつて侑子さんは意識を取り戻した百目鬼に焼き芋を勧めていた。

まったくもって、今日は意味不明な日だ。それよりもさっさとお店に行つてくーちゃんに俺の手作りフォンダンシヨコラを食べてもらわねば！と思い、足を動かすことにした。

◇◇◇

店に着いてやけに静かだなと思った。

くーちゃんの姿を探しながら彼女の部屋に足を踏み入れた途端、

「Music start！」

と掛け声一つで目の前は多彩な光を演出するミラーボールが頭上に現れ軽快な音楽がジャンジャカ鳴りだす。昔良きバブル時代、ディスプレイなる場所を再現したと言つていいだろう。

目の前にはお立ち台という床よりも高い台が設置され、くーちゃんが羽根付き扇子で楽しそうに「ホウ！ホウ！」と奇声上げながら楽しそうに踊っている。

「……………」

俺はそれだけで固まった。

「……………」

いや、正確にはくーちゃんの足元で腰振って踊っている物体を目にしたときから思考が停止した。いきなり昔の演出でくーちゃんがノ



リノリに踊りだそうが別にそれはいいだろう。本人が楽しいなら、俺は止めやしない。

けれど、違う。アレは納得できない。

そもそも、あれは地球外生命体ではなからうかと思った。

絶対この世の生き物ではないだろうと断言できた。俺は指差してくーちゃんに尋ねた。

「くーちゃん、コレは何？」

「えへへへへ、君尋に食べて欲しくて作ったんだ」

くーちゃんは羽根付き扇子で顔を隠す。

いや、照れるのはいいけど。うん、俺の為に作ってくれたのはいいけど。

「この物体は食べれるの？」

俺はまた尋ねた。くーちゃんはにっこり微笑んで

「うん、一緒に踊ってるけど食べれるよ。だってお菓子だもん」

と言った。俺はその踊っている物体を摘み上げて再度くーちゃんに見せた。

「この手足が生えて尚且つ軽快にリズムとって踊ってる物体がお菓子なの？」

と。くーちゃんはさつきと変わらずにっこりここで

「うん！えれなさんが味見してくれたけど『大丈夫！味は最高よ味は！君尋君なら見た目なんか気にしないで食べてくれるはずよ!?!』だつてくーちゃんが一生懸命に作った真心が込められたお菓子ですものっ！』って太鼓判押してくれたから」

俺はまったく面識のない『えれなさん』に向って叫んだ。

「えれなさあああああんんんー！」

くーちゃんがえれなさんに教えて作ってもらったお菓子。

カンノーリというらしいが、味は確かにおいしかった。食べるまでが恐怖との闘いで、俺は初めてお菓子と睨み合いをした。でも納得がいかない。

どうやったら、手足が生えるお菓子を作れるんだっ!?

侑子さんは意外にもバリバリ頭から食べていた。

「うん、おいしいじゃない」

「でしょ!?!」

くーちゃんは嬉しそうにしていた。後で百目鬼の野郎にもあげるとくーちゃんはルンルンと踊るお菓子を箱詰めしていた。けれど踊っているのが箱がガタガタと揺れて正直、怖かった。

(くーちゃんにはある種の天才的な能力があることがわかった)

## 12 『素顔の魔女』

四月一日 side

俺は決してやましいことなど一切していない。  
だからこそ言う。清廉潔白だ。なのに、なぜか俺は土下座して  
る。

というか土下座しなければいけないヤバい雰囲気なのだ。

「スイマセンでした許してください口きいて下さいお願いします」

おでこすりつけてまで拝み倒している相手は一向にこちらに顔  
を向けようとせず、それどころか存在すら否定されているような気が  
する。

「……………」(無視)

俺はたまらずに叫んだ。

「くーちゃあんん!？」

でもくーちゃんは一度俺をチラ見しただけで

「……………」(無視)

ぷいっとそっぽを向いた。

「なんで?俺何かした!?!くーちゃんの機嫌損ねるようなことした!？」

誰か助けてヘルプミーと言わずにいられん状況。そこに侑子さん  
が面白そうに声をかけてきた。

「四月一日、アンタデートするんでしよう。若いおねーさん二人と。

くーの機嫌を損ねた原因はソレよ」

「!?そ、それはただ単に百目鬼のヤローに付き添いというか」

山よりも高く谷よりも深い理由があるのだ。

学校からの帰り道、コンタクトを落した自信なさそうな女子大生のおねーさんと知り合いになり次の日ファーストフードで百目鬼と軽く食事していた時、コンタクトを落したおねーさんの双子の妹と知り合いになり、この間の御礼ということで俺と百目鬼。

双子のおねーさんたちとで映画を見に行こうという感じになったのだ。

決してやましい気持ちでとか、ちよつと嬉しいなーなんて事は一切

考えていない！

だって、俺は！……俺は？

なんだ？自分でフツと湧き出た気持ちの先が何なのか、わからなかった。胸にそつと手を当ててみるが、結局答えは出ず。代わりと言っちゃなんだが侑子さんが上から目線をかましてくれた。

「フツ、男の言い訳ほど見苦しいものはないわねえ」

「な！」

なんでそうなるー!?と絶叫したかったが、そろりとくーちゃんに視線を向けてみて

「……………」(無視)

ああやつぱり無視なさるんですね……。もう、俺どうしたらいいの？ガクリ、と肩を落としてしまう。喋る気力さえ失ってしまった俺の代わりに侑子さんがポツリと呟いた。

「そういえばあたしの古い友人も結構独占力の塊だったわね」

侑子さんの古い友人……。正直、気になる……。

俺は好奇心からちよつとだけ尋ねてみた。

「……………それはちなみにどんな人だったんですか？」

侑子さんはよどみない口調でスラスラと語りだした。その古い友人の事を。

「自分よりも年上の男限定、しかもびびっ！とキタ男にしか興味なかったわ。しかも極度の面食い。嫉妬深いし執念深い、自分に逆らおうとする男には容赦なく制裁を与えて悦に浸ってたわ。そのくせ自分に変な所で泣き虫で。イケメンばかり狙っていたしあたしによく言っていたわ。『いつかイケメンだらけの逆ハーレムを作る』って。……本人のその夢は実現したようだし、結果オーライね！」

俺は類は友を呼ぶという言葉を思い出した。

ああ、侑子さんがそうなら友達だってそうだよな、と。

納得できる。納得できるが、聞いているだけでどこか怖いような。

「……………さすが、侑子さんの友達……インパクト強い……」

「腐れ縁よ」

「その友人って今は？」

「死んだわ」

「……スイマセン……」

「四月一日が謝ることじゃないわ、『光』は悔いがない人生を送ったはずだし」

「『光』、さんって言うんですか」

「ええ」

俺はその時気がついた。いつも意地悪そうで、どこか謎めいた部分を見せていた侑子さんだったのにその『光』さんの話をしている時だけ『素』を出しているように見えたんだ。

(滅多に見せない、侑子の(カオ))

◇◇◇

「ちよりーっす！侑子」

「モコナ、こんばんは、でしょ？」

窘めるように言えば白モコナは悪びれた様子もなくくるり、とその場で楽しそうに回りながら

「そーともいう♪フオンダンシヨコラおいしかったよ！みんなでほっぺた落ちそうになったもん」

にゅーんにゅーん、とほっぺを押しして押しして最高の味だったと誉めたてる。侑子は目を細めにこっつと微笑んだ。

「それは良かったわ、お礼のホワイトデーは三倍返しね♪」

いや、違った。ニヤリ、であった。魔女らしい、イヤラシイ笑みである。

白モコナは普段以上に目を細めて不満そうに手をぶんぶんぶんと激しく振る。

「天姫は嫌々食べてたのー。毒牙一発女からの差し入れなんて余計な事起こらないって」

「あら、天姫も素直じゃないわね。くーが作ったモノだったら喜んで食べたかしら？」

二足歩行するお菓子でも食べたかしらねと含み笑い。それは天姫

でも嫌だろーと思う。

「今度送って？モコナもくーが作ったの食べたーい」

侑子は白モコナの願いをサラリと流した。

「ええ、わかったわ。それでモコナは何処にいるの？」

「今桜都国にいるよ。サクラの部屋のトコ。みんなねー部屋がひとつづつあるんだよー」

「さくらちゃんたちは？」

「今ね、サクラと小狼は下でお店やってるの。ファイと黒鋼と天姫はお出かけ。喫茶店やってるんだー。でもお店の名前まだ決まってるってファイが看板に黒猫の絵描いたのー」

そういつて白モコナが見せたのはファイ作、黒猫画であった。

それを目にした侑子は、表情明るくテンション高めになった。

「だったら『CAT, SEYE』にしなさいっ!!黒猫と言ったら『CAT, SEYE』でしよう?」

「それ名案!!」

白モコナと黒モコナとぽんっ!と一つ手を叩き喜んだ。その時、白モコナ側で変な音が発生。

『ガタツ、ガタタ』

「んう〜?なんだろ。ちよつと見てくる」

「ええ、わかったわ。それじゃあね」

「うん!まったね〜」

通信は終了し侑子はフーーと一息ついた。目まぐるしい日常はあちらも同じという事。

『『あつち』も、『こつち』も良い方に進んでいるみたいね。この先どうなるかわからないけど』

けど

「あの子たちなら、『絶対大丈夫だよ』:ね:」

無敵の呪文がある限り前へ進んでいけるんだから。

(見上げた先に未来はある)

◇◇◇

くーside

今日、君尋が双子のおねーさんとデートする日だ。  
なんか気に入らない。

「くーがプンプンだ」「くーはプンプンね」  
「違うもんー!」

マルとモロがわたしを周りでぐるぐる回って楽しんでいる。

わたしはそれを否定しながら逃げるように部屋を出た。凶星さされた気がしたからだ。

ハッ!?これは認めてしまったようなものだ。

断固否定する!わたしは認めない!

でも、強気でいた気持ちは空気が抜けていく風船のようにみるみるしぼんでいった。

「……………」

廊下を歩いていたら足は自然に止まる。苛立ちから無意識のうちに拳を握っていた。

君尋はわたしのご飯作ってればいいのに。わたしのご飯作る時間割いてまでおねーさんとデートするのが気に入らない。わたしよりそのおねーさんが大事なんだ。

きつとそうだ。……………なんか悔しい……………

「くーは外に出たいのかしら」

「ゆうこ」

音もなくゆうこはわたしの後ろに立っていた。スウツと手が伸びてわたしの頬を撫でる。

仕草は優しいけど、ゆうこの瞳は底がない井戸のようだ。

ゆうこがどういう意味でわたしにそう問いかけてきたのかわからない。

ただ漠然と理解できた。これは『誘惑』だ。魔女が白雪姫に差し出す、紅いリンゴのように。手に取ってしまえば甘いあまい夢がみられる。

「あ……………」

外に、出たい。君尋にしがみ付いてデートに行かないでって伝えた

リングゴを受け取ればいいのだ。素直に受け取ってしまえば『駄目』  
いいのだ。

警鐘が鳴る。でもわたしが口に出すことはできない。  
今はいつちやいけないうって誰かが頭の中で囁く。

『まだ外には出てはいけない』

言葉は言霊となってわたしを縛るんだ。縛って隠れてそれが当たり前だと錯覚させる。

それではだめなんだ。

「わたしは、自分の意思で外にでない」

「今はまだでない」

「まだ」

「その『時』ではないから」

『それが願いだから』ダレの願い？

知らない、わたしは願いなど知らない。わたしはわたしを知らないのだ。

願いなど最初から存在しない。ならばこの操作されている感覚はなんだろう。

抗えることができないとても大きな存在。理解できない感情に支配されてわたしはただ同じ言葉を繰り返す。

「わたしは、出ない」

「そう、それでいいのよ」

魔女は紅いリングゴを自ら投げ捨てた。拒まれたことを嘆いてじゃない。

否定されたからでもない。それが魔女にとって必要な行動だったからだ。

(『筋書き』は幾重にも繋がって先を隠す)



# 13 『君が隣にいてくれてありがとう』

四月一日 side

桜舞う季節になるといつも思い出す。俺の初めての友達のことを。俺の誕生日会を祝うと張り切って侑子さんは公園へと向かう。でも誕生日を迎える俺がどうして重い荷物を持たなくてはいけないんだ？

納得できないけど侑子さんに正面切って抗議できるほど俺は強くない。

だから黙って溜息ついて従うしかできないなんて！そんな俺の唯一の癒しは

「君尋ー？どうしたの」

彼女だ。記憶を失った、ちよつと不思議な女の子。

すごく大食いで彼女が作り上げるお菓子は世にも奇妙な生き物に変化してしまうという特殊能力を隠し持っていたおかしな女の子。

……バレンタインの日には恐ろしいくらい無視され続けたがなんとか機嫌は戻ってくれたことが一番嬉しんだけど……。俺がどうしてか気になって仕方がない女の子。

可愛い仕草でくーちゃんが立ち止まった俺を不思議そうに見上げた。

俺は苦笑いしてちよつと「昔を思い出したんだ」って伝える。

すると、くーちゃんは俺から視線を外して、どこか遠くを見つめた。

『昔』、かあ」

あ、そうだった。くーちゃんにはこれはマズイワードであった事をすっかり忘れてしまっていた馬鹿な俺。気づいて誤魔化そうにもくーちゃんの意識はすでに俺に向けられていない。

「わたしの『昔』ってどんな事してたのかわかる？」

「……………」

俺はくーちゃんにかけられる言葉を知らない。だから黙るしかなかった。

「わたしって一体『ダレ』なんだろう、…ね？」

どこか寂しそうに力無く微笑む彼女。俺は重い荷物を手から落として、くーちゃんの小さな手を取った。

「俺は、どんなくーちゃんだっつかまわないよ」  
昔だろーが、今だろーが関係ない。

「ん？」

君と俺。出会った事で何かが起こることは定められていた。

現に今、俺はすごく充実した毎日を送れている。

それは、君のおかげなんだ。人生バラ色、なんて言わないけど灰色の曇り空から、淡い空には昇格したんだ。それって俺にとってすごいことなんだよ。

「俺はくーちゃんがくーちゃんだからこうして一緒にいれて嬉しいんだ。他の誰でもない、くーちゃんだからこそ」

想いを籠めて、伝えた俺。くーちゃんは目を瞬かせて、しばし固まっていたけどすぐに表情は一変した。

「……………ありがとう、君尋……」

はにかむ君に俺は一瞬にしてノックアウト。

あ、落ちた。何が落ちたかってわからないけど、とにかく落ちた。

「さー！行こう？君尋のお誕生日を祝いに」

引つ張られて指先からじんわりと温かさが伝わる。

俺は我に返りあわてて荷物を持ってくーちゃんと共に走り出す。

「君尋にバースデーケーキ作ったんだ！」

「まさか!?踊りだすとか言わないよね？」

「ははは、まさか！」

「良かった……」

「歌うにきまつてるじゃん！」

「歌うんかいっ！」

ビシイインン！

小気味よい音と共にツツコミが炸裂。

俺と友達なれて嬉しかったと笑顔で言ってくれたキミ。

見てるか、俺はまた、誕生日を迎えたんだ。

「四月一日、くーも、遅いわよー」

大酒飲みの女店主さんと

「モコナ、一発芸やるー」

喋る黒いぬいぐるみと

「どんな一発芸だ？」

目つき悪くなんか気に食わない奴と

「くーちゃん、とつても嬉しそう！」

クラスのマドンナと

「おめでとうー！君尋」

気になる女の子が差し出す歌うバースデーケーキと

「…ありがとう…」

迎えられた今日が俺にとつて一番の日なんだ。

(ずつと友達だから)

◇◇◇

くーside

昨日のお肉はおいしかったな〜と思い出してじゅるじゅると涎が出る。

おっと！レディとして恥ずかしい。昨夜の出来事。ゆうこは偉そうに腰に手を当てて

「あたしから焼肉を奪おうとするなって1万年早いのよ！」

なんて言う間にわたしがルンルンと鼻歌歌いながら焼きあがったお肉を頂いた。そうしたらゆうこは

「あああああああああああああ！」

と年甲斐もなく大声あげてがつくり項垂れてた。あはははいい気味だつて指差して笑つてやったら

「くーのお肉っておいしそうよねえ〜ほっぺぶにぶにしてて」

と舌なめずりしてギランギランに目を怪しく光らせていた。わたしは恐怖を感じてすぐに君尋の背中にくっ付いた。君尋は野菜を乗つけた皿を手にもっていて「おわっ!？」とバランスを崩しそうになったけどそこは根性で持ちこたえた。そしてジト目でわたしを後ろ越しに見下ろした。主に非難する意味で。

でもわたしはゆうこから命からがら逃げたんだと必死に説明した。けど君尋は信じれてくれなかった。むしろ苦笑いして「それはないよ」と手をばたばた振って否定する始末。

だが、恐怖は迫っていたんだ。

苦笑いする君尋の背後から、奴がやってきていている事を。

「あ、あああ後ろにゆうこが鬼ババの包丁持ってるっ！」

「もう、くーちゃん？そんな嘘ばかり言うとおやつ抜きにするよ？」

「違うってっ!!ホントにゆうこが鬼ババに変化してるんだってば！」

『うふふふふふ』

涙目になってるのに、鬼ババが目前に迫っていると言うのに君尋は全然わたしの話を聞いてくれなかった。

馬鹿君尋め！

ゆうこによって捕まったわたしは

『猛犬につき餌を与えないください』

という字が書かれた紙を首から紐で下げられおやつ禁止令が下げられた。この紙はゆうこ特製の紙で破ろうとしても敗れないし、首から下げようとしてもまったく外せないというオプションが設定されていた。

「ううう、ゆうこの執念深い呪いがわたしを縛るううううう」

「誰が執念深いですって」

みよーんとほっぺを引っ張られてもわたしはめげなかった。

目の前の鬼ババだと指で指してやった！ふん！ざまあみろ。

「さらにおやつ禁止令長引かせてやろうかしら」

「ゆうこサマー大好き！」

フツ！世間一般的には手のひら返したみたいにとられるだろうけどわたしは違う！これは序幕でしかない、なぜなら

「これがわたしの作戦なのだっ！」

「全部聞こえてるわよ、このあっぱー娘」

(さらにわたしのおやつがボツシユートされた)

◇◇◇

四月一日side

俺は昨日見た事を顔を真っ青にして侑子さんに伝えた。

「俺見たんス」

「へえ、何を？」

「白い女の人みたいいな細いう、腕が…ニョキッ！って地面から生えてきたところオオ！」

突如俺の背中に重みが発生しによつと腕が伸ばされた。

「やっとおやつボツシユート期間が解放された！」

おしおき期間から解放されたくーちゃんであった。というか一日も経ってない。

「うわっ!?…ってくーちゃんかあ。びっくりした…」

「オムライス食べたい！お子様ランチでもいいよ！」

「なんでお子様ランチ!?おやつじゃないの!?!」

「腹が減っては戦はできぬと言うではないか」

「なんで戦するの!?!っていうか誰と戦うのさくーちゃん」

「言わずもがな」

「ビシィー！」

「悪女めー！このくー様が成敗してくれようアイタっ！」

「だまらっしゃい」

「えーん毒牙一発女が苛めるよー」

「他に呼び方ないのかしら？アンタらは」

アンタらというくーちゃんだけでなく他の人物を指し示すような言い方。たぶん、あの人だろうと直感した。

「いや俺の話聞いてくださいよ」

「アラなんだったかしら」

「いやだから腕が」

「君尋ー、巨大オムライス作ってぶりーず」

「あーハイハイちよつと待っててね。だから腕が」

「あー四月一日、酒追加して」

「君尋ー君尋ーきみいひろおおー！」

「酒酒さけー」

「お願いだから人の話を聞いてエエエエエエエエ！」

俺は泣きながら叫んだ。

この人の話を聞かない人種は絶対己のスタイルを崩すことはない  
とわかりきっていたからだ。案の定、侑子さんとくーはまったく人の  
話すらきいてくれなかった。

結局、俺の見た腕の事はうやむやで終わってしまったんだ。

(腕はどこにでもキミの側にいるよ)

## 14 『紛い物』

くinside

雨ばっかりで憂鬱。退屈な日々はあつという間に過ぎていった。いつも意地悪なゆうこは盛大にため息ばかりついている。それも毎日。どうやら小狼君からホワイトデーのお返しがこないことが気に入らないらしい。

ずどーんく

「……はあ……」

ほらまたついた。わたしはのんびんだらりとしているゆうこの周りで絡んでやった。

モコナはわたしの肩に乗っかり同じ真似をする。

「ゆうこの日頃の行いが悪いからだー。やーい！やーい！」

「やーいやーいー！」

「黙んなさい」

よろつと伸びてきたゆうこの手からわたしは素早く逃げた。あつかんべーと上から視線だ。

「へーん！いつもやられてるわたしじゃないもん。ねーモコナ？」

「ねー」

「チツ、悪ガキが」

舌打ちしたゆうこはなんてお下品なんでしょう。

「くーが気になって気になって仕方ないあの子からもお返しがもらえないのよねく」

「っ!？」

そうだった、ゆうこが静かすぎたせいで忘れていた。あの人からの連絡がないってことだ…。気になって仕方がない、天姫さんからのああ、そうだよって認識しちゃったら

ずどーんく

「……はあ……」

椅子に横になるゆうここと、床に寝っ転がるわたし。一緒に溜息つくことになってしまった。

「二人して一体何がっ!？」

君尋がめっちゃ驚いてた。

「侑子とくーは乙女だから溜息ついちゃうんだよ」

とモコナが説明するも君尋は絶対ありえないよと突っ込んでいた。特に

「侑子さんが乙女だなんてアリエナイアリエナイ」

と。わたしも内心そう思った。でも地獄耳のゆうこはごまかせなかつた。

バシッ!

「暴力ゆうこめえ」

「フツッ…これが年の功ってものよ」

優越に浸るゆうこは意地悪すぎる。……天姫さん、なにしてるのかな？

止まない雨に逢いたい想いは募っていくばかりだった。

(貴方に逢いたい症候群)

◇◇◇

君尋が変なのを連れてきた。ここ最近雨ばかり降らせている原因の元。

ちよつと気の強そうなねーちゃん。これがわたしの第一印象。

どうやら彼女は雨童女『アメフラシ』でゆうこにお願いがあつて来たらしい。

「何よ」

ジロリと睨まれた。可愛いのに可愛くない。確かこれにピツタリな言葉が存在するはずだ……。えーとなんて言うんだっけ？ギヤロップ立花じゃなくてギヤロリンじゃなくて

「そう、……これがギヤツプ萌え？はっ!?!そうっただのか……これがギヤツプ萌え……」

うんうんと頷いて腕を組んでいたらしいの間にか雨童女は目の前にいた。

それこそ目に穴があくのではないかというくらいにじろじろ見られた。



うわ、何。値踏みされてるみたいでいやな気分になる。

一通りわたしを見回した雨童女が言い放った言葉はこれであった。

「アンタ、なんでここに居るワケ？」

はい？部屋にいてはいけないってことなんだろう？でもここはわたしの家みたいなものだし。いいではないか。むしろそつちが勝手に来たようなものだ。

「むー」

「……わかってないのね、己が何者かを」

……確かにわたしはわたしを知らないが、それを見ず知らずの奴に言われる筋合いはない。ますますわたしは機嫌が悪くなる。眉間に皺が寄っているのが自分でもわかる。

雨童女にはわたしの不機嫌になった理由は理解していないらしい。

自分ばかり口を開く。意味不明な言葉ばかりを。

「本来ならアンタは私たち『コツチ側』のはず……ふうん、それで四月一日って訳ね」

「雨童女」

いつになく冷たい声だと思った。

いつの間にか、わたしの後ろにゆうこが立っていた。

「あら、魔女ってば怖い顔してそんなにこの娘が可愛いのかしら？」

「ゆーこ？……ゆーこ、怖い顔してどうしたの？」

わたしは不安になって侑子の腕に縋り付く。侑子はわたしの不安を取り除くように優しく髪を撫でてくれた。

「くーは四月一日と一緒に行きなさい」

「ハア!?ちよつと待ちなさいよ、私はあの子に頼んだのよ」

「この子が必要なのよ。いいわね、くー」

「うん！わかったー」

たつたかと元気よくわたし支度していた四月一日に突進して君尋の背中にへばりつき、君尋は苦笑いしながらもそれを受け入れている。わたし達は騒がしくお店を出て行った。

「何よ」

「余計な事をしゃべらないで欲しいわね」

「アラ、私がおせっかいとでも言うわけ？よほどあの子がお気に入りのね。次元の魔女ともあろう者が」

「なんとでもいいなさい」

「紅竜が世界に与える影響は大きいはず、その『依巫』が不在なままでマズいんじゃない？時間をかけてまで育てる必要があるというの」「くーは今ゆっくりと学んでいるわ、それでいいのよ。余計なおせっかいは無用よ」

牽制を含めて侑子は言い放つ。だが雨童女は鼻であしらう。

「おっせかいですって？ハッ！『紛い物の姉』よりはあの子の方が格が上でしように。珍しくアナタは両方大切にしてるようね」

「口を慎みなさい。蒼龍は天姫に関しては敏感よ、陰口叩くと容赦なく潰されるわ」

「……………紛い物は所詮紛い物よ。どんなに精巧に創られていたとしても永遠に『本物』にはなれないわ」

雨童女は言うだけ言って店を出て行った。一人になった侑子は、降りしきる空を縁側から見上げ呟く。

「紛い物……ねえ……？」

何が紛い物で、何が本物なのか。

その判断をするのが一体誰なのかその権限が果たしてあるのか。言葉にすることはできないけれど確実に覆されはしないことがある。

それは余計な介入は許さない、それが、『願い』だもの。

あの子たちの、光の願いだから。

（『紛い物』と『本物』の違い）

## 15 『おかえり』

四月一日 side

雨が降っていて俺とくーちゃんいて俺の手元には傘が一つしかない。これすなわち：相合傘じゃないかつ！くうく、俺って今日最高についてるのか!?

なんて、幸せに浸っていた俺だったけど、それも短い夢でした。なぜかって？あははは、お決まりのパターンってやつさ。奴の姿をロックオンしたくーちゃんの行動は目にも留まらぬ速さだった。腕を広げ雨の中を濡れるのをいとわずに走る走る走る。

「百目鬼さあーんんんん！」

むぎゆつ。

「よう」

と言いながら抱き着いてきたくーちゃんの髪を優しく撫でやがった！

「はによーん」

ヤバい、あれは！

「くーちゃんが『はによーん』状態になつてるー!？」

説明しよう。『はによーん』状態とはくーちゃんが特定の相手の前だけに発生する特殊な状態。すなわち『撫でられて気持ちいい子猫みたい』な感じなのだ！って冷静に分析してるんじやねえよ俺!?!……くうく、やはり俺よりもやっぱり百目鬼に懐くのか？普段からくーちゃんの腹を満たしてきた、この俺よりも!?!あの、あの百目鬼に！嫉妬で腸煮えくり返りそうだ。

「何アレ、べつたりねっちよりしてるの」

「クソおとおお！俺から説明するんなんていう酷な事出来るかあああああああ！」

雨童女（アメフラシ）がひよっこりと顔を近づけて説明求む！と要求するが俺は頭抱えて叫ぶのに忙しいので無理だ！地団太踏んで悔しがる俺を傍目に二人は仲睦まじく（？）会話を続ける。

「くーも一緒だったのか」

「うん、ゆうこに言われたの。君尋と一緒に行きなさいって」

「そうか」

「うん」

「あの変なのは妖怪か？」

「ううん、違う。雨童女（アメフラシ）だってさ」

「そうか」

「百目鬼さんも一緒に来てってさ」

「俺もか」

「そうそう」

俺以外の人間からしてみれば微笑ましい光景。

なんだよなんだよくっ付いてくっ付いてくっ付きやがって！

「くそおおおおおおおおおおお！」

俺からしてみれば腹立たしい事この上ない衝撃展開！歯ぎしりし

そうな勢いだっ俺の横で雨童女は

「うーん！なかなか清浄な場所♪」

と傘片手にくるりと嬉しそうに回って楽しんでいる様子。お寺の清の気に喜んでいる。

（アレとコレとソレがあれば足りるかしら？）

◇◇◇

くーside

ひまわりちゃんの家に行ったりリボンを借りてバイバイと手を振って目的の場所まで来て、紅く染まった紫陽花がなっていて雨童女が「助けてあげて」と切なそうに顔を歪ませて君尋にお願いして君尋の足に紫陽花がからまってそれを取り外そうとした君尋がフツとわたしの目の前からいなくなりかけてわたしが「ダメっ!!」と声を上げた彼の制服の裾を掴もうとして手を伸ばして——そこからだ。そこからわたしの記憶はパターン！と本を閉じたように途切れたんだ。

「ここはどこだろ」

行けども行けども真っ暗闇の先は真っ暗闇。なのに自分の躰が見えるってどーいうこっちゃ。光つてるとかそういう意味じゃないんだけどね。闇の先、深くなっっていく。どこまでも、どこまでも。

なんだかよくない場所のようだ。はつきりわからないけど、よくない。深く潜り込んでしまうと戻れないみたい。ともかく進むことはやめて、その場で彼の名前を叫ぶことにした。

「君尋〜」

「君尋やーい！」

声だけが吸い込まれていくだけ。いない。何処にもいない。大丈夫かな、君尋……。不安が広がっていくと同時に心細さが増していく。

「誰も、いない…」

「誰も応えてくれない……」

そうだ、こんなこと『前』にもあった？

「わたし、一人ぼっち、だ」

一人ぼっち、だった。そうだ、誰かに置いて行かれそうになった。ちよっと思いついた。誰だかわからない自分だけど、思い出があったんだ。

わたしは、誰かにこんな気持ちを抱いていたんだ。悲しくて、苦しくて胸が張り裂けそうになって何かを叫ばずにはいられなかったんだ。

何を？わたしは、何を叫んだんろう？

思いだそうとした、けどダメ。思い出せない、頭にかかった霧が晴れない。

わからない、わからない。どうして思い出せない。思い出さちゃイケナイから？……いけない……？

浮かんだ言葉にひっかかりを覚えた。記憶がすっぱり抜けているはずのわたしにある記憶。

それを思い出しちゃいけないって誰かが言うの。わたしは思い出したいんだ。なのに、誰かがストップをかけてくる。

「思い出したい、わたしは思い出したいの！」

抗おうとして止まっていた足を動かした。一步、一步踏み出しただけなのに

『ずぼっ』『あっ!?!』

足がずぶりと沈んだ。闇が濃くなったんだ。闇の中から手招きしてわたしを引きずり込もうとしている奴等がいた。わたしを狙ってる、逃げなくちや、でも足が、足がはまっちゃったの。動かせないの、もがけばもがくほど闇にはまり込んでしまう。

「助けて、誰か…助けて」

ゆうこ、もこな、マル、モロ、百目鬼さん、ひまわりさん、えれなさん

「君尋、……天姫、さんっ!」

助けて!

ふっと、聞きとれないほどの小さな声がした。わたしの後ろから。

『……………』

「…っ…」

わたしはすぐに周りを見渡した。アイツらがすぐ迫ってきているからだ。でも違う。前方から集まってくるアイツらじゃない。

『……………っ……………』

これは?

「……………誰……………?」

『……………』

わたしを。

「……………呼んで、る……………」

『……………だ……………』

徐々に声が聞き取りやすくなってきた。わたしは足を引っ張りだそうともがきながら叫ぶ。

「君尋? ねえ君尋なの!?!」

『……………』

「君尋、君尋!」

彼だ、彼が助けに来てくれたんだ! わたしの心に希望が生まれた。

『……………だ……………』

呼んでいる、わたしを呼んでいるのだ。わたしは力込めて闇から足を引っ張りだした。そして勢いよく駆けだした。声のする方へ。

「待つて、待つてってばっ！」

息を切らして走って走って走った先に一筋の光が現れた。声はつきりとしてきた。確実にわたしを呼ぶ声。闇から引き離す為に、声をだしてくれている人がいる。

『こちらだ』

「君尋！」

光目がけて飛び込んだ。その先に彼がいると信じて。でも、違った。

「貴方、誰……」

君尋じゃなかった。わたしを呼んでくれていたのは彼じゃなかった。

見知らぬ男の人。綺麗な金髪に紅い生地の上に蜘蛛が描かれた着物を着こんで目元は不思議な模様の仮面。彼はわたしの問いかけに冷たい声で答えた。

『……必要なろう、名乗ることに意味があるのか』

なんだ、君尋じゃなかったのか、と落ち込みそうになったが助けられたのだ。

礼を言おうと思った。でもお礼を言う前に名前を教えて欲しいと思ったから自分から先に名乗った。

「わたし、くーって言います」

すると彼は、一つ溜息ついて

『……人の話を聞かぬ所はアレにそっくりだな……』

と零すように言う。

「アレ？誰かの事言ってるの？」

彼はわたしの問いに答えることはなく自分の言いたいことだけを告げる。

『この場はお前には似合わぬ、上に戻れ』

だがわたしも聞きたいことはあるのだ。負けていられるか。

「だから名前は？」

『……鬼の首領、と呼ばれていた時もある』

「鬼の首領？変な名前……じゃないなんか名前じゃないじゃん。悪っぱ

い悪だ悪なんだ怪人Xっていう役職とか？決め台詞は『イー!!』とか？それとも雑魚キャラじゃなくて悪のボス？」

とわたしなりの解釈を伝えれば、彼はまた大きいため息をつき

『……………アクラムだ…』

と教えてくれた。わたしは満足して感想を言いつつ礼を述べる。

「やっぱり悪っぽいね。ありがと！親切なあくらむさん」

『さっさと行くがいい』

言い方が雑。だけど別にいいや。君尋のところに還れるなら。

わたしはあくらむさんに手を振ってわかれた。

「じゃーね〜」

くーがいなくなった後、残された彼は

『……………フ……………一言一言余計な所も似過ぎだな』

と苦笑気味に一人笑うと闇に溶け込んで消えて行った。そして、闇はまた闇に戻る。

(そして上に戻ったくーは心配していた君尋に抱き締められるのでした)

◇◇◇

四月一日side

お寺にて意識が回復した俺は布団の感触を肌で感じ取りながらぼんやりと天井を見上げ思った。ああ、そういえばあの女の子に引きずられそうになって上から垂れてきたリボンに掴まって地上に戻ってこられたんだよな、と。女の子は無事にたどり着けたんだろうか。

ダルさが若干残る躰をのそりと起き上らせると横に百目鬼の姿があった。

奴の顔色がいつもとどこか違う表情なのは俺の気のせいだろう。

百目鬼の顔色読めたって嬉しくもなんともないしな。

そういえば、くーちゃんの姿がないなど視線で捜すもやはりあの騒がしい少女の姿はどこにもない。俺は百目鬼に尋ねた。

「くーちゃんは？」

百目鬼は一瞬躊躇った顔を見せたが、意を決したかのように俺に



言った。

「くーは消えたまま戻らない」

そう百目鬼に告げられた時、俺は頭は真っ白になって動くこともできなくなった。

声が、掠れてまともに喋れない。

「な、なんだって?」

コイツ何言ってるんだ。頭イカレタのか?

気がついたら自分の腕が伸びて百目鬼の胸倉掴んでた。絞める勢いで睨んで睨んで訂正しろとって叫ぼうとした。けど「あの子ならまだ『下』よ」雨童女の抑揚のない声音が耳に痛いほどつく。

『下』ってなんだよ?まさ、か……あのほの暗い暗闇に取り残されたままって意味、か?

俺は体の不調の事など頭になかった。ただあの表情を変えない雨童女に突っかかろうと立ち上がった。けど百目鬼に羽交い絞めされる。

「ふざけんなっ離せ!」

「おい落ち着け」

「落ち着いてられるか?!くーちゃんがくーちゃんが取り残されてるんだぞ?」

俺の激高に雨童女が眉毛をピクンと動かす。

けど、それだけだ。たったそれだけしか表情を変えない。

「あの子なら大丈夫でしょう、何をそんなに心配することがあるのかしら」

「アンタに何がわかるってんだ!」

「四月一日」

暴れる俺に侑子さんが声をかける。俺は必死に頼み込んだ。

「侑子さん俺をあそこへ、もう一度あそこへ行かせてください!!」

「出来ないわ、あそこは死に近い場所よ」

けど、ハッキリ言われた。無理だと。

「死、に近い…でも俺は…」

俺は、諦めたくない！そう強く願った。その時、寺の境内に突如膨大な光が出現した。

パアアアアアアン！

「うわ!？」

「くっ」

目元を腕で庇うもその大きな光の塊はあまりに強いものでとてもじゃないが直視できるレベルじゃない。あれは

「っ、くー、くーちゃん!」

雨の中地面に倒れている少女目がけて俺は濡れるのも厭わずに突っ走った。

駆け寄り腕に抱き上げて若干濡れているがちゃんと体温が確認できた事に一安心した。

けど、くーちゃんは意識ないままグタリとしている。

「……………」

俺は何度も何度も彼女の名を呼ぶ。

どうか目を覚ましてくれ、その一心で。

「くーちゃんくーちゃんくーちゃんくーちゃんくーちゃん」

「……………んにゃ?…………あれ、君ひろ…………だ」

俺の声にゆっくりと瞼を開き、とぎれとぎれではあるが俺の名を呼ぶ少女に一気に安堵した。

「くーちゃん、くーちゃん……………よかった……………」

君だけがあの冷たい暗闇の取り残されてしまったと。

俺は何をしてたんだ、どうしていつもくーちゃんがこんな目に遭わなければならなんだって情けなくて、でもくーちゃんが目を覚ましてくれて

こうして俺と視線を合わせてくれることがすごくすごく嬉しくて思わず、涙腺が緩んでしまう。

「君尋、濡れちゃうよ……………あれ、なんかしょっぱい……………雨降ってるのに……………」

「…………『涙雨』じゃないからかな…?」

誤魔化してみるけど、普通考えてみれば雨がしょっぱいはずはな

い。けど、くーちゃんは一度瞼を閉じぽつりとこぼす。

「そっか、涙雨……か」

「お帰り、くーちゃん」

帰って来てくれてよかった。

「ただいま、君尋」

君の『ただいま』を聞けることがこんなにも嬉しいだなんて。

(ますます君から離れられないような気した)

◇◇◇

その後の魔女と少女のやり取りの一部。お店に戻ってぽやぽやと縁側で過ごしていると

いつも通り昼間から酒を飲んでいる侑子が廊下に転がっているくーに声をかけた。

「ちゃんと彼に助けてもらった『お礼』は言ったかしら？」

「うん！言えたよ。あの悪っぽい名前の人でしょ？」

「そうそう」

「ゆうこの知ってる人だったの？」

「ええ、友人の旦那さん」

「へえ、意地悪ゆうこに友達いたんだ」

「あんた何感心してるか知らないけどあたしにも友人ぐらいいるわよ」

「あははは絶対ゆうこの友達って一癖も二癖もある人だよ」

「それ以上に強烈よ、あの子は」

「……ふーん」「くーちゃん、特大パフエ出来たよ」

「やった!!まってる愛しのパフエちゃんー!!」

君尋の呼び声にすぐさま起き上がり喜んで走って行くくー。その後姿を見つめてポツリと一言。

「くーにしては大正解よ」

と微笑んだそうなの。

(出会いは必然の内に)

雨童女がいなくなった途端、一気に梅雨が明け暑苦しい夏がやってきた。

照りつける太陽の日差しの中、庭先ではなんとも気持ちよさそうな光景が広がっていた。

「うわーい！冷たい〜」

「やっぱり暑い時にはプールに限るわね〜」

お子様プールにて楽しそうにはしゃぐ〜とモコナ。勿論水着はちゃんと着て、だ。

侑子といえば優雅に水に浸かりながら日焼けを避けての日傘を差しつつ〜とモコナの遊びを見守り中。一応、大人としての責務は理解しているようだ。

「モコナ、くらえく〜様必殺！水鉄砲！」

「ぐわあく、ヤラレたく。けどモコナ必殺！水返し！」

「じよわ!?ぐふふおお主なかなかやるなあじよわっ!?!」

突如勢いよく水が降りかかる。何とも意地の悪い声が後ろから発生。

「おほほほほ、後ろががら空きだったわよ」

魔女だ、魔女が参戦してきたのだ！

なんと大人しく見守っていると扮して実は機会を狙って自分も参加する気満々でいたとは。だが基本、く〜は気にしない。

大人相手だろうが容赦はなしだ。

「ぬう〜ゆうこが参戦しおったぞお！モコナ！共に反撃と行こうぞっ！」

「合点承知の助だー！」

争っていた一人と一匹であったが、ここは共闘と意気投合し勇猛果敢に侑子に襲い掛かる。

なんとも楽しそうな面々ではあるが、すぐそばにて

「…………おれ、は無視…………ですか…………」

息も耐え耐えな少年が一人地面転がっていたのは誰も気にも留め

ない。

可哀想ではあるが、実は彼の首元にすり寄るある生き物がいた。  
にゆるるん、にゆるん。

兩童女からの対価の品として侑子の手元にやってきた『管狐』。  
いたく君尋がお気に入り召したようぴったりと彼から離れよ  
うとはしない。いつもどこかに潜んでいる。

♪』

今も一緒にいられて嬉しそうに喜んでいる。

「うう、嬉しいようなあんまり嬉しくないような……」

どうせだったらくーちゃんと言いたい……と残念な君尋君だった。

(今日は学校で『羽根』が生えた女の子と逢うのです)

◇◇◇

学校で背中に羽根を生やした女の子を見かけて、なんだか変だなと違和感を感じた一日を過ごした君尋。すっかり懐かれた管狐がやっぱり君尋の制服によろつと隠れてたりして「侑子さんに嫌味言われる!？」と慌てたりなんやかんや忙しい日だった。

『偶然』拾ったと一枚の『羽根』をズボンのポケットにしまい込んだことなどすっかり頭から抜け出ていた。夕飯の冷麺の材料をスーパーで買ってお店向かう帰り道、あーでもない、こーでもない一人ブツブツ呟きながら歩く。

「どーするか……」

君尋の頭を悩ませる原因は一つしかない。

『そういえば座敷童にホワイトデーのお返し何にするか考えてるかしら?』

なんてニマニマ笑う侑子から言われた時、君尋はぎよつと驚いた顔で

『あれっでもらったって言うんですか!?!』

と反射的に言い返していた。

あの特製『百目鬼魂フォンダンショコラ』が自分に向けてのバレンタインデーとな!?!

君尋は一切もらった覚えはないというのにあの座敷童の少女は自

分に差し出した気であるのか、驚くばかり。そういえば前に侑子は君尋に言っていたことがあった。

百日鬼の魂チョコを本人に取り込ませている時の会話で、君尋が首を捻りながら自分は今チョコをもらった事になるのかと疑問を抱いていると侑子は

『言葉』でいうならまさにそうでしょう？』

と言ったのだ。

「言葉、で…？」

確かに言葉通りならそうだ。

だとしたらお返しというものを用意しなくてはいけないという事だ。

女の子に贈り物なんてしたことがないからどうなのがいいのかわからないが、まずあの少女の居所がそう簡単にわからない点で選べる選択肢が限られてくる。

つまり、食べ物とかは無理という事。

手作りのお菓子は無理だろうし日持ちしないだろう。

だったらアクセサリーとか気軽に身に着けられるものが割と好まれるかもしれない。

いやだが、君尋自身はこのお返しになんの気持ちも抱いてはいない。

『義理』という意味だ。

あの座敷童の抱く密かな恋心に気がつかない鈍感な少年、君尋はあつさりと問題が解決すると次は別の事に意識を向けた。

くーにやるホワイトデーはどうしたもんか、と。

自分の為に作ってくれた踊るお菓子『ダンシング・カンノーリ』という鬼才輝かしい品物をバレンタインにもらったとなれば、それ以上を凌ぐ品物でなければ君尋の心がくーちゃんを満足させられない！らしい。

だから一体どうしようかと真剣に悩むが一向に解決しないままお店の前に辿り着いてしまった。

「仕方ない…」

君尋は深くため息ついて玄関の戸に手をかけた。後で家に帰ったらまた考えようと。

だが突如ぐつと背中が引つ張られ身動きが一時止まる。

「なんだ？」

反射的に後ろを振り返ると、頭にモコナを乗せたくーの姿があった。

どうやら彼女が君尋の制服を引つ張り止めさせた様子。

「君尋、お帰り」「変なの持ってきたなー」

「くーちゃん、ただい、まっ…は？モコナ今なんて」

じー、と穴が開きそうなほどある一か所を見つめるくーの姿に君尋はなんだ!?

一瞬焦った。くーはくーで君尋のズボンのポケットを見つめるいなや突如

ずぼっ！

「うおっ!」

躊躇いもなく君尋のポケットに手をつっこみごそごそと何かを掴もうとする。

「ちよ?!くすぐった!」

くすぐったさに身を悶えさせる彼の隙をついてくーは目的のものを取り出した。

「…もう、一体なにが…ってそれ羽根じゃ…」

そうくーの手の中にあるのはぎゅつと握りしめられた一枚の羽根。

呆氣にとられる君尋をよそにくーは

「君尋、ダメだよ。『変なの』持ってきちゃ」

と顔を顰めるとたったかと玄関を先に開いて中に入っていく。そして玄関に立っていた侑子に

「ゆうこー、これー」

とほいっと手渡す。侑子はそれを無言で受け取り手の中でふわりと浮かせ、ボオオオオオオオオ!と炎を出現させ一気にメラメラと燃やし消滅させる。そして何がどうなってるんだ?と色々置いていかれて

いる君尋に淡々と忠告した。

「四月一日、気をつけなさい。『エ』にされないように」

「『エ』ってなんスか？」

いきなり意味不明な言葉を言われてもすぐに理解できないのは当たり前前。

けれどクーとモコナがしつこいくらいに

「わかった？」「わかったって言えー」

と君尋の周りをぐるぐる回るものだから君尋は「はいはい、わかりましたよ」ととりあえずの返事を返し玄関の戸を閉めるのであった。

(いずれ、嫌でも理解する)

◇◇◇

くー side

今日は珍しくゆうこがモコナと一緒ににお出かけすると言った。わたしも一緒に行きたい！とお願いしたけど『アンタはお・留・守・番♪』と却下された。

むきー！と抗議するも『ダメ』と言われ、わたしはゆうこの年増ー！と抗議したら『五月蠅い、ちみっこい』と言われながらほっぺをびよーん！と伸ばされの刑に。

ゆうこは『じゃーねー』とわざとらしく手を振って出て行きました。くそー！マルとモロが引っ付いて邪魔していなければ一緒にいたのに…。これもゆうこの策略か……。

うう、ほっぺが痛い。思い出してもむかつきつき。

それにしても昨日、君尋が持ってきたあの嫌な気配の『羽根』が気になる。

なんとなくあの気配が気になって君尋から奪取したが君尋はなんでもんなものを持ってきたのだろうか。

「うーん、心配だ」

「クーはシンパイ？」「クーが心配？」

マルとモロが今はわたしの遊び相手。さつきまで暇つぶしに追いかけて遊んでいたけどそれもつまらなくて途中で飽きてしまった。一人で縁側で座ってあの『羽根』の事を考えていたら鬼役の



マルとモロがいつの間にか両隣にいた。

「わたしじやくて君尋が心配なんだよ」

と返すと

「四月一日気になる?」「四月一日気にしてる?」

と言われわたしは目を瞬いてそういえば確かに!と納得。

なぜかわたしは君尋が気になる。大事だから?でも大事ってどういう意味だろうか。

『大切』って事?でも、わたしに『大切』な事は必要なのだろうか。

だって何をしたいのか、自分の事さえわからないのに、『大切』を作っていいのだろうか。

その『資格』はわたしにある?この手で掴んでいい、ものなの?

もんもん悩んでいると時間はあつという間に君尋が帰ってくる時刻になっていて、玄関がガラガラと開く音がすると同時に「ただいま」と君尋の声が。わたしはハッ!と気がついてすぐに玄関に走る。

「お帰りー!とりあえず腹減ったぞー」

と君尋に飛びついた。君尋は

「うわ!」

と声を上げて驚いたけどちゃんとわたしを受け止めてくれた。頭撫でつつ実は今日ね、と言ってきた。どうやら今日はお祭りらしい。勿論わたしは大声で

「行くー!」

と返事をした。マルとモロはどうやらお店から出られないようなので君尋が出してくれた浴衣を着て下駄をはいてお土産買ってくるねーと手を振って仲良く君尋と手を繋いでお店を出た。

(何食べようかなー?)

◇◇◇

くーside

お祭りは楽しかった。百目鬼さんがいて「はにょん」となつてくっ付いてひまわりさんが「クスクス」とおかしそうに笑って君尋が「シヨッキング!」と泣きながら叫んで面白かった。出店の食べ物を全制覇して最後、お店の人に泣きつかれるまで食べて食べて食べつく

して今日は最高に良い気分だったのに『羽根』を生やした女の子と遭遇したことで気分はドーン!!と一気に下に落ちていった。せつかく皆で楽しんでいたのに…。

ぶーぶーと口をとがらせて暇も持て余す。今日もゆうこはいない。朝起きたらすでにゆうこの姿はなかった。なんと!?素早いゆうこだ…。いつものんべんだらりとしているゆうこにあるまじき行動。明日は雨かもしれないと唸るが、やっぱりつまらない。

『くーちゃん』

「あ!えれなさん」

幽霊の友達のえれなさんがふわりと目の前に漂っている。ほんわか笑顔はわたしの癒しです。普段ゆうこの『ニヤリ』っていう笑みしかみてないから。

『この間は大変だったわね?私すごく心配で…』

この間?はて?何のことを言っ…。

「ああ!あの暗闇に堕ちた話?」

『そうそう、私じゃいけない場所だったから助けたかったのに、ごめんなさいね』

申し訳なさそうに謝ってくるえれなさん。わたしはパタパタと手をふって気にしないでという。

「えれなさんが気にしなくても助けてくれた人もいたし」

あの悪っぽい名前の人に。

『あの人の事ね、良かったわ。本当に』

「うん、ありがとう!」

『そういえば侑子はいないのね』

「そうなの、置いてけぼり…」

『それはくーちゃんが大切だからよ、きつと』

「そうかなー、自分だけ楽しいこととかやってそうないイメージしかない」

こうー、上から目線で高笑いしてそうだと伝えるとえれなさんは『段々忙しくなってきたのよ、これからが大変だから。きつと——色々動き出したのね』

と言うがわたしは言葉の意味が理解できない。

「？」

『気にしないで、くーちゃんはゆつくり学んでいけばいいんだから』  
なんだか誤魔化されたみたい。けど気にするなというのならば、気にしないことにしよう。

美人が言うんだ。間違いないはず！

わたしは「そうだね！」とその話はそこで終了し別の話題へと変えてえれなさんとおしゃべりを楽しんだのだった。

(君尋がいる学校では色々あつたみたい)

## 17 『バブル爆弾爆発3秒前!』

それは仕組まれた事。誰かの仕業? そう、誰かの企み。たった一つの願いが生み出したいくつもの螺旋の数の内の小さな欠片の現象。

『あれは何なんですか?』

と君尋の疑問に『蟲』(ゴ)だと魔女は君尋に教えた。

人の心の抑制力を奪いじつくりとじつくりと己と力として吸い込んでいく。

背中に生えた『羽根』はその証。

君尋が見て認識した少女は抑制力を奪われ吸われ暴走し、果てまつののは抜け殻の器だけ。

少女の心に巢食った『蟲』は少女の魂を喰らい大きく翼を広げ夜空に舞う。

魔女は言う。

「アレは大きな術を使うために集められているわ」

と。何の術に? と君尋は疑問をぶつける。

魔女は答えずにすううつと夜空を見上げた。つられて君尋も頭上を見上げる。

おつきな、おつきなお月様。貴方は光浴びてなお光り輝く。

それにつられて踊るモノも現れた。ホラ? 見上げてごらん。

(今日も『羽根』が月明かりを浴びて舞っているよ)

◇◇◇

四月一日 side

今だかつてないほどのピンチが俺に襲い掛かっている。緊張感から生まれる汗が額に背中に浮かんで仕方ない。だかそれを拭うことさえ今の俺には許されていないのだ。

なぜかと言うと…。両隣から殺気にも近いほどの視線を向けられている。じとく。

「あの」

虫が鳴くような細かい声なれど出してみる。けど無視された。

どうすれば!?

なんて脳内で頭抱えて叫ぶ俺であるが視線は止むことはない。  
じと〜×2。

再度チャレンジしてみるんだ！俺！勇気振り絞って声に出す。

「いやその」

が、これも無視。誰か助けて!?!と助けを呼ぼうにも、ここは俺達三人しかいない。

そう、俺と、クーちゃんと、座敷童しかいないのだ。侑子さあああんんんー！恨みますホント、恨みますから！

どうしてこのような状態になつているかというところほんの数十分前にさかのぼることになる。

『羽根』を背中に生やした少女に襲われかけた時に一緒にいた管狐に助けられた俺。

管狐はあの『羽根』の影響か、いつものものによるよろろ!とした姿ではなく大きな狐の姿のまま俺に懐いたりしている。背中に頭を押し付けてきたりべったりと離れないものだからまるで親鳥になつた気分になつた。けどクーちゃんも「わたしも負けないぞー!」となぜか対抗意識を燃やして

管狐と張り合つて俺に引つ付こうとする。それはそれで嬉しい限りだ。

実際怪しいくらいニマニマと顔が緩んでしまった。その時の表情を侑子さんに見られた時

『ぷっ』

と吹かれ小馬鹿にされた感じがするのはなぜだろうか。

いやいや今重要なのはそれではない。管狐の事だ。管狐には実際助けられた、すごく感謝している。けどずっと大きいままなのは正直なんだかなあとも思う。

しばらくそのままでもいいかと思つたがさすがにお店の品物を整理整頓していた時、「管狐が大きいままなのは良くないわねえ」と一言呟いた侑子さんの命令で何に使うのかも知らされなまま、夜、外の裏の井戸から水をくみ上げてきてそれを壺の中に流し込んでさらに水晶をザララと落としていく侑子さんの行動を俺とクーちゃん、それ

に管狐は不思議そうに観察していた。

すると侑子さんが「壺の水に映し出された月を覗き込んで」と唐突に言いだすから俺達は素直に覗き込んだってわけだ。

ゆらゆら揺れる水面の上に浮かぶお月様。その瞬間！俺の躰が揺れる感覚と共に

『バシャン！』

「成功！行ってらっしゃーい」

の声でしてやられた！と後悔するもすでに遅し。俺の意識は水の中に引きずり込まれて急いで口元抑えて半分パニックっているくーちゃんの腕を掴んで上に引っ張って泳ぐ泳ぐ。さすれば

『ザバァン！』

「ぶはっ！」「げほほほっ！」

何とか水面から顔を出すことに成功した俺たち。けれども俺は目の前の光景に呆然とした。

「なんだ？」

だってミラクル・ワールドが広がっていたんだから。

(そこからAliceな世界気分)

◇◇◇

喋る水仙とか大きくなる水仙とかそんなのばかりだったけど、管狐が元のサイズに戻るといふ目的は達したのだ。そこまでは良かった。けど！そこからが問題だった。喋る水仙に脅されて脅されて走ってきた先がなんと俺がホワイトデーのお返ししなきゃと思っていた相手、座敷童が住まう山へと繋がっていたのだ。

「四月一日さん!？」

「君は…座敷童」

見つめ合う俺と座敷童はこれで二度目の出会いになる。けれど違う二人がいた。

「……………誰、その子…」

「貴方……………は!？」

不機嫌そうなくーちゃんと驚きを隠せない座敷童は初対面だ。

「……………」

「……………」

「……………」

そこから剣呑した雰囲気へと突入したと言う訳。俺たちは『仲良  
く』三人で岩の上に腰掛けている。

じと〜×3。

「勘弁してください」

泣きたい、今すつごく泣きたい。くーちゃんに左腕をぎゅつと握ら  
れ上目づかいをお願いされた。

「君尋、早く帰りたい。ね？帰ろう？帰ろうよ！」

座敷童に右腕を遠慮がちに掴まれ顔を上気させながらおずおずと  
喋る彼女。

「…あの、私は！そ、の………」

少女二人に腕掴まれて間に挟まれて俺は身動きできない。否！身  
動きどころの話ではない。

息すらできないんじゃないかというくらいの膠着状態である。

これは俺に死ねと言っているのか？

うう、怖い。怖すぎる……う、胃がキリキリする……！

(人生初のモテ期突入か!?)

結局俺は座敷童にホワイトデーのお返しを渡すと力強く引つ張る  
くーちゃんに引きずられる形でその場を後にした。去り際、座敷童が  
悲しそうな顔をしていてちよつと悪いことしたなとも思ったが、それ  
よりも気になったのはくーちゃんの態度。

座敷童に対して嫌悪感すら隠そうとしないくーちゃんが気になっ  
て仕方がない。

ずんずん！と歩いていたけど、くーちゃんの方から手を放されて今  
は歩く二人の間にほんのちよびつとの距離が空く。

管狐がよろつと手首に絡みついてくるのを撫でながら俺は恐る  
恐るくーちゃんに話しかけた。

「…あ、の……くーちゃん？」

「君尋！」

「ハイ!？」





同じ言葉がリフレインして『ぼんっ！』一気にそれは高まって爆発。  
俺は顔真っ赤、口元抑えて、同じく、顔を紅く染める少女を見るこ  
としかできなかつた。  
だって、

(『ずっと』って意味を深読みしてしまったから)

18 『ゆうこのきょういく』

元気百倍！くー様登場也。たったかと廊下を走り目標発見すると同時に床をばつと蹴つて勢いよく見慣れた背中に突進する。

ぼすつ。

「君尋、スイートポテト食べたいぞ！超特大のおねげえくしますだ！」

なぜなまっているのかは知らないがくーは満面の笑みで君尋にねだった。

季節は少し肌寒くなった秋に突入しようという時期。スイートポテトも旬である。

さて、ねだられた方の君尋と言えなぜかガツガチの強張った笑みを浮かべながら振り返り

「お、おうーくーちゃんの為なら死ぬ気の炎を灯してみせるよ！」

と後半何を言っているのかわからない台詞を言う。勿論のこと、くーは理解できずにきよとんとした。

「は？」

「ハっ!?俺何言つてんだよ俺!?ご、ゴメン!?すぐに準備してくるからっ！」

脱兎の如く言うだけ言って逃げ去り君尋。残されたくーはと言うときよとんとした表情で「変な君尋」と首を傾げた。

なんだかおかしな二人。

そう、以前くーの大胆発言によりちよつと甘酸っぱい雰囲気になった時があった。

侑子の策略により座敷童の元へ向かう事になった二人だったが、そこで座敷童へのホワイトデーの品物を見てしまったくーが、わたしに欲しいとねだった。

それが『ずつとわたしのお菓子を作って欲しい』というもの。

その意味を深読みしてしまえば、一生自分の側において欲しいとも読める言葉。案の定、君尋はその通りにとってしまい、今じゃくーを意

識して仕方ないほどの状況。

ちよつと近くにいたり指先が触れただけで、初心な乙女の如く、頬を染め照れくささと高鳴る鼓動を鎮める為に後ずさりする始末。果てには逃亡。

しかし！真実は違っていた。

実は、くーは君尋とはまったく別の意味で言ったのだ。

つまり本当に言葉の意味そのままそっくり。君尋の美味しいほつぺた落ちそうな夢のお菓子たちを他の人物にとられたくないという独占力から伝えた言葉。

自分だけの為に作って欲しいからそれをホワイトデーのお返しにしてくれとお願いした。

この関係に名をつけるとしたらこれしかならう。ザ！すれ違い。

侑子がこの場にいれば『フッフ、青春の香りねえ！』と極限に面白がる場面。

「うわ……俺、心臓持つかな……」

と言いながら台所に逃げてぎゅつと服越しに心臓部分を手で当てる君尋と

「あーあ、腹減った」

ぐーぐーと腹減ったコールが鳴るおなかを手で押さえた君尋が作るスイートポテトを待つくー。とりあえず、二人のすれ違いは続きそうである。

(ちよつとは進展あったかも)

◇◇◇

くーside

ゆうこの知り合いはホントたくさんいるなって思った。その理由はずぐにやってくる。

君尋が宝物庫を掃除していて、わたしもお手伝いしていたら棚の上にあった猫さんの絵が入っていた写真立てがいきなりカタ、カタタ！と揺れ出したかと思うと

「おわ!?!」「おお！」

なんと絵から猫さんが飛び出して来た。

鬼灯（ほうずき）を手にもって、だ。どうやらゆうこの知り合いらしい。

君尋の驚く声にひよっこりと顔を出したゆうこと猫さんはあいさつをして、酒盛りに突入！君尋は忙しくなく台所と縁側を行ったり来たり。マルとモロも

「おつまみー」「おさけー」

と楽しそうに行ったり来たり。わたしはゆうこの隣でジュースを飲みつつ猫さんを観察することにした。

ぷはっ！仕事の後の一杯ってのはうめえもんだな！って、リーマンたちは居酒屋とかで言うらしい。

なるほど、勉強になるぜ！それに喋る猫ってレアだもん。

えれなさんにも教えてあげよう！猫って喋れるんだよって。

どうやら猫さんの名前は『灯（あかり）ちゃん』というらしい。

ゆうこがそう呼んでいるからわたしもそう呼ぶことにした。

灯（あかり）ちゃんはいつと酒を飲みつつ横目でバタバタと忙しくない君尋を見やる。

「おやおやこの子が噂の少年かい」

「そう」

と相槌をうつゆうこは、さつきから何杯目のお酒でしょう。

そしてわたしは何度おつまみに手を出そうとしてゆうこに手を叩かれているでしょう。

けっ！別に食べたっていいじゃないかと視線で訴えると

「アンタの胃袋は底なし沼だから駄目よ」

と言われた。ふっ、わたしがそう簡単に諦めると思ってたか！

シユンシユンシユン！

どうだ見えないだろう!?わたしの風よりも早い手の動きは！

残像すら見えてしまう高速手さばきにゆうこは目をキラリン！と光らせ

「甘いわね」

ベシ、ベシシ、バシイイインンン！

とわたしの手を叩きまくる。

くそ、痛いぜ……！さすが、毒牙一発女……。並々ならぬ闘志をひしひしと感ずるぜ。

滴り落ちる汗を手の甲で拭いながら、相手にとって不足なし！とわたしは口角を上げた。

地味に攻防が続くわたしとゆうこの横で灯（あかり）ちゃんは君尋に話しかけた。

「お前さん、コツチの世界じゃ有名人だよ」

「え？俺がツスか？」

「そいでもつてお前さんも」

いてつ、ゆうこめ。今度は強く叩きやがった。

イテテ、と手の甲を撫でてふと視線が集中していることに気がついた。

「？」

なんですか？全然話聞いてなかった。

「わたし？」

なんか君尋のオマケ扱い？別にいいけどなんかわたしって有名人だったのかもつてちよつと思ふ。あの雨童女といい、猫さんといい知り合いに人間がいないのがちよつと心配。

わたしって一体何人間だ？

「そう、小さな竜の娘さん。しつかり学びなさいよ。アンタにや期待してんだからね？」

小さな竜の娘？わたし人間じゃなかったのか！？

ちよつとショック。ここは君尋風に言うとかッテム！

「灯ちゃん」

ゆうこがわたしと灯（あかり）ちゃんに会話を遮る形で彼女の名前を呼んだ。

またゆうこが怖い。それ以上言うなつて視線と言葉で牽制しているみたい。

「わかっているよ、あいさつだけはちゃんとしたかったからね。余計な事は言わないさ」

「なんかわからんけどありがとう、灯ちゃん」

お礼を言うのと同時に期待に応えられるかわからないけども付け足すことは忘れないしつかり者のわたし。えっへん！

「もう時間だね、それじゃあ侑子ちゃんに」

と灯ちゃんが差し出す鬼灯をゆうこは

「それは四月一日にあげて」

と言った。灯（あかり）ちゃんは一つ頷き

「そうかい、それじゃあホラ」

「俺？」

と君尋に鬼灯を手渡す。灯（あかり）ちゃんは「また来年」と庭先から消えて行った。

残された鬼灯は、『ほわああん』と静かに優しく妖しげに光る。

君尋は渡された鬼灯片手にどうしろと？と困った様子。

ゆうこはニンマリ微笑んだ。あ、これなんかたくらんでる顔だと直感。

案の定、君尋は後にゆうこからあるお使いを頼まれたみたいだ。

わたしも一緒に行きたかったのにダメだつて言われた。

次の日の夜、君尋がお使いに出てしまつて暇を弄ばせていた時、ゆうこから君尋を迎えに行くから着替えなさいと告げられ、わたしは嬉々としてはしやぎすぐさま服を着替えてゆうこことお店を出た。

ゆうこの手には大きなお重箱を包んだ風呂敷包み一つ。勿論、わたしも荷物を持たせられた。働かざるもの食うべからずというやつらしい。

よっしゃ！わたしはフルパワーで目的の公園まで荷物を運んだ。

ゆうこはマイペースでわたしの後方を歩く。時折、「こら、走るな」と怒られたりして。こそばゆいなと思いつつ「大丈夫の助！」と言い返してあれよあれよという間に公園へ。けれど君尋の姿はない。どうやら時間になつたら現れるからそれまで滑り台の上でスタンバイするわとゆうこからの指示。ドツキリ作戦らしい。

わたしも乗り気で賛成し夜の公園で怪しく滑り台の頂上でゆうこ  
と仲良くスタンバイ。

ウキウキと待っている間、はたりと気がついた。

これって見た目、怪しいよね？

ゆうこはどう思っているのだろう。正直に疑問をぶつけてみた。そうしたらゆうこは真顔で

「これが大人の正攻法のやり方なのよ」

というからわたしは衝撃を受けた。

そうだったのか!?こんな誰もいない夜の公園で待ち人を待つ時はこのスタイルが主流だったのか…!御見それしましたー!と感激するわたしにゆうこが

「フフッ」

とほくそ笑んでいたのをその時のわたしは知らなかった。

大人の階段上っちゃってんだ、わたし!

と感激いっぱいそのままお使いから帰って来た君尋に背中からダイブしてさっそく教えてあげたら即行で

「違うからそれ絶対違うから騙されるから!」

と大声で言われた。

「ガツデム!」

「オホホホホホホ」

(ゆうこの意地悪はまだ続く)

## 19 『ゆうこのふざい』

く l s i d e

最初の異変はゆうこがお店を出てからだ。玄関前の枯葉を君尋と二人箒で掃いていた時、ある女の人が声を掛けてきた。

「仲が良いのね」

人の気配なんてさっぱり感じなかった。忽然と現れた印象。

振り返ると着物を着たどこか品の良い女の人が一人、わたしと君尋を見て立っていた。

入口より向こう側で。君尋は「そうですか？」と照れた様子ですぐにゆうこの客かと思ったらしくゆうこは今不在だと伝えた。女の人はどうやらゆうこの客という訳ではないらしい。違うと言う意味で首を横に振ったからだ。色々と尋ねてくる女の人に君尋は丁寧に教えてた。わたしはというとずっと女の人を見ていただけ。ぎゅっと君尋の制服を掴み続けたまま。

君尋を近づけない為に。誰にかつて？あの女の人に不用意に接触させまいためだ。

なぜこんなことをしたか。答えは単純。

あの女の人は『生きていない』アヤカシにとっても魅力的な君尋は守る術がない。

百目鬼さんがずっと傍にいるのなら安心できるし、ゆうこがいればまた違ってきたかもしれないけど今はゆうこもいないし、百目鬼さんだっつていやしない。

ならばわたしが、と漠然と感じたソレから君尋を守ろうとしたのだ。ほとんど無意識だったと言ってもいいかもしれない。

お店の電話が鳴った事でその女の人とはさよならした。

出来れば二度と会いたくない。今後一切、だ。

君尋が出た電話相手はゆうこだった。

内容は『色々と立て込んでいてそっちに何日か帰れそうにないからバイトは一応お休み。でもクーが心配だから時折はお店に顔を出して』とのこと。





どこか気になって仕方ない人だった。どこが？って言われても正直に困るけど。

最初の印象は、優しげな女の人。

次に帰り道に『偶然』出会った時、儂げな微笑みに俺に告げた『私には息子がいた。けれど随分前に死んでしまつて、もし今生きていたら貴方のような子になつていたのかしら。ありがとう、こうして話せて夢が叶った気がしたわ』

という言葉に俺はまた逢いたいな、と思つてしまった。

また会う約束をして、女の人が『大切な人を失つた寂しさ』を共有して

また会う約束をして、女の人に俺が作つたお弁当を手渡して喜ぶ顔を見れて嬉しくて

それからまた会う約束を繰り返し繰り返す度に、俺の躰は不調を訴えていった。

あ、そういえばクーちゃん、どうしてるかな。

あれだけお店に通い続けていたのに女の人と放課後を過ごすようになってから、パタリとお店に行くことがなくなった。

ヤバイ、クーちゃん。怒ってるよな。カンカンに怒ってる。

一人で寂しい想いしてるかもしれない。なんで、俺、忘れてたんだよ……。

「四月一日君、大丈夫？」

ひまわりちゃんが心配そうに声を掛けてきてくれた。どうやらぼーっとしていたらしい。俺は慌てて手を振つて笑顔を作つた。

「大丈夫だよ、う、ごほごほっ！」

「風邪ひいたの？…具合悪そうだし保健室で休んできたほうがいいんじゃない……」

「いや大丈夫だよ、そん、な……」

突如、激しい眩暈のようなものが俺を襲う。

あれ、目が、霞む。どうした、俺。躰が、重、い………？  
ばたり

「四月一日君っ!？」

ひまわりちゃんの悲鳴に近い声を最後に、俺は意識を手放した。

(待っているあの人の顔が脳裏をよぎった)

気がついた先は保健室で、俺は百目鬼に運ばれたとひまわりちゃんが教えてくれた。

百目鬼の問い詰める視線と「アヤカシ関係か」と尋ねてきたのに対して、俺は気がつかれてはいけないと誤魔化す自分がいた。

「んなわけねーだろが!」

でもバレバレだった。自分でも墓穴掘ったと思う。声とか表情とか誤魔化せるわけない。

アイツは『こういうこと』に敏感で、時々頼りになる奴(認めたくないけど)だ。

だからこそ、俺を射抜くように視線を厳しくさせた。けど、それ以上問い詰めるようなことはしなかった。出て行く代わりにびっくり発言はかましていったけど。

「くーが来てるぞ」

「は!?!」

なんて驚愕している間に百目鬼と入れ替わりに入ってきたのは、俺にとって予想外の人物で彼女が一人で外に出るなんて考えられなくて俺はパニックだった。

ここは学校で、今は授業が行われてる昼間でえ? あれ? くーちゃん?  
?

ああヤバい頭が正常に働かない間に彼女はドアをバシィ!と開き

「君尋の阿保!」

開口一番の台詞はこれ。ズカズカ入ってきてくーちゃんが一人で外に出るなんて、今まで一度としてなかった。視界いっぱい広がる、少女の瞳は涙でいっぱいふわりと俺の首に縋り付くくーちゃんはある、こんなに小さかったけど呆然と思った。

「君尋の馬鹿!」

その声にどれだけ心配をかけていたか痛いほど伝わった。くーちゃんがどれだけ俺を想ってくれていたのか伝わった。

「ご飯作ってくれないし、一人で食べても味気なしし、お菓子作ってくれないし、遊んでくれないし、寂しかったし、悲しかったし、君尋が倒れたってえれなさんに聞いてお店出て来ちゃったしゆうこいなし百目鬼さんに迷惑かけてるしひまわりさんにだって心配させてるしマルとモロもすぐ心配してたし！わたしだって、わたしだってっ！もう大切な人を失くしたくないのにつ！置いて逝かないでよ、わたしを置いて逝かないで。ずっと、一緒にいるって言ったじゃんかア……………ちゃん」

俺に誰かを重ねてくーちゃんは訴えてくる。くーちゃんは気がついていない。

自分が誰かを思い出しての発言なのかを。

俺は。「ゴメン」と情けなくも謝るしかなくて

「ゴメン、くーちゃん」

と同時に必要とされる喜びをかみしめている自分がいた。

(でも、あの人は本当は寂しかったはずなんだ)

◇◇◇

くーside

いつもの公園のベンチに座る女の人。今日は君尋は来ない。

けれどわたしは来た、君尋の代わりに。これからする事は君尋を悲しませることだろうと思う。けど必要な事を為す為には何かを斬り捨てる必要だつてある。

それをただ実行すればいいだけの話だ。わたしはスイッチを切り替えた。

「こんにちは」

「今日は君尋は来ません」

彼女は理解している。だからわたしにこう聞いてきた。

「……………お嬢さんは私を殺しにきたのかしら」

「だとすればどうしますか」

「何も」

抵抗も反抗もしないという。わたしはスウと瞳を細くし事実を告げた。彼女が与える君尋への影響を。

「……貴方が君尋と接触すればするほど君尋の命の灯(ともしび)は小さくなっていく」

「だから貴方が来た、そうよね？」

そう、わたしは守らなければならぬ。邪魔なものは全てこの手で。そうだ、それが【わたしだったじゃないか】と少しだけ思い出した。

「わたしから君尋を奪うものは全部消す」

一歩、そう一歩だ。わたしが足を一歩踏み出せば彼女は一瞬にして消える。泡のように消え去る。けれど、彼女は抵抗しない。助けを乞うこともしない。無抵抗なモノを前にわたしは足が竦んだ。

躊躇っている？消すことに？死しているとはいえ、彼女はまた消えていない。

その最後を今、わたしが消そうとしている。その『重さ』に、恐怖しているのだ。

君尋が悲しむ行為をわたしは今からしようとしている。君尋の為に。君尋が悲しむのを知っていて。

「くー」

聞き覚えある声にわたしはハッと振り向いた。制服姿に弓を携えて、彼は立っていた。

「百目鬼さん!? どうして……」

「俺がやる」

「百目鬼さん……」

「お前がすることは無い、俺がする」

「百目鬼、さん」

そういつて、百目鬼さんが弓を引く。標的はあの女の人。

百目鬼さんがあの人を消した。わたしが躊躇った代わりに。彼女の最後の言葉。

『彼に伝えて』

『貴方と共に過(こ)せて、私は寂しくなくなった。ありがとう』

と。それが、彼女の本心からの言葉。誰もいなくなったベンチがガランとしていて完全に彼女がいなくなったことを物語っている。

これで、良かった。君尋は悲しむけど君尋の命は助かる。

「くー、泣いてるのか」

「……………うん、…」

百目鬼さんが代わりに選んでくれた。躊躇ったわたしの代わりに、選択してくれた。

わたしは卑怯だ。自分がやるって決めたはずなのにどこかでほっとしてる自分がある。けど、悲しんでいる自分もいる。あの人の寂しさが伝わって、苦しくて、でも君尋と共に過ごせたことが楽しい、嬉しかった、って。

「ほら」

「……………う、ん……………」

大きな手が背中に回ってポスンとわたしの躰は百目鬼さんに寄りかかる。ぎゅっと、抱きしめてくれた。この感覚に、懐かしさを感じ継りつく。そう自分にはいつも温かな眼差しを与え続けてくれた人がいた。いつも見守ってくれた人がいた。温かく寄り添ってくれた人がいた。あの女の人も君尋にそんな感情を抱いていたんだ。

「ごめんなさい」

わたしに謝罪する権利なんかない。けど、ごめんなさい。

これで良かった。これで良かったんだ。

(選択の重圧)

## 20 『嫌いの嫌いの好き』

百目鬼が選択をして四月一日を救い

四月一日は百目鬼の選択を認めた上で平然とすることを選び  
ーはあの女性の最後を一生忘れることはないと心に刻んで。  
三者三様、変わったものはあるがそれは必要の事だったのだ。  
きっかけは些細な事。けどそれが重要な足がかりでもある。

「ゆうこー帰ってきても酒ばっか」

「一仕事したんだからイイじゃない！」

「まあまあ！ーちゃんにはホラ！特大シユークリームだ」

「君尋大好きだアアアアアア！」

「ー、ーちゃんが俺に愛の告白を!？」

侑子がお店に戻ってきて、ーはあいかわらずの食欲で、君尋はあいかわらずのー馬鹿でまたいつものメンバーでぎやいぎやいと騒がしく楽しく過ごす日が戻ってきた。君尋が侑子のお使いで夜にモコナと道中に『しりとり』をしながらお店まである品物を届けたりなんてぷちイベントも発生したりしたけど、なんら平穩に過ごせていたのだ。また、君尋に降りかかるあの事件が起きなければ。

(何気ない行動に怒るモノもいる)



これもゆうこが言う『必然』なのだろうか。

百目鬼さんの御実家お寺の境内でたまたま通りかかった君尋が境内を掃除中の百目鬼さんとばったり出会い、いつものじゃれ合いの中で君尋の腕が蜘蛛の巣に引っかかった事で百目鬼さんがその蜘蛛の巣を壊した。

そう、言葉通り壊した。人の目でみればなんてことはなかった。

けど、蜘蛛の目からしてみれば大切な家を壊されたも同じ事。

苦勞して作り上げてたそれを壊した原因、腕を引っかけた君尋よりも巣を直接壊した百目鬼さんを恨んだ。その恨みはすぐに彼を襲う事となる。蜘蛛の怒りを買ったのだ。

それは執念深く、取り払っても取り払っても絡みついてさらに絡まってもがけばもがくほど酷い有様へとなるだけ。

百目鬼さんの右目の不調は蜘蛛の巣を壊した事で起こった。

右目に蜘蛛の巣の形をしたものが覆い、瞬きすらできなくなった右目。

この事実をゆうこから伝えられた時、君尋はじゃあ俺の右目を差し出します。だから百目鬼を助けて下さいと迷わずに願った。

蜘蛛の恨みを自分に向けてるように願った。

そうすれば、蜘蛛の恨みを受けている百目鬼さんの右目は元に戻るから。

なんて優しい君尋。

眼帯をつけた右目は何も宿さない。わたしも君尋の左目にしか映っていない。

アンバランスな視覚に彼はお店の中でおでこをぶついたりしている。

わたしは君尋の手を引いて縁側に座るように言った。君尋は言われた通りにしてくれて、わたしも隣に座る。

「君尋、ゆうこにお願いしたんだね」

「うん」

「百目鬼さんの為だね」

君尋は優しいね。百目鬼さんの事気に入らないみたいなお態度として本当は信用している。

大切な友達だから、そうしたんだね。

「そう、だね。でもそんなに不便じゃないし」

強がって笑顔作って見せてもわたしにはわかる。

本当は不便だろう。今まで見えていたものを半分失ったんだから。「君尋はいつも強がる、一人で生きていたからそうやって強がって全部を引き受けようとする。わたしはそれが嫌い」

「ー、ちゃん」

嫌い、嫌いなんだけど。



自分の手を君尋の手に重ねた。

「嫌いだけど、なんだか好きなの」

不思議だね、矛盾してるね。

わたし。

「わたしにはそんな人がいたような気がする」

「君尋みたいに、自己犠牲が強い人」

「そんな人の為にわたしも同じことしてた気がする」

どこまでいっても *endless*。同じことを繰り返し続けて繰り返して終わりが無いみたい。 *end* がない童話。幸せがない御話。

「君尋が望むものを否定したくない。これは必要だから選択したんだよね」

「うん」

「そっか、わかった。君尋が決めたんならわたしは反対しないよ」

「でも、諦めない」

百目鬼さんだって諦めないはずだよ。だって君尋が大切だから。

あの人も君尋馬鹿。わたしも君尋馬鹿。

馬鹿同士考える事なんて一緒だと思う。重ねた手に力を籠めた。

「君尋の右目に光を戻す方法はきつとあるはず。わたしは諦めないよ」

「ーちゃん」

「だから自分の身体、大切にして？」

じゃないとおしおきしちゃうよ？なんて冗談めいて言えば君尋は苦笑して

「ーちゃんのおしおきは怖そうだね」

て二人でおかしくて笑いあった。

(諦めない姿勢こそ大切なのだ)

◆◆◆

くーside

君尋の右目が見えなくなってから数日後。ある女が転がり込んできた。文字通りゆうこにたすけを求めて。何者かに怯えて追われて

いる犯罪者のように。

「助けてくださいー！」

「……………アナタの願いを聞きましょう」

女は酷く怯えた表情でゆうこに縋り付いた。

助けて下さい、何でもしますからお願ひします。

何が女をそこまで追い詰めるのか。わたしにはまったく興味はなし。

他人事なのでこうして黙々と君尋が作ったわたし専用特大フルーツタルトを口の中にダイブさせるだけ。

もぐもぐ、うん。美味しい！フルーツ盛りだくさん最高だね！

わたしが傍観を決め込んでいる間にも物語は進んでいく。

「何とかしていただけのんびりですか?! 対価を払うんですか? 私は何を払えば?」

恥もプライドもかなぐり捨てて女は必死に魔女に縋る。だがゆうこはその前にと表情を変えずにいう。

「その前にアナタは『何を』望むのか教えてくれないかしら」

「……………あ、あの……………」

途端女は口を噤んだ。まるで言いたくない、知られなくないと言わんばかりに死んだ貝のように口を閉じた。不思議な女だ。自分の願いを言わなくてはかなえようがないではないか。それはそうだろう。後に分かることではあるが女が一番恐れるのは、写真の内容を知られてしまう事。己の過去が赤裸々に写し出された写真一枚におびえ恐怖していたのだ。

結局女は何を願うのかを言わずゆうこに「写真は預かるわ、その間に自分が何を願うのかよく考えることね」と言われ店を後にした。

わたしは縁側でコンビニアイスをのんびり食しながらたまにある場所を見つめた。

ゆうこお手製封印写真立てに収まっている一枚の女性の後ろ姿が映された写真。

うん、いるね。いるとはすなわちあの女の人の魂魄そのもの。と、いうことはあの女の人はずでに死んでいる可能性が高い。そうまで

もして彼女が伝えたい真実とは果たしていかなるものか？

「うーん冷たい♪」

「くーちゃんホラ掃除するから」

「ほーい」

君尋が叩きとほうき持って登場。わたしはごろごろと転がりながら移動する。

君尋から器用だねなんて言われた。

そうでしょうそうでしょう！と胸を張っても君尋はぱたぱたとお掃除に熱中。

むーん、つまらん。もつと構ってくれやと残念な気持ちであるが今はアイスで我慢してやろう。

「うわ!?写真の自身が動いた!?!」

うーん、君尋の驚く声が背後からする。が！実直真つ直ぐにわたしは真剣にアイスと向き合っているのだ。

写真の女性が振り向こうが封印が解けようが全然構わないのだアハハハハ。このアイスは非常にまろやかで甘さ控えめでおいしい。

しかし！何かこー、足りないような？

ハッ!?そういえばゆうこは風呂に入りながら酒を飲んでいるみたいだ。

のぼせて湯船の中に沈まなければいいが。

：ちよつと心配なので後で様子を見に行こう。緩く溶けだしたアイスを口の中に流し込んで「よっころしよ」と声に出して立ち上がった。

(案の定、半分ゆうこは沈みかけていた。おいおい)

※

真実から目を背き嘘で自分を着飾った女。

タスケテ助けてタスケテ助けてタスケテ助けてタスケテ助けてタスケテ助けてタスケテ助けて

タスケテ助けてワルクナイタスケテ助けてタスケテ助けてタスケテ助けてタスケテ助けてワタシは悪くないタスケテ助けてタスケテ助けて

タスケテ助けてタスケテ助けて

耳を塞ぎ瞼を閉じて背を縮こまらせて小さくなれば逃げられる。なんてこたあない。

世の中というのはちゃんと仕組みがある。因果応報。女はまたやってきた。

「あ、あの…」

「見ての通り封印を施しても写真の彼女は徐々に動き出すわ。そうまでして彼女は一体何を見せたいのかしらね？」

「!？」

女の顔が青くなり引きつった。写真の中で徐々に明らかになる真実。

微笑んでいた女性に近づくある女。女性は顔見知りの女に何の不信を抱くこともなく笑いかける。だがあつという間に女性は突き飛ばされた。ほんの一瞬の事。

女性は背中から綺麗に消えて行く。写真の枠から。女性を突き落した女は女性が落ちて行く場所を上から覗き込んで、にた、りと嗤った。

依頼人の女は写真に写る彼女を殺した。正しいことをすればそれは幸福となって自分に訪れる。悪いことをすればそれは必ず自分の身に降りかかってくる。

写真のなかで微笑みかける女性は見せたかったのだ。

私は。ココニイルよ。だから、わすれさせやしないわ。

嗚呼、過去がある彼女が羨ましいなんておもったり。

「いや、いやもう見たくない！」

女は何度も首を振って涙を流す。逃げたい自分の過去から逃げたいと叫ぶ。

「貴方の願い、かなえましょう」

だからゆうこは願いをかなえた。写真はゆうこの手からドロドロと融けて消えてなくなった。女は安堵する、心の底から。これで解放された。二度とみなくていいだと。

けれど女は気がついていない。自分が対価に払った代償は人を殺す事と同じ同等の対価であると。女の対価は『なにものにも己自身を

写さない事』。

「まったく世の中には色々な種類の人間がいるもんですな〜」

とわたしの頭の上で和んでいるモコナに話しかけたら

「そーいうくーも色々な種類の人間の中の一部だろ」

と言われてしまった。うん、まったくもってその通り！

(きょうはヒトの『罪の重さ』についてしりました)

## 21 『予兆』

ひまわりちゃんと仲良く登下校して帰って来た君尋君。今日も変わらない日常なんだろうなあなんて思っていたりするとそんな事ないよ？君尋くん。ドキドキはらはらハプニング満載がこのお店の特権さ！今日も張り切って体験しちゃおう！

大食い少女くーにしては珍しい並々ならぬ闘争心に燃えていた。

なぜなら、己の魂を削ってでも勝ち取らなければならぬ奴がいるからだ。

目の前を竹筒の中を流れる水流に静かな事、まるでこれから訪れるであろう激しい闘いなど無縁のようではないか。

そう、これから己の腕と俊敏さ、集中力そして運。全てを賭けて今、死闘が繰り広げられようとしていた。その闘いのゴングを告げるのは君尋くんのんきな声。

「流しますよ〜」

その声と共にあるブツが彼の手によって流される。

それはつるつるしててつるるとしてこれぞ夏だね！と一発で感じられるくらいのインパクトを与えられるソレの名は……。

ザ！そうめん☆

そしてこのイベントの名は流し、そうめん也！

くーはスタンバイOKな格好で並み居る強敵を目の間にして動揺を悟らせまいと声を張り上げた。

『流しそうめん』とは古来より伝わる夏の風物詩なり。昔のえらい人は言っていた……。『流して食う……これすなわち……熾烈な生き残り』也イイイイイイ！』

そういうないなや、くーは目にも留まらぬ速さで右手に持った箸を真下に振り下ろす。その様背後に獰猛な竜を宿しているかのような気迫。

ターゲット捕捉。奴が箸を振り下ろすよりもわたしの方が先なはず。

この勝負……わたしに勝利は確定だ！

「セイヤツ！」「ハツ！」

黒モコナとクーの凄まじい気迫の鏝迫り合い。

そうめん、奴はモコナの前を通過したようだ。悔しそうにする様が何とも心地よい。

優越感に浸るクーであった。

フツ、あのモコナがわたしに勝つなど100万年早いわ！

「はははは、わたしの勝ちのようだな、は!?ま、まさか!!」

「まだまだ甘いわね!フツ」

ここで傍観していた魔女の登場。華麗な箸捌きで流れ来るそうめんを見事仕留めた。

「主さまスゴイ」「主さまサイコー」

シユツシユツシユツ!

マルモロの声援を受けゆうこは次々とそうめんを箸で挟んでいく。

まるで箸の先まで一体化しているようではないか。そしてこれ見よがしに己が獲得したそうめんをおいしそうに口に運ぶ。

「ああ、お・い・し・い〜」

「ぬううううううう!?!」

これ以上奪われてなるものかとクーとモコナは奮起し

「行くぞモコナ!」「合点承知の助!」

息の合った掛け声と共にダブルコンビネーションを見せた。侑子は

は高笑いして余裕ありげな表情で迎え撃つ。

「オホホホホ、取れるものなら取って見せなさい!」

「アンタらはいちいち対決しなきゃ食べられないんすか!?!」

君尋のツツコミも華麗に決まった。うん、今日も変わらない日常でしたね!

(華麗なお店の日常)

◇◇◇

今日はひまわりちゃんと帰ることになった君尋君は彼女と並んで帰路につく。夏も本番という時期、話題にあがるのは学生にとっては嬉しい話である。

「もうすぐ夏休みだね」

「そうだね、と言っても俺はバイト三昧だと思うけど」

苦笑気味に言う君尋にひまわりちゃんはクスクスと女の子らしい笑い方で尋ねました。

「くーちゃんと一緒に嬉しいの間違いじゃないの?」

「ほえ!?いい、いやあああの決して!そういう意味ではなくて!」

「そんなに慌てなくてもくーちゃんならきつと嬉しいって飛び跳ねるはずだよ」

「そ、そうかな……」

どうやらちよつとずつ『自覚』というものが出来てきた様子の君尋。それは小さな小さなつぼみではあるけれど可愛らしい花を咲かせることは確実である。

そのまま順調に育っていけばいいだがそれはそうもいかないかもしれない。なんせ恋に障害はつきものである。いつもコンビを組んでいる百目鬼の姿がないので君尋は全然気にした素振りを見せないようしているが実は気になっている。そんな可愛い君尋の様子にひまわりは気づいていた。だからわざと笑顔で

「そういえば最近百目鬼君と一緒にいないね。いっつも仲良しだから寂しくない?」

と確信犯的な台詞を君尋にソフトに投げつけた。彼の反応はわかりやすいくらいに瞳をメキョ!?!とさせて驚愕した。

「はあ!?!俺と百目鬼のヤローが!?!いやいや違うから絶対仲良しこよしレベルとか違うよひまわりちゃん!」

と激しく手をぶんぶん振って否定。ひまわりは「そう?」と首を傾げて心の内では、あ、やっぱり仲良しだなんて思っていたり。

百目鬼なりに考えて動いているらしいが、君尋もある違和感を感じていた。

最近彼の右目に一瞬だけ何かが映ることがあるらしく、それは時たまフツと忘れた瞬間に起こる現象。いつも右目は真っ暗闇なはずなのに例えるなら、『自分』以外の誰かの見え方がそのまま垣間見えるような。しかし今はその症状も出ることないのであまり深くは考えていない。突如ここでひまわりからある依頼が発生。





わたしは逆にゆうこがいなくなる瞬間を狙っていたのだ。

なぜなら！ゆうこの部屋に密かに隠されている、もちもちつとして甘くいおやつを密かに狙っていたのだ。その名はちゃんテレビで調べた笹団子という名で笹でくるんだよもぎを使った餅の中にあるんこをいれ蒸して作られる和菓子らしい。紐で結ぶのだが作る地によつて結び方にも種類があるとか。ご当地土産で有名らしい。

その笹団子の山がゆうこのある戸棚に隠されていて以前にゆうこの部屋で遊んでいた時見つけた。その時はすぐにゆうこに部屋から閉め出され手を出せずにいたがいつか食いつか食つてやると心に決め虎視眈々と狙っていたのだ。

今はゆうこはいない。君尋も出かけていていない。

マルとモロもお昼寝中でいない。モコナも当然、いない。

つまり、このお店にいるのは

「わたしだけなのだー！」

今日はなんとラッキーな日であろうか！

たつたかとわたしは軽快なリズムで廊下を走り目的の場所にたどり着く。

誰もいないっていいなあ〜と鼻歌交じりに戸棚の目の前まで来た。

開いた先にわたしを待つであろう、笹団子のお宝が眠っているのだ。

涎でまくりなわたしは、高鳴る鼓動を胸にそろり、と戸棚の扉に手をかけた。ついに解禁！

「あれ？お皿だけ、しかない？」

いやよく見たら折りたたまれた紙が一枚皿の上に乗せられている。

わたしは思わず紙に手を伸ばしそれを広げた。そこには『もうなっしー』と一言書かれていた。この筆跡、ゆうこに間違いない。

わたしは愕然とした。

もうなっしーって何？もうないわよって事だけでいいじゃん。全部自分が食べたってことだけでいいじゃん。なんだこの嫌がらせ、わたしが狙ってる事を知つてて全部たいらげて、ご丁寧皿とこの紙き



「えれなさんお願いしますみなかったことにしてください」

『大丈夫よ、大の大人が一人でゴロゴロやってたら変だろうけどくーちゃんならOKだし可愛かったから平気よ!』

「やっぱ見てたんじゃん!」

うう、羞恥心というのはこういう事なのか……。身をもって体験する事になるうとは……。全部ゆうこの所為にした、今日この頃。腹は、今だ鳴っていた。

【ゆうこは太ればいいとおもうなっしー】

◇◇◇

えれなさんはどうしてわたしの友達になりたいと言ったのだろう。だってわたしは彼女がどんな人なのかまったく知らない。

彼女がなにを思って幽霊となってこの世にとどまっているのかをわたしは知らない。

えれなさんに恥ずかしい一面をみられてしまった後、わたしとえれなさんは縁側へ移動した。えれなさんが丁度いい機会だから私の話聞いてくれる?と言ってきたからだ。

わたしもえれなさんがどうしてこのお店に来ることになったのが気になったので承諾。

冷蔵庫に残っていた肉まん3個と温かい麦湯が入った湯呑を脇に置いて、縁側に腰を落ち着けた。えれなさんは『ゆうこには内緒よ』と言いながら秘密のポーズをした。

わたしはさっそく肉まんをハグハグ食べてたので頷くだけにとどめた。

内緒じゃないといかんのか?ハツ?!もしやゆうこにばれたらおやつ抜きの刑にでもされてしまうのだろうか?なんて恐ろしや……。これは心して聞かねばいかん。

『あのね、私本当はこの世界の人間じゃないの。ある願いを叶えてほしくてくーちゃんの前に現れたわ。——私にはね、深く愛している人がいるの。その人は私の為にボンゴレを強くしてくれようと自らの肉体を捨て去ってまで行動してくれているわ。たぶん今もずっと。もういいのに、そんな事私望んでないのにあの人ったら真面目だから

やめるって事をしないの。そんな人だから愛した。けどある日、彼が、雪彦が現れて教えてくれた。私の愛する人はいつかジョットの子孫にあたるボンゴレ十代目に倒される定めにあるって。私の為に奮闘してくれている彼が倒されるなんて……悲しかった、苦しかった。

……本来ある筋書きはそうなのでしょう。でも緋奈が降りてきた時点はこの筋書きはまったく意味を為さないわ。だから私は願った。彼を救えるのならなんでもすると』

ボンゴレ？あさり強くしてどうするの、あせりを武器にして戦うの？

って聞いたらえれなさんはクスクス笑って『違うわ、食べるあさりじゃなくてマフィアの名前。ボンゴレって言うのよ』って教えてくれた。

緋奈って友達の名前？と尋ねれば『ええ、とても大切な友達。逢えるものならもう一度逢いたいけど、たぶん無理ね。その時には、私はいないはずだから』と寂しそう顔をして言う。

いないってどういうことだろ？どうして、そんな悲しそうに笑うの？

わたしはえれなさん理由を聞こうとした。

けどあれ？グラリ、と視界がずれた。なんだ、これ。ダルい、体が？急に眠気が襲ってきた。それも強烈な、眠り薬でも効いてきたような勢いに床に手をついた。

『くーちゃん』

躰の重心を保っていられず、ついには寝ころんでしまう。

えれなさんの名を呼ぼうとした。けど、駄目だ。逆らえない睡魔はわたしを完全なる夢の世界へと強制的に連れて行ってしまう。

『……やっぱり、こうなるのね。いいのよ、眠って。私は聞いてもらえただけ満足だわ。たとえ、貴方が今話を覚えていなくても、私は覚えてるから』

まるでわたしが眠ってしまう事を事前に知っていたかのような口ぶりじゃないか。

えれなさん、そんな顔しないで。やだよ、知りたいのに。だってえ

れなさん今ひとりぼっちじゃない。大好きな人と別れてこんな所でひとりぼっちじゃないか。なのに、満足してるって顔しないでよ。え、れなさん……。

『おやすみなさい、クーちゃん』

すうすう、と小さな寝息を立ててクーは完全に眠りの世界へ旅立ってしまった。

エレナはどこからかふわりとタオルケットを出しそれをクーにかけてやる。

こうして侑子がいない場でも、クーにかけられた『願い』は敏感に感じ取り彼女に不必要なものは除外する。その作用がこれだ。今のクーに余計な情報が与えないよう、全てを忘れさせる。全てを、なかったこととする為に。

クーが次に目覚めた時、今の会話をしたことすら覚えていないだろう。今の彼女には知らないものだから。

『……本来の世界があるのなら別の可能性を秘めた世界だって存在しているはずだわ。彼を救おう、そう決意して私は雪彦と『契約』をしたの。死んだ身で何が出来るかって思ったけど雪彦は色々と援助してくれたし幽霊な私でも可能な限りで色々出来るよう『力』をくれたし。貴方に逢うために。寂しくなんかないのよ。貴方が私の希望だから』

そう言ってエレナは触れられない手で眠るクーの髪をそつと撫でるように手を動かした。

クーちゃん、貴方は私の最後の希望。貴方がいて私がいれる。

優しい子、素直で無邪気に振る舞って、本当は不安でいっぱいなんでしょう。

自分がわからないのに、周りの人々は貴方が何者なのかを知っている。

どうしようもない、不安に夜枕片手に涙したことだって知ってるわ。

ずっと貴方を見てきたから。見守ってきた。

大丈夫よ、クーちゃん。貴方はちゃんと自分を取り戻せる日が来

る。

それは貴方が手放してしまった大切な人を取り戻す日でもあるから。安心して、今は眠って。そしてどうか、彼を救って。貴方が救うつもりがなくても私には救いになる。彼にも、救いに繋がるの。そしていつの日にか、再び彼に再会できたなら。

【貴方は、デイモンを救ってくれる子】

## 22 『あそぼ』

座敷童が女郎蜘蛛の所へ君尋の右目を取り戻しに乗り込んだ。そう鴉天狗たちに聞かされた君尋は彼らと共に侑子の元へ行った。鴉天狗たちは座敷童を助けて欲しいと侑子に願った。対価として鴉天狗達の秘宝である【天狗の扇】を差し出した。

侑子是对価が大きすぎると、ぶらすに君尋と一緒にくつつけ座敷童の元へ向かわせることに。慌ただしさの中にも、くーは無表情だった。

君尋が出ていく時には彼にだけ向けて、場違いにも微笑んだ。

「君尋、わたしは君尋が大切だから。だから自分を大切にしてくね」

「くー、ちゃん？」

訝しむ君尋ではあったが鴉天狗たちにさつきと行くぞと催促され、侑子が持つ【天狗の扇】を扇がれた事でくーと別れも言えないまま一瞬にして風と共に景色が一変し座敷童の元へ行くことに。

「……………くー、アンタはどうするの」

君尋が座敷童の為に鴉天狗たちと共に行ってしまった後、黙って見ているだけだったくーが侑子からの問いかけにより口を開いた。それは淡々と、己の意思を伝えた。

「ゆーこ、わたし行く」

一体、何処へ行くというのか。

洋傘の下で椅子に座りながら寛ぐ侑子はくーに視線をやり、低い声で問うた。

「許さないって言ったら？」

静かな圧力さえ感じられる雰囲気の中、くーはキツパリと言った。

「行く」

侑子は最初から見通して言っていただけに過ぎない。くーの意思は初めから決まっていたのだから。だから、侑子は促した。くーに手招きをし、呼ばれたくーは不思議そうな顔をして近づいたところに腕を伸ばした。柔らかな髪をぽんぽんと撫でながら、

「そう、行きなさい。くーがそう強く望むのなら」



それが、『必然』なのだから。

「うん！」

くーは満面の笑みで頷き返す。理解してもらえて嬉しいと表現するかのよう。

でも侑子は釘をさすことは忘れずに。

「遊び」過ぎないように、ね」

「大丈夫、加減するよ。わたしだって学んできたんだよ」

「ええ、わかっているわ。…いってらっしゃい」

「行つてきます」

くーは侑子の見送りを受けて向かった。

彼の地へ彼女に逢いに。

◇◇◇

君尋の目は飲み込まれた。今頃は管狐と共に侑子のお風呂にでも浸かっているだろう。

彼にはゆつくりとする必要があるのだ。重大な選択を選ぶための、時間を。

わたしは、やらなきゃいけないことがある。だから、来た。彼女の元へと。

「女郎蜘蛛」

「これはこれは……貴方様みたいな高貴な御方がこのような場所にまで来られるとは」

禍々しい邪気に身を染める女。蜘蛛の糸に自身の躰を絡め蜘蛛の巣を作りだしている。

アレに絡まれたら剥がすには手間だろう。

それにしてもなんて白々しい言い方。全然そんなこと微塵も思っていないくせに。

どうせ、わたしも美味そうな餌に見えるのだろう。

だいたい高貴だからって？そんなものどうだっていい。

わたしは自分の事を身分が高い人だとか一度として考えたことはない。

周りが勝手にそう敬ってくるのだ。この女もそうだ。身分で態度

を改めるのか？

ならば君尋に対してはどんな風に接したのだろうか。

気になる、気にはなるが今はどうでもいい。必要なのは気にするこ  
とじゃない。やらなければならぬ。

「貴方を消しても君尋は喜んでくれない」

「それで？じゃあ貴方様は何をしよう？」

「右目の事に関しては何もしない。君尋が選んだ選択肢だから。彼自  
身が選び取った道だから」

「でも、君尋は無駄に血を流した。貴方が挑発するから。わたしはそ  
れが許せない。彼を傷つけたんだもん。彼が流した血の分だけ苦し  
んだ分だけは責任をとってもらおう。同じ事でしょう？貴方の眷属で  
ある蜘蛛の巣を壊した責任を君尋は友人の為に右目を失うという対  
価を背負った。その右目は貴方のおなかの中に収められ二度と君尋  
の元に戻らない。けれどわたしは納得していない。君尋が座敷童の  
為に危険をおかしてまでわざわざこの場所まで来たという事実。そ  
もそもこの事実を大っぴらにしなければ座敷童がわざわざ貴方の所  
まで来ることなかったし君尋が来る必要もなかった。ゆうこがこ  
の場にいるのならこう言うね。『必然だから』と。つまり貴方が君尋  
の右目を得ることは『必然』である。同時にわたしがこの場に赴いた  
事も『必然』貴方が責任を取るのも『必然』何も不思議な事ないよね  
？」

有無を言わせない圧力をかける。

そう、君尋が右目を失うのならそれ相応の代償を貰わなくては話  
にならないじゃないか

「その右目を飲み込んだ妖力、見せてよ」

足掻いてみせてよ。奪った分だけ強くなったら、その分叩き潰して  
やるまでだ。

ああ、なんて楽しいんだろう。君尋の右目を飲んだ奴を自分の手で  
いたぶれるなんて。

わたしが大切にしている君尋の右目、あんな蜘蛛風情にいつてしまうな  
んて悲しい。

悲しい、がそれよりもわたしの気持ちが昂るのだ。  
ゾクゾクする、もつともつと。血がたぎって仕方ない。

感情が高ぶって制御できない。そうだ、する必要がない。

どうにかしてこの気持ちを受け止めて欲しい。ありったけの想いで彼女を満たしてあげたい。この、狂いそうな何かから。

わたしは元来、執着心が人一倍強いのだろう。君尋が大切だから、君尋に害なしたモノが許せない。君尋でなかったら、ここまで来ることもなかった。だから、違う意味で感謝してる。遊ぶ場所を提供してくれて遊び相手になってくれてほんと、感謝してるよ。

「女郎蜘蛛、ねえ」

今は貴方で我慢してあげる、だから

「あそぼ」

わたしの誘いに女郎蜘蛛は綺麗に顔を引きつらせた。

(高ぶる気持ちは、トマラナイ)

◇◇◇

くーは帰って来た。大層ご満悦と言った表情で、侑子は庭先で出迎えた。

「お帰り、くー。楽しかった？」

「うん！あのねあのね」

くーは侑子の側に駆け寄り楽しかった出来事を包み隠さず話した。

「あの女郎蜘蛛と遊んだの。最初は嫌々って首振ってたけど本人も乗り気になってき。それはそれは夢中で遊んだんだ」

侑子は言葉少なく返した。

「そう」

「しかもお人形さん遊びして遊んだんだよ？土台が綺麗だから遊びがいあるよね」

侑子は言葉少なく返した。

「そう」

くーはどんなに楽しかったかと頬を上気させて無邪気に伝えた。

「可愛い可愛いお人形さんにピツタリな赤いドレスを着せてあげて、

真っ白な肌にたっぷり色鮮やかなお化粧してあげて、髪型も前とは全然違うものに変えてあげた。彼女ね、泣きながら叫びながら喜んでくれた。よっぽど嬉しかったんだね。ホラ！しかもわたしが髪切つてあげたんだよ。持つて帰つて来ちやつた。綺麗な髪だね、つるつるしててサラサラで君尋の右目はよっぽど栄養価が高いんだね。お肌もつるつるしてて。たまに暴れちやうから彼女の糸で縛らなきゃいけなかったけど蜘蛛の糸つて意外と頑丈なんだね。全然切れなかったから良かった。だつてせっかく綺麗にしてあげてるんだもん。邪魔されちやつまらないし」

くーは右手に掴んだ髪の毛の束を持ち上げて侑子に見せた。侑子は目を細めそれを見据えたのち、

「渡しなさい、燃やしてあげるから」

と手を差し出した。くーは

「そうだね、持つててもしょうがないもんね。使い道ないし。はい！」

そう言つて髪の毛の束を侑子に手渡した。

侑子はそれを無言で受け取り、ボオオ！と燃やした。

※

くーは帰つて来た。大層ご満悦と言つた表情で、侑子は庭先で出迎えた。

「お帰り、くー。楽しかった？」

「うん！あのねあのね」

くーは侑子の側に駆け寄り楽しかった出来事を包み隠さず話した。「あの女郎蜘蛛と遊んだの。最初は嫌々つて首振つてたけど本人も乗り気になつてさ。それはそれは夢中で遊んだんだ」

侑子は言葉少なく返した。

「そう」

「しかもお人形さん遊びして遊んだんだよ？土台が綺麗だから遊びがいあるよね」

侑子は言葉少なく返した。

「そう」

くーはどんなに楽しかったかと頬を上気させて無邪気に伝えた。

「可愛い可愛いお人形さんにピツタリな赤いドレスを着せてあげて、真っ白な肌にたっぷり色鮮やかなお化粧してあげて、髪型も前とは全然違うものに変えてあげた。彼女ね、泣きながら叫びながら喜んでくれた。よっぽど嬉しかったんだね。ホー！しかもわたしが髪切つてあげたんだよ。持って帰つて来ちゃった。綺麗な髪だね、つるつるしててサラサラで君尋の右目はよっぽど栄養価が高いんだね。お肌もつるつるしてて。たまに暴れちゃうから彼女の糸で縛らなきゃいけなかったけど蜘蛛の糸って意外と頑丈なんだね。全然切れなかったから良かった。だつてせっかく綺麗にしてあげてるんだもん。邪魔されちゃつまらないし」

くーは右手に掴んだ髪の毛の束を持ち上げて侑子に見せた。侑子は目を細めそれを見据えたのち、

「渡しなさい、燃やしてあげるから」

と手を差し出した。くーは

「そうだね、持つててもしょうがないもんね。使い道ないし。はい！」  
そう言つて髪の毛の束を侑子に手渡した。

侑子はそれを無言で受け取り、ボオオ！と燃やした。

髪は見る見るうちに黒い煙を出して一気に燃え上がり、塵となつて消えた。

くーはその様を見届けると、うーん！と両腕を伸ばしながら、

「楽しかったー！女郎蜘蛛もきつと喜んでるよ。だつてあんなに盛り上がったんだもん。当分は余韻に浸つてるかもね」

「良かったわね」

「うん。そうだ！君尋は？君尋はどうしてる!？」

「今部屋で眠つてるわ」

「そっか。良かった。……………良かった……………」

「くーも疲れたでしょう。お風呂入つて来なさい。沸かしてあるから」

「うん。そうする……………」

ふわあゝとあくびをしながら眠たそうに目元をこすりつつ、頷いてくーは部屋に向った。侑子は、くーの後姿を見送りながら小さく、呟いた。

「【力】が強まっているのね」

くーの内に秘めたる力は本人が理解するよりも強力で制御が難しい。

ましてや、自分の半身に気がついていない今のくーではあまりに【力】に頼り過ぎると逆に【力】に飲み込まれる可能性も高い。

だがそれでも侑子は止めなかつただろう。これが【筋書き】の上で必要【な事】だから。そうなるよう、決められていたのだから。

「時は、近づく。学びなさい、くー。貴方にとって必要な事を。光は、貴方達の幸せを願っているわ」

彼女こそがこの【筋書き】を願ったのだから。

【抗う事ができない必然】

## 23 『わたし』

だれもしらないものがたり。

このよのなかにはどれだけのものがたりがねむっているのだろう。ゆがめられたはなしによってうもれたしんじつはどれだけあふれかえっているのだろう。

かずあるなかかくれたなかに、わたしもはいつている。

だれにもしられなくていい。りかいされなくたっていい。

そんなものもとめてもないしされたいとおもわない。

わたしとあのひとだけがしっていてりかいしあっておなじくうかんでとなりではなれることなくずっといっしょにいられるならそれでいい。

だれにもしられなくてもひっそりとねむれていられるなら

わたしはうれしい。

やつとひとりじめできるもの。

ほんとうのいみでこのひとをどくせんでできるもの。

そう、このひとはわたしのもの。

このひとがいつくしみをあたえるそんざいはわたしだけ。

このひとをどくせんしつづけるのはわたしだけ。

わたしとこのひとをつつむくうかんにみらいもかこもげんざいもない。

ゆめやきぼうや

かなしみやくるしみもそんざいしない。

うとましいそんざいも

わずわらしいやつらもない。

らくになれるね。

せおうものもなにもない。

きをくぼるひつようもない。

あるのはただこんこんとしたふかいあおとしずかなあわのせかいだ。

そしてこのひととわたしだけ。

ねむろう。こんどこそ。いっしよに。

わたしたちをしばりつけるものはなにもない。

ずっとてをつないでねむっていられるもの。

くさりは、ときはなたれたから。

わたしたちをしばるくさりはとかれたの。

うつせみのわたしたちはかのじよたちにまかせよう？

ぜんぶまかせてらくになろう。

ずっと、いっしよだよ。おねーちゃん。

【Blanche—Neige「ブロンシユネージュ」のどくはく】

◇◇◇

四月一日side

俺は右目を失い、座敷童を助けた後管狐と共に逃げたはいいが女郎蜘蛛の邪気に当てられたことよって気絶していたらしい。鴉天狗が住まう山へと戻った先の湖で俺は清らかな水によつて邪気を洗い流され座敷童の膝で眠っていた。何度も何度も涙を流しては謝り続けていた座敷童。泣き腫らした頬が見えていて痛々しいものだった。

「何もできなくて、……ごめんなき、い…っ…」

泣きながら謝る座敷童に俺は力なく笑いかけた。

「君の所為じゃない。俺が『選び取った』んだ」

そうだ、俺は自分で選んだ。右目を捨てると、そう、決めたんだ。だから君が泣く必要はない。

そう、言い返し次に俺が目を覚ました時は侑子さん家のお風呂の中。

じんわりと冷えた体が温まって心地よい。

「お帰りなきい」

「ゆう、ごさん……」

ぽつかりと穴が開いた気分では俺はぼんやりと戸口に立つ侑子さんの名を言った。

いつのまにいたのか普段らしからぬ優しい顔で彼女は

「薬箱用意してあるわ。ゆっくり温まって」

と言つて戸をカラカラ、と閉めた。俺は小さな声で



「……はい……」

と頷き着の身着のまま、しばらく湯船に浸かった。脱ぐ気力さえなく、今はただ沈んでいたい、そう思う事しかできなかった。

この右目は何も映さない。この右目は二度と光を宿さない。

本当に、失ったんだな。

この空虚感は一生涯、埋められることはないんだろうな。しみじみ、感じた。

【右目は完全消滅】

◇◇◇

今回のことで一つわかったことがある。それは今まで知らなかったもので、俺はずっと得られないものだと思ってた。両親と別れてからずっと一人きりだった俺にとつて、触れるといずれとけて消えてしまふ雪のようだと。でも俺にもあるんだと心底嬉しかった。

こんな俺だったけど、得難い存在に出会えたことは貴重だ。

奴と会った時に俺はまた素直になれなくてとがった言い方しかできないかもしれない。

素直に表現できない不器用な俺には精一杯なことだ。でも、それでいいのかな。変に飾らなくていいのかもな。そんな『在り方』だっただっていいかもしれないって考えられるようになったから。アイツの家の前で待ち伏せして弁当ぶら下げて強がった口調したけどなんて言われるのが気になってそしたらアイツは

「半分こだな」

って言つて俺が持つ弁当取つてスタスタ先に歩いて行つた時には自然に

「誰がお前と半分こするか!」

て叫んで慌てて後を追いかけた。

走つてる最中、自分の顔にうつすら笑みが浮かんでアイツから「何一人でニヤニヤしてんだ」って指摘された時内心びっくりしたけど。嫌じゃない。

誰かと共有することつて、こんな感じなんだな。

【ハジメテノオト】

◇◇◇

俺は百目鬼から右目を受け取り、両目でものが見えるようになった。けど百目鬼の視力は俺よりも高く、時々、頭とかぶつけることがある。両目の視力のバランスがおかしくて感覚がずれて見えるからだ。クーちゃんは俺に何も聞かなかった。

たぶん、全て知っていたのだろう。でも俺はあえて伝えた。言葉にして伝えることが必要だと感じたのだ。俺が作ったおやつ用のおから入りホットケーキの山を次から次へとをおいしそうにもぐもぐと平らげていくクーちゃんに俺は意を決して打ち明けた。

「あの、クーちゃん……？」

「んぐ、……何？」

真っ直ぐ見つめられて俺はドキツとした。見透かされてる。

「俺……ね、百目鬼からもらったんだ」

「うん」

クーちゃんはカタン、と手に持っていたフォークをテーブルに置いた。

「俺、後悔してないんだ」

「うん」

クーちゃんは、俺の隣に移動して俺の手を取った。

「クーちゃんは、何も言わないんだね」

「言わないよ」

クーちゃんの手の温かさに、涙が出そうになった。

いつも何も言わずに寄り添ってくれる。彼女はいつもそうだ。時に心配され時に励まされていつも一緒にいてくれる。彼女だって、苦しんでるはずだ。自分が誰だかわからないのに、いつも笑みを絶やさない。無邪気を振る舞って、子供のように屈託なく心の底から楽しそうに笑っている。

つよいね、クーちゃん。キミは強い子だ。

俺が思っているよりも、ずっと。だから俺は、君が　なんだろう。

今、やっと【自覚】できた。この、想いに。

「……………」



## 24 【雪月花】

昨日は騒がしい一日。家の冷蔵庫が壊れたと意気揚々と侑子が眠そうなくーと君尋を引っ張って、雨の中電気屋さんへレッツゴーしたその日、なんと店先で見た目可愛いぬいぐるみなのに、声は威厳あふれる老人というギャップ的な『雷獣』と出会うという幸運に恵まれた一日を過ごした。その雷獣は君尋の無礼な態度に電気びりびりの刑を与えたり、くーにはちよつとしたアドバイスをしてみたり。

さすが！電気屋さんで挟まってただけはある雷獣である。

まー、でも最後に君尋が入れてくれたお茶がおいしかったのでそのお礼として、雨降る庭先にふわりと自身の躰を浮かばせ、電気をびりびりと放出させ雨降る中の見事な花火を見せてくれた。

毎日が、出会いと別れの繰り返しの日々。くーはどんどんと学んでいくのだろう。

自分が学ぶ本当の理由を得ないまま季節は過ぎ去っていく。

◇◇◇

さあ、今日は雪合戦！君尋は積極的に動いた。

いつもはただ情けなくも羨ましげに見ているだけしかできなかつたが、今は違うぞ！四月一日君尋。そう生まれ変わった気持ちで、アタック！

「くーちゃん、寒かったら俺に、つて…」

期待が大きい分、現実という壁にぶつかった時、人は果たして立ち直れるのか…。

まさにその厳しい現実が起きたのだ。くーに差し出した手は、スルリ、とスルーされくーが向かった先は四月一日の先に佇む寡黙の青年。

「百目鬼さああんんん——！」

ぼすっ。大きな体に自ら体当たりして抱き着いたくー。百目鬼は自然な動作で

「くー、寒くないか」

となでなでする。するとくーの顔は緩み切ったパンダのようだ。

「はによーん。大丈夫！百目鬼さんにくっ付いてれば温かくなるから」

そう言つてくーは尚更百目鬼に引つ付いた。

百目鬼は無表情でさらに撫でてあげるといふ対応にした。君尋は尚更、叫んだ。

「くーちゃああああああああんンンンン———!?!」

「ぷくくく。四月一日凍り付いちやったわ」

「カチンコチン——」

侑子は心底可笑しそうに、モコナは君尋の躰をツンツンして固まつてるくとのんきに感激。

「フツフツフ、負けてたまるか四月一日君尋！お前は生まれ変わったんだろ!?!」

「うわー、自分に向つて喋つてる」

「ついにキタわね」

「勝負だ百目鬼!!この勝負に勝つて俺はくーちゃんに」

引つ付いてもらうんだ！そう喉元から出かかった声は、くーの「わたしに？」

と不思議そうに問いかけられ言葉として出る前にしぼんでしまった。

「……くーちゃんにつきたてのお餅を食べさせてあげるんだ！」

言つてしまった四月一日君尋……。まったく違う事を言つてしまった。

後悔の念に渦巻く彼であつたが、そうでもなかった。

「うわー!?!本当？つきたてのお餅食べれるー!よしっ！」

結果オーライ。くーは満面の笑みで喜んだ。

（くうううう、可愛い———やったな俺！）

「つてなわけで百目鬼勝負しろっ！」

「断る」

「なんとなっ!?!」

男らしくキツパリ断られて君尋は反射的に叫んでみたり。

この後、なんだかんだ君尋と百目鬼の勝負は行われた。

題して『雪あそびで青春しちやいまショー』（侑子命名）

少年二人による降り積もった白銀の世界でアート制作。

勝敗を決したほうにはご褒美として腹空かせたくーのために餅つきをするというビックイイベントが待っている。

君尋は猛烈に燃えた。燃えまくった。いつもよりも倍に燃えた。そして、結果、

「百目鬼くんの勝ち〜」

「わー!!さすが百目鬼さんチョーかつちよEー!」

「やるなー百目鬼かつちよEー!」

「ぬあああああああああ!」

侑子の宣言でくーとモコナは腕組んで余裕綽々な百目鬼に尊敬のまなざしで抱きついたり君尋はズドン!と暗い影を背負って雪の上のの時書いてたり。

百目鬼と君尋が作った作品たちが動いて雪合戦したり。

今日も今日とて、不思議な事あったり〜。

【君に捧げる勝利の雪の冠】

◇◇◇

ああ、今日は何が起こるんだろう……。そんな期待に胸ふくらませていた日、

わたしが知らない青年がゆうこを訪ねてやってきた。

パイナップルみたいな髪型をした背の高い青年で身の丈ほどの槍を携えて。

このお店にいると毎日、とはいかないがゆうこを訪ねてくる人物は後を絶たない。

勿論、このお店に入るには強い願いがなければならぬらしいが……。

ん？今まで深く考えた事なかったが、お店にいるわたしも強い願いがあるということか？

そもそも、わたしはどうしてゆうこの元にいるのだろうか。

理由が、わからなくなってきた。最初にわたしを拾ったのはゆうこだ。

ではなぜゆうこはわたしを拾った？ただの気まぐれ？それとも寂しいから？

違う。そうじゃない。ゆうこはそんな理由なんかでわたしを拾う事はない。

では、なぜ？わたしは、なぜここにいるのだろうか？なぜ、ここにいないてはいけないのだろうか。

誰もかれもがわたしに『学ベ』という。学ベとはそもそもどんな意味だ。

何を学ベというのか。それすら教えないで学ベというのは卑怯だ。生きる上での知識なら知ってる。必要なのは、生きる理由。わたしが存在する、意味だ。

わたしが延々と答えの出ぬ考え事に没頭している間にも、彼とゆうこのやり取りは進む。

「貴方が次元の魔女ですね」

「ええ、人はそう呼ぶわ」

ゆうこは小狼君たちを出迎えたあの日の衣装と同じ物を着て出迎えた。

なんと気合の入り振りだ。ゆうこにとって出迎えに値する人物とということか。

君尋は学校に行っていない。お店にいるのはゆうこにわたしとモコナとマルとモロ。

彼は息を切らし肩を揺らす。独りでここまで渡ったのだろうか。

相当な力を使ったはずだ、なんて所詮わたしには他人事。彼のお願いにもなんの興味も抱かない。

「貴方が次元の魔女ならば可能なはず、どうか彼女を生贄の台から救ってください！」

彼には縋れる人がゆうこだけなのだろう。必死なその叫びは心の底からの響きだ。ゆうこはゆっくりと青年を見据えて伝えた。

「相応の対価がいる…。それを承知なのでしようね？」

パイナポーへアーの青年は迷わずハッキリと告げた。

「無論です、元より自分の事はどうなろうと構いません」

自分の命さえ惜しくはない、最初から彼女に救われた命だ。その為に使うのならば、本望だとも堂々と言いつつ。なんて熱い人だろう。

自分の命を賭けてもいい大切な人が彼にはいるのだ。なんて、羨ましい。

「……そう、ならばアナタが払う『対価』は」  
ゆうこは告げる。

淡々と、感情を含まない冷たい視線で彼に宣告する。

「彼女に一生『愛される』という権利をもらいましょう」

「あいさ、れる……？」

「ええ。六道骸、貴方は彼女から一生愛されることはない。交わす言葉に愛があつたとしても、そこに貴方に対する『愛』はないわ。中身の無い言葉に貴方はずっと囚われ続けることになる」

六道骸、そう呼ばれた彼は意味を理解するまで数秒かかったようだ。

ゆつくり、噛みしめるようにゆうこの言葉を受け取り、頷いた。

「わかりました……」

これで彼の願いは叶うのだろう。相応の対価と引き換えに。

「良かったね、お願い叶えてもらえて」

彼は元いた世界へ帰るのだろう。彼の周りを光が包み込もうとしたときわたしはそう声を掛けた。どうせ、二度と会わない存在だ。声くらいかけても構わないだろう。彼はわたしの存在に初めて気がついたかのように、驚いた顔をし息を呑んだ。

「君、は…!?!」

「なんだ、貴方もわたしを知ってる人？むう、まったく不公平だよ。わたしは知らないのにわたしの事を知ってるのって」

そんなびつくりした顔しないでほしい。別に幽霊じゃないんだから。

こんなんでも一応生きているのだ。

「…そう、でしたね。君がここにいるということは……彼女は……すでに……」



「何一人で納得してんの？」

彼女って誰ですか？さつきよりも暗い顔になった六道さん。

「いや、スミマセン。まさか久しぶりに君に会うとは思わなかったもので…」

「やっぱり知り合いだ」

「まあ、そんな所です。それにしても元気なようで安心しました。今の君のお名前はなんというのですか？」

「……くー、ですけど…」

「そうですか。くーさん……良い名ですね」

「ありがと」

御礼はちゃんと言います。だって褒めてくれたしね。たとえ見ず知らずの人に褒められたとしても嫌な気分にはならない。一応、気に入っている自分の名だ。

「今でも『私が知っている彼女』は君を想っていますよ。遠く離れた場所においても、ね」

「わたし、を？」

なぜ。見ず知らずの赤の他人がわたしを想う必要がある。

でも、なぜか彼の言葉が胸に響く。

ざわめいて仕方がない。

「たとえ、二度と会えない定めだとしても」

「君は君の『絆』を信じてください。きっと道は開かれますから」

彼は意味不明なことばかり一方的に言っただけで光と共に消えた。

「……ゆうごく、どーいう事？」

「さあね。自分で考えてみなさい」

「ケチ！」

「ケチで結構。さあ〜♪お仕事も終わりだし一杯やろうかしら！」

「またか！六道さん来る前に飲んでた癖に」

「おほほほほ！所詮おこちやまなアンタにはわからないでしょうね？」

「どうせおこちやまですよーだ！」

『あの時の彼』とはその後二度と会う事はなかった。

## 25 【壊れたマリオネット】

くーside

どこまでが【夢】でどこまでが【現実】なのか。

境界線はどこで区切られているのか。ただハッキリしているのは、これが【悪夢】なのだということ。

わたしは部屋で寝ていたはずだ。そう、今日は面白いことがあった。だから興奮してなかなか寝付けなかったはずだ。昼間、わたしは一人で部屋でゴロゴロと

「退屈退屈退屈のすけ〜」

と退屈しのぎにゴロゴロしていたら突如ガラツとゆうこが襖を開いて現れ何を言うかと思えば、

「行くわよ〜く〜。何処に行くかって？それはヒ・ミ・ツ・よ」

と、尋ねてもいないのに律儀に答え、尚且どこかウキウキなゆうこにあつという間にお着替えさせられて強制的にお出かけ。いつも一緒にいるはずの黒モコナは侑子のお使いで出かけていていなかった。

侑子はヒミツなどと言ってはいたが、ヒミツにする意味すらない道路の真ん中で寝ていた君尋の背中に乗ることだった。ゆうこは遠慮なしに君尋の背に腰を落とすからわたしは指先で君尋の頭部をツンツンしてみた。

「はっ?!お、俺は一体何を……ってか重っ?!」

「君尋起きたー」

「重いとは失礼ね」

どうやら話を聞くと君尋曰く、アヤカシに襲われかけた所を百目鬼さんのおじいさんがアヤカシに矢を射って、助けてくれたらしい。でもそれは夢のようで夢じゃない。現実に君尋の手にはおじいさんが放った矢が存在する。

ゆうこの説明によると、それは【正夢】というもので実際に君尋は危なかったらしい。

わたしは百目鬼さんのおじいさんに感謝した。だって君尋が怪我

したら悲しいし、そのモノノケを無理やりにも見つけ出して潰しにかからなきゃいけないもの。

そんなの面倒だし、何より君尋が無事なのが嬉しい。

この後、異世で大阪弁でしゃべる夢カイのバクさんとの面白い出会いとかあったり、ゆうこがバクさんとのやりとりのなかでいい感じに追い込んでる場面とか見れたので楽しかった。バクさんは君尋のことをいたく感心した風に言っていたけど、途端わたしの顔を見た途端、ぎよっ?!と円らかな瞳を大きくさせて手をわたさせた。

「あ、あんさん……大丈夫でつか!?そ、そないな怖ろしゆうモン抱えて……」

「へ?」

いきなりなんですか。人の顔見て怖ろしいて。

見た目の可愛さに半して失礼だと思った。

「わ、わてこないなモン見たこともないわ……」

怖ろしいわ怖ろしいわとガタガタ震えるバクさん。

わたしと君尋は突然どうしたのかと首をひねるばかり。そんな中、ゆうこがわたしの頭にぽんっ!と手を置いてバクさんにしっかりとした声音で言った。

「大丈夫よ、この子の事なら」

「ゆうこ?」

ゆうこまで一体なんだ?

「……そうでつか?……まあ、侑子はんがそう言いはるなら。……小さな竜のお嬢さん、氣い、しっかりとつんやで!」

バクさんに手をとられてブンブン振ってはファイトや!なんて励ましを受けて、「はあくどうも」とお礼を言いつつ内心は、はてな状態なわたしでした。

バクさんから対価としてもらったたくさんのふよふよと浮かぶ風船の紐をしっかりと握った君尋と手を繋ぎつつお店へと戻った。今日は君尋もお店に泊まった。

だから嬉しくて子供のようにはしゃいで、一緒に寝ようと君尋の元へ枕持って向かおうとしたけど、廊下で待ち伏せしてたゆうこに邪魔

されて結局別々に寝ることに。

むうくと唇を尖らせて文句アリアリと無言に訴えるも「ダメはものはダメ」と却下された。

肩をがっくりと落としてトボトボと部屋に戻ろうとした。すると、ふわりと背後から突然抱きしめられた。

「ゆうこ?」

「くー、頑張りなさい」

ゆうこの顔は見えない。後ろから抱きしめられているから。

少しゆうこからいい匂いがした。

それにしても頑張れってなにをだ?

「何を頑張ればいいの?」

そう問いかけたけれどゆうこはそつと腕をといて躰を離れた。

「いいえ。なんでもないわ…:オヤスミナサイ」

うーむ。まったくもってなんじゃらほい。

「…変なゆうこ…。おやすみ!」

ゆうこにそう言っただけわたしは自分の部屋に走って戻った。

お布団に潜って、珍しく今日は黒モコナと一緒にいないのを不思議に思いながら。

【そしてわたしは悪夢に堕ちる】

◇◇◇

【グシャ、どシュッ】

耳に不快な音。まるで、何かを裂く、そう、肉を突くような生々しい、音だ。

わたしは閉じていた瞼をゆっくりと開いた。

『――』

彼女が、いた。

気になつて気になつて仕方ない人。神崎天姫さん。

天姫さんの胸には一輪の真っ赤な花が咲いていた。綺麗な混じりつけなしに咲き誇る純粋な薔薇の花。彼女が纏うのは上下黒のスーツのようなものだから余計に薔薇は目を引く存在となっている。

『――』

あの人はわたしを『アーアー』と呼ぶ。

わたしはくーなののに、そう呼ぶの。でも天姫さんが言う『アーアー』が音として聞こえない。雑音になってわたしの耳に入る。

『アーアー』

違うよ、わたしはくーだよ？

そう何度も必死に否定しようともあの人はそう呼び続けた。

『……………イ、……………ニテ……………』

……………？なんて、いったの。イキテ、いき、て？

わたしがそう、口を動かすと天姫さんはゆっくりと頷いた。綺麗な笑みを浮かべて。

口の端に赤い液体をぽこつと零しながら。

それは首筋につうと落ちていき、服に染みこんでいく。

天姫さんの胸に咲く赤い薔薇はなおのこと色みを増して赤くなつた。

まるで、天姫さんの血を吸い込んで艶やかに色づくように。

(私の分まで、貴方には生きて欲しい)

(終わりのない定めだけれど、生きていればいい。)

(大切な君だからこそ、この命を捧げてもいいと思った。)

(私は置いて逝く貴方に手を差し伸べられないけれど、この命は捧げられる。)

(この命は貴方に救われたようなものだから。)

(だから返すべきなのだろう。ただ、その時が来た。そう思って欲しい。)

(大切なんだ、誰よりも。)

(何よりも、貴方が大切。)

私のたった一人の「」。ごめんね、こんな「」で。

天姫さんは微笑みながら涙を瞳に溜めていた。零れそうに溢れそうに、それでいて我慢して無理やり笑みを維持してる。

それはわたしの為？

わたしに心配を掛けまいとする虚勢？

そんなことしなくていいのに。わたしはただ天姫さんが無理して



グチャになりそう】

教えてっ！誰か助けてっ！これは、これは夢なんだよね？ねえ、そう言っよ！

【誰か、あの人を。あの人を……助けてえ】

## 26 『夢の道』

元々、彼と私は一番目の彼から生じました。

彼は最初の彼を濃く受け継いで。

私は一番目の彼と二番目の彼の欠片が集まってできたもの。

一番目の彼は一途に彼女を愛しました。

神であるが故に許されぬものだとしても彼は貫き通して消えませんでした。最後まで彼女のことを想って。

その想いの欠片が私の心を作りました。

二番目の彼は優しすぎました。優しすぎた彼だからこそ、彼女は今もその想いに縛られているのです。それが不老という望まぬ躰を与えられたまま。

彼の底のない優しきで私の躰は創られました。

三番目の彼は異常なまでに彼女を溺愛していました。一番目と二番目の生まれ変わりである彼は以前の彼らを逸脱した存在。彼は感情のままに動きます。

そう、彼は赤ん坊のような存在なのでしょう。

彼が見聞きするもの全ては、彼女を通して見るのです。

彼女の言葉に耳を貸し彼女の言葉を全て受け止めて叶える。

それが彼の幸せであり彼の望み。

一番目が叶えられなかった事を三番目の彼は叶えようとするのです。

その感情が果たして正しいものなのかどうかはわかりません。

私達は生まれる事を決められていたのです。抗うことなど無理なのでしよう。

いいえ、最初からそのつもりなどない、ように創られたといったほうがいいのかもありません。私達は本来ヒトに深く干渉することなど、ましてや加護を与えるものをたった一人のヒトだけにするなどないのです。

一番最初の彼に親しい彼らはまさにその代表と言えます。

彼らは世界を見守る役目を担っています。



白と黒。鏡合わせな彼らのように、私達も二つに分けられたのでしよう。

どちらかが欠けることなくお互いがお互いのたった一人のヒトに加護を与える為に。

全ては彼女達の支えとして。

元々、彼と私は一番目の彼から生じました。

彼は最初の彼を濃く受け継いで。

私は一番目の彼と二番目の彼の欠片が集まってできたもの。

一番目の彼は一途に彼女を愛しました。

神であるが故に許されないものだとしても彼は貫き通して消えませんでした。最後まで彼女のことを想って。

その想いの欠片が私の心を作りました。

二番目の彼は優しすぎました。優しすぎた彼だからこそ、彼女は今もその想いに縛られているのです。それが不老という望まぬ躰を与えられたまま。

彼の底のない優しさで私の躰は創られました。

三番目の彼は異常なまでに彼女を溺愛していました。一番目と二番目の生まれ変わりである彼は以前の彼らを逸脱した存在。彼は感情のままに動きます。

そう、彼は赤ん坊のような存在なのでしよう。

彼が見聞きするもの全ては、彼女を通して見るのです。

彼女の言葉に耳を貸し彼女の言葉を全て受け止めて叶える。

それが彼の幸せであり彼の望み。

一番目が叶えられなかった事を三番目の彼は叶えようとするのです。

その感情が果たして正しいものなのかどうかはわかりません。

私達は生まれる事を決められていたのです。抗うことなど無理なのでしよう。

いいえ、最初からそのつもりなどない、ように創られたといったほうがいいのかもしれませんが。私達は本来ヒトに深く干渉することなど、ましてや加護を与えるものをたった一人のヒトだけにするなどな

いのです。

一番最初の彼に親しい彼らはまさにその代表と言えます。

彼らは世界を見守る役目を担っています。

白と黒。鏡合わせな彼らのように、私達も二つに分けられたのでしよう。

どちらかが欠けることなくお互いがお互いのたった一人のヒトに加護を与える為に。

全ては彼女達の支えとして。

◇◇◇

最近お店に泊まることが多くなったある朝、ぼんやりとした頭で布団から起き上がった君尋は呟くように言った。

「……………俺、今日変な夢見たんです…」

「大きな翼を持った優しい瞳をした紅い竜でした」

そう、アレはととても優しい竜だった。

寂しそうに大きな翼を閉じて、悲しい唄を紡ぐ一頭の竜。

俺に誰かを頼む、と言っていた。鋭い牙はヒトを襲うにあらず、むしろ深い慈悲を与え慈しみ、耳に心地よい唄を唄う。その大きな翼はヒトに夢を与え、その大きな体軀はヒトの夢を乗せ高く空を舞う。自由な竜はただじっと待ち続けている。誰かを待ち続けて。孤独に耐えている。

その声に応えたのはいつの間にか、戸に寄りかかるようにして部屋に入っていた侑子だった。侑子は黙って君尋の言葉を聞き終えて、いつもの妖しい笑みで言う。

「四月一日が呼ばれたか、四月一日の夢が【彼女】の夢に繋がったのか。それは分らないわ」

彼女、と侑子が言うのはあの竜の事だ。

「どちらにせよ、アナタは知った。後はどう選択するかよ」

「俺の、選択…？」

いつになく戸惑いを浮かべる君尋に侑子は四月一日の傍へ腰を下ろしスツと四月一日の頬手を伸ばしさするように撫でた。侑子の顔にはなんの感情も見当たらない。

喜びも悲しみも驚きも怒りも不安も戸惑いも、全ての感情が籠っていないその言葉は、強く君尋の胸に響いた。

「ーは選んだわ。【拒む】という選択を」

ー、ちゃんか？

選択とはどんなものか。あのーが何を拒むというのか。

拒むどころかーは己の事さえ何も知らないままなのに何を拒めるというのか。

何もかもが分からない。ただ流されているようにも思える。曖昧すぎて、でも確実に真実に近いそれ。

「果たして四月一日は何を選ぶのかしらね？」

この人は決して教えてはくれない。自分で気がつくその時まで。それだけはすぐに理解できた。

【彼と彼女の出来事】

◇◇◇

ちみつこいくせして四月一日を電気びりびりの刑に処した雷獣様。あの雷獣様、以前こんなアドバイスをくーに残していた。

いつもの如く、くーは四月一日にへばりついては満たされぬ欲求を満たすべく切実に訴えまくっていた。

「君尋く、今度はきなこもち食べたい！」

ちなみに今くーが食べているのは甘いあんこが絡んだあんこもちと香りのよいゴマが使われたゴマもち。両手に握っては口に運んでもぐもぐと動かし、はにょんと頬を緩ませる。四月一日はその幸せそうな顔を見ては

「はいはい。喉に詰まらせないようにゆっくり嚙んで食べてね」

と注意を促して内心はああ、俺って幸せく。と一人知らず知らずニヤニヤ顔になり、雷獣の隣で侑子は「ぷっ」と面白そうに吹いたことを四月一日は知らない。そして雷獣も「欲望むき出しじゃな」と呆れてたり。くーはくーで注意されたにも関わらず、

「だいじょうVっ！……うぐぐぐっ!？」

と喉にもちを詰まらせて苦しそうなうめき声を出した。

「言った側から!?!ちよ、ちよつとほら!水水飲んで…あ!お茶だった!?!」

その間にもくーの顔色がどんどん変色していく。

水を求めて宙をさまよう手がピクピクと痙攣している。

「うぐぐぐぐぐ!」

「ああくーちゃんの顔が青くなってく!?!待ってて水持ってくるからっ!」

ドタバタと慌ただしく台所へ向かった四月一日は水が並々注がれたコップを片手にくーの所へ転がるように戻って来た。コップを受け取ったくーは無我夢中でそのコップをぐいっと飲み干して、四月一日はくーの背中を軽く叩きながら心配そうにくーの様子を見やった。何とか飲み込むことに成功したくーとほつと安堵の息をつく四月一日。侘子はくーのほつぺを意地悪そうにみよーんと伸ばしては「食い意地張り過ぎよ」と叱る。

くーは「むげー」と呻いては必死に抵抗するも結局いいように遊ばれたり。

さて、流れを戻して瀕死から復活してお仕置きされてほつぺが真っ赤なくーから始めましょう。

「冷蔵庫元に戻って良かったね。ゆうこ」

そう言いつつ、侘子の酒のつまみに手を出そうとするが、侘子は何気ない動作でそれを俊敏に叩き制する。

「そうね。これでお酒も安心して飲めるってものよってことで。四月一日!宴会といきましょう!」

くーは負けてたまるか女が廢るぜやけにやる気を見せ

シュツシュツ!!

どうだ!わたしの高速手さばき対ゆうこversionに敵うまい!い!

と不敵に笑った。

「おお!?!『冷蔵庫直ってよかったね会』だね?わたしお寿司が食べたー!骨付き肉食べたーい!」

「無駄よ」

だが侑子の方が上手であった。

お皿を移動させるといふ簡単な方法でクーの技を見事破つたのだ。

クーは

「のおおおおおおおおおおお！」

と叫んで頭抱えて盛大に落ち込んだ。

「モコナも食うぞく飲むぞく」

「アンタらは食べるか飲むかしかかないのかっ?! そしてくーちゃんちよつとは気がつこうよ」

四月一日のツツコミ&指摘が華麗に入り、はあくやれやれと腰を浮かして立ち上がる四月一日は台所へ向かった。四月一日がいなくなつた後、

「ほうほうくそれにしても、貴方が雷獣なんだ。丸っこいんだね。一つかしくくなった!」

「面白き娘よ、もう一つかしくくなるがいい」

「え?」

四月一日がビビりながらお茶を準備しに台所へ行つていた時、雷獣様はみよーんみよーん! とモコナの頬を引っ張つて無邪気に遊んでいたクーにこう唐突に告げたのです。

「力に飲み込まれてはいけない。幼い竜の娘よ」

クーは目を丸くして雷獣様を見つめたのに、こう言い返した。

「力って? わたし、そんな大層な力なんてないし。大体竜の娘ってナンスカ?」

頭上にはなマーク飛ばしながら訪ねるも雷獣様は見事にスルーなされ、侑子は黙つて事の次第を見守っていました。

雷獣様は威厳ある言葉で語ります。

「力とは様々だ。執着して初めて発揮するものであろう。譲れぬ願い、はたまた大切な者の為。己が心を強く持つ事で力は大いに発揮される。だが、お前はどの人間よりも執着心があり、【あの者】以外は全てに興味を抱かない。良く言えば一途、悪く言えば極端。だからこそ不安定なのだ。時折自身では想像もつかぬ『力』を操る時があるだろ

う。安易に不安定な『力』を使つてはお前自身が『力』に飲み込まれてしまうぞ。むやみやたらに使うものではない。その『力』は今の以前では御しきぬ」

「……知らない、だってわたしは使いたいと思つて使つてるわけじゃないもの。」

ただ無性に、『消してやりたい』つて思う時がある。それはとても抗えないもので、逆に心地よくて大切なものを守れるようにしてくれる。それはわたしにとつて大切なもので、どうしても奪われたくないものの。誰にも盗られくないの。ならどうやって使えばいい？わたしはどうやって守ればいいのか？」

「己を知るのだ。お前という己を」

「……どうやって？そのやり方を教えて。皆卑怯だよ、言うだけ言うつて教えてくれないなんて……。わたしが一体誰なのか、どうしてここににいるのか。」

それなのに、どうしてわたしと会うとわたしを心配して励ましてくれるの？わたしは貴方達を知らないのに。ズルいよ、みんなズルい」「幼い竜の娘。お前が皆を知らぬとも皆はお前を知っている。それだけお前は名の知れた存在なのだ。さすれば【道】は開かれる」

「み、ち……？」

その道とは何処へ繋がるものなのか。

その先に一体何が待ち受けているのか。

雷獣様は多くを語ろうとせずに、ただクーに助言を授けた。

「いいか？己を知るのだ」

と。その助言が果たして活かされたのかどうか。それは本人のみぞ知ると言つた所なり。

「マルー、モロー。追いかけてこしよー」

「クーが鬼だ」「クーが鬼ね」

「なぬっ!?わたしに鬼をすれとな!!ぬほほほほ、いいだろういいだろうーこのクー様から逃げられると思うなよ子猫ちゃんたちへいかもくん」

「クーが変態だ」「クーは変態だ」

だだだだだだ！だだだだだだだ！

「待て待てまでええいいいい！わたしを変態呼ばわりするのは生意気なマルダシとモロダシめええええええええええ」

「きやー」「にやー」

保護者、侑子は目を細めてその様を見守っていた。

「……自分で自分に忘却をかけたのね。器用な子」

「侑子」

黒モコナの呼びかけに侑子は頭を振った。侑子は知っていたのだ。くーがああ夢を視ることを。そしてくーが何を選ぶかを。

わかって、侑子は『頑張りなさい』と声を掛けたのだ。今の己に出来ることはそんな些細な事だけ。

「いいのよ、くーは自分でそうなるよう望んだ。知らなければならぬことを知った上で今は拒むことを選んだ。それもあの子の選び取った選択肢なのだから」

そう、全ては選ぶことこそが大切なのだ。今は何よりあの子の意思を尊重すべき。

たとえば、

「あの子が悲しむことになっても、ね」

少し、心が軋んだ音がした。

【選ぶ取る自由】

## 27 『M19 コンバットマグナム』

くーside

うーん、暇でしようがない。廊下の端から端まで一人でゴロゴロしてるけど何回も繰り返していると飽きてくるといふものだ。

あとなんか忘れてるような気がしてならない。どうしてかな、そう感じるんだ。でも気にしてもしようがない。だって忘れてるんだもん、きつとどうでもいいことなんだ。忘れるくらいなことだもん。きつと大切なことじゃないんだ。

よおし！なんだかやる気になってきたぞー。

今誰も相手になってくれなくて暇なんだ。たまにはイメージトレニングも必要だろうってな訳で一人芝居をやってみようと思った。

設定は森の中に住んでいる仁王立ちできるくまさんと白いカチューシャがお似合いの女の子。全部創作だけど内容は面白い感じで行こうと思う。

ではスタート☆

深い深い森の中で道に迷った女の子は困った風になっていた。女の子はある目的で来たのだ。そこに偶然通りかかった歩いていくくまさんにこうお願いをした。

女の子「くまさんくまさん、わたしのお願い叶えてくれますか？」  
くまさん「いいだろう、可愛い子ちゃんの為なら毛皮だって脱いでやるぜ！」

優しいくまさんは男前でした。そして同時に女の子好きでした。でも女の子のタイプではありませんでした。だって毛深いから。

女の子は男前なくまさんに迫られたけどさりと交わしつつ、こう言った。

女の子「まあ！本当？だったらその毛皮剥いでもいいですか？」  
女の子は恐ろしい台詞をさらっと口にした。そう、女の子の目的は体の弱いおばあさんの為に毛皮を探しにきたのでした。なんておばあさん想いの女の子なんでしょう。



小首傾げつつ上目遣いを狙ったおねだりの仕方にくまさんは案の定ズキーンと胸を打たれた。

くまさん「おっと！ただの冗談だったんだがマジにとられちゃったみたいだな。可愛い子チャンの頼みなら叶えてやりたいがこの毛皮剥いじまうとオレは死んじまうからな。代わりにこの銃をやろう。これで毛皮も取り放題だぜ」

そう言ってくまさんは女の子にM19 コンバットマグナムを渡しました。女の子はずしつと重みのあるM19 コンバットマグナムを受け取り満面の笑みで礼を述べました。

女の子「ありがとう！親切なくまさん。これで貴方の毛皮も剥げるのね」

くまさん「おいおいマジかよ、可愛い子チャン。オレの話通じてねえ？困ったぜい」

とても困った素振りにはみえないくまさん。

たった今女の子に「おまえ殺るぞ」宣言されたのに全然気がついていません。

でも女の子も殺るは殺るにしてもとても自分だけでは殺れない事実にも悩みました。

女の子「でもこんなに大きな巨体一発で仕留められるかしら」  
すると親切なくまさんはこう女の子にアドバイスをしてあげました。

くまさん「そうだな、可愛い子チャンの腕じゃまず無理だろうなあ。どうせなら一服盛ってからゆっくり料理した方がいいんじゃないか  
い」

なるほど！と女の子は納得して手をぽんつと軽く叩きながら

女の子「まあ！それはそうよね。ありがとうくまさん。それじゃあ一杯どうかしら？」

と、何処から出したのかわからない徳利と猪口をくまさんに差し出した。

くまさんは目をキラキラさせて上機嫌になった。差し出された猪口をふさふさの手で持って並々注がれる酒を見つめた。

くまさん「ラツキーだな。可愛い子チャンに酌してもらえるなんてオレは最高にツイてるぜ！ぐ、ぐぐぐ………しまった、一服盛られちまった……!!ガクツ」

でもそのお酒には睡眠薬が入っていてあわれくまさんはその場にズドオーン！と倒れてしまった。女の子は口元に笑みを浮かべながら右手に出刃包丁携えていました。

女の子「素敵なくまさん。穏やかな顔して寝ているわ。大丈夫痛くないように剥いであげるから。じょーりじょーりじょーり」

くまさん「ぎゃああああああああ!!」

くまさんの断末魔が森の中に響き渡りましたとき。

end。



「……………くーちゃん。ただいま」

名を呼ばれ振り返れば制服姿で佇む君尋の姿があつた。おおよ熱中してたらいつの間にかそんな時間だったのか。ふう、ちよつと疲れちった。

「お！帰って来たかヤンチャboy？暇で暇で仕方ねえから仕方なく一人芝居しちまつてるじゃねえかよおう？」

「……………一人芝居どころか喋り方まで変わってるんだけど」

心なしか君尋の顔が引きつっているような気がする。いや、確実に引きつってる。主に口元とかヒクヒクしてる。

「そうかよ？そんな細けえこと気にすんなよ男の癖によお」

それよりも腹減った。頑張つて腹減った。迫真の演技をしたので余計腹が減ったのだ。

「腹減ったぜ、なんか頼まあ〜」

その場で足を広げておなかをボリボリと搔いた。あ、背中も痒い。でも手が届かない。まごのて欲しいな。ゆうこに頼むかな。

それとも宝物庫の中にまごの手ないかな。猿の手ならあつたよな。でもアレは開きたくないなあ〜。

「ん」

「ん?」

「ここ掘れわんわん?」

「こんなくーちゃんは」

「いやだあああああああ——!」

「この世の終わりの顔して涙目になって叫ぶ君尋でした。」

【今日は視える女の子と出会いました】

## 28 『願えるのならば』

四月一日 side

最初の出会いはピンク色の桜が舞う中、大きな桜の木をじつと見上げる無表情な女の子だった。二回目に会った時は冷たい雨の中、傘も差さずにまた桜の木を、いや桜の木の上にいた女の人を見上げていたあの子。俺は慌ててその子に傘を差しだした。

濡れることも厭わず、いやそもそも感情を表に出さない子で俺が傘を差しだした理由さえもわからないといった印象を受けた。

その子は感情を宿さぬ瞳で俺を見つめて待つていたと言う。

俺と近い存在で、また会いたいと思つたからだつて。

どうしてその子は桜の木を見上げるのか。

それは自分が来なければあの女の人はずっとそこにいられて、桜の木はずっと咲き続けていられたのに。でも自分が来たことで、ここは騒がしくなつてしまった。

女の人は桜の木が可哀想だと胸を痛めた。

自分が彼女の居場所を奪つてしまったから。

確かにそうかもしれない、けど現状を嘆くよりも他に何か方法を考えよう、と俺は手を差し出した。

女の子は一瞬躊躇いを見せたけど、恐る恐る俺の手に小さな手を重ねた。

一つだけ良い場所がある。でもそこはすぐく気に食わないアイツの家なのだけど、仕方ない。お寺の境内は清浄な気で満ちていて、女の人も喜んでいた。

互いの目的は果たされた。

女の子はお母さんにばれる前に帰らなきゃと言うので俺は傘を使つてと差し出した。

女の子はもう濡れてるから意味ないよと言うけど、俺も濡れちゃつてるしねと苦笑いすれば傘を受け取つてくれた。

別れ際、俺は女の子の名を尋ねた。

その子は五月七日小羽【つゆりこはね】ちゃん。

四月一日君尋、と五月七日小羽ちゃんか。

俺と同じだ、でも小羽ちゃんの方が綺麗だねって笑いかけたらその子は少し表情を変えた。ほんの少しだったけどすぐにわかった。

『ありがとう、またね』

『うん、また』

そういつて小羽ちゃんと別れた。いつかはわからないけどまた必ず会う。俺もそう感じた。

お店に行つてくーちゃんにせがまれて今日のおやつは肉まんにした。

本当にくーちゃんは肉まんが大好きらしい。大好物と言ってもいくらいに。もしかしたらコレも彼女の記憶を探る手掛かりになったりして？

「ふうくん、小羽ちゃん、か」

「うん、可愛い子だったよ……事情は色々とありそうだけど、ね」

「……会つて、みたいな」

ぱくつ、と俺が作った肉まんを頬張つては呟くようにいうくーちゃん。

そういえば、初めてじゃないか？

くーちゃんが百目鬼やひまわりちゃん以外の人に興味を持つのは。

「どうして？」

何気ない質問だった。ただ不思議に尋ねただけのつもりだった。

そうしたらくーちゃんはぱくつと最後まで肉まんを租借してもぐもぐ数秒後。

「君尋に影響を受けた子だから」

「俺？」

「そう、君尋は気がついてないよね。百目鬼さんもひまわりさんも君尋の影響を受けてるんだよ？勿論わたしも」

「……………俺、が？」

そんな大層な人間じゃないし、俺は。

そう言いかけた言葉は引っ込んだ。

くーちゃんが俺に視線をうつしオッドアイの瞳を細めて口元を緩

ませたから。

恥ずかしい話だけど、魅入ってしまった。

あー、可愛いな、と。

ヤバい、今の俺顔赤いかも。

「君尋？」

「……なんでもないよ、うん。なんでもない」

ふんわりと笑い、自覚ないんだと微笑むくーちゃんは気がつかない。

いや、今は気づかないで欲しい。

むしろ、俺の方がくーちゃんの影響を受けたような気がする。

本人前にして言えない俺だけど。この時間は俺だけのもので、俺とくーちゃんだけが共有できる時間だから。だから、できるなら独占したいんだ。

ずっと、一緒にいられたら。

時間が止まってしまえばいいのに、と馬鹿げた事さえ考えることもある。

けどそれって違うんだろうな。

本当に時間が止まってしまったら、全ての世界は色を褪せてしまうのだろう。

その輝きさえも失って最後は灰色の世界に変わってしまうような気がする。

今この瞬間だから輝いている。

そんな瞬間を大切にしたい。

もしかしたら、終わりがあるのかもしれないこの時間も、心の中に刻み込んでいきたい。

失われた時間は、元には戻せないんだから。

「くーちゃん、俺、ね」

「うん」

俺はくーちゃんの手に自分の手を重ねた。

「俺、幸せだよ」

「うん？」

「この時間が、大切なんだ」

かけがえのないこの瞬間を失くしくくない。初めて手放したくない  
と思った。

でも、ある日を境にこの関係は崩れてしまった。

君がどうしてこのお店にいて、どうして産まれたのかを知ってしま  
った俺だから。

【真実とは羽根のようなもの】

◇◇◇

宝物庫にはいつか誰かに渡るために眠りにつく品物が置いてある。  
けど、二つだけ。二つだけ、誰にも渡ることのない眠りについたまま  
の硝子に包まれたモノがある。それは俺が最初に宝物庫に入って掃  
除をしていた時、目にしたものだっただ。

『教えてあげるわ。四月一日』

侑子さんがソレが何であるかを俺に教えた。

貴方は知らなければならぬ、と俺を誘って。俺はどうしてか二の  
足を踏んだ。

躰がいう事を利かない。それ以上進んでは戻れなくなる、そう警鐘  
を鳴らす。

『さあ、どうする』

侑子さんは、俺に選択をしろと言う。

進むことも、拒むことも、後にすることもできた。俺は、『行きます』  
と知ることを選んだ。果たして俺が選択したことが正解だったのか、  
間違っていたのか後から考えても答えはでない。けど、後悔はしてい  
ない。

※※

足を踏み入れた瞬間、背筋がぞつとした。どうしてか、動悸が激し  
くなつて手足が鈍くなった。

この先に、何かがある。それが、嫌なもの、というわけじゃなくて、  
でもなんとなく違和感を感じてしまうもの。確かに、そこにはある。  
あつた。

以前、宝物庫に掃除をしに入った時、見かけた人一人が入れる大き

なガラス瓶。

中はまっくらで、何も見えなかったし何よりその時は侑子さんにそれとなく見せないようにされた事を覚えている。

アレは見せまいとしていた？俺が傍にいたから？

違う、あれはクーちゃんがいいたから。そうだ、クーちゃんに見せまいとしたんだ。

侑子さんはガラス瓶二つの前まで俺を誘った。そして、

「見なさい。【今】の四月一日なら見られるわ」

と静かに言う。

今、という言葉に引つ掛かりを感じながらも進む。顔が強張って緊張しているのが丸わかりだ。俺はガラス瓶に両手をつけて顔を近づけた。

両目を通してわかるのは黒い闇ばかり。目を凝らして見つめてみた。

最初は黒黒一色。だが徐々にガラス瓶の中には泡が生まれているのがわかった。

小さな泡がいくつもいくつも存在している。これは水？

黒い闇は徐々に透明度を増して水なのだと気づかされた。

ゆらゆらと揺らめく、何かに気付いた。それは、漂う一筋の黒い糸。その先にはいくつも同じものが存在する。

違う、黒い糸じゃない。コレは。黒い、髪？

よくみる、四月一日君尋。

黒い髪だけじゃない。白い四肢が、同体が、眠る顔が、アルジャナイカ。

「……いーう、ウワアアアアアアアア！」

俺は絶叫に近い悲鳴をあげてしりもちをついて後ろに無我夢中で下がった。

どん！

柵にぶつかっても俺は首を振りつづけ、それからソレから逃れようと無我夢中に離れようとした。侑子さんは怯える俺ではなく、そのガラス瓶を見つめていた。



躰が異様に寒い。思わず自分の腕を抱きしめた。

寒い、寒い寒い寒い!!

まるで氷水をかぶったかのように一気に寒さが襲ってきた。

一体、何を見た？俺は、もしかしてとんでもない選択をしてしまったのか。

すぐ目の前にいるのは、視てはいけないもの？触れてはならない、存在。

湧き上がる疑問。まともに働かない思考。

俺には衝撃的で、頭を鈍器で殴れたような感じだった。

それぐらい、アレは本来あつてはならないものだ。

「アレは願った形なのよ」

侑子さんは感情を籠めない覚めた目つきをして俺を見下ろしていた。

動揺を隠せない俺を、じつと見つめて。侑子さんという人間が信じられなくなった。

彼女はこの事態をどう受け止めているのか。

なぜそんな力才可以できるのか。

「どういう、ことですか…」

「なんで、なんでっ」

「なんで!」

「ここに、天姫さんがいるんですかっ!」

そう、あの一度しか会った事のない、けどどこか悲しみを宿した瞳を持つ少女。

彼女が、眠っている。あの、ガラス瓶の中で。青い水の中に身を委ねながら。

幼い子供があどけない顔で眠るように、彼女は水中に安心しきった顔で瞼を下している。

侑子さんは淡々と説明をする。感情を一切封じ込めたように。

「その子の躰はあるけれど中身は空よ。器だけのもの」

器だけ？空ってどういう意味だ。

「天姫は対価を払ったわ。己を捧げることでもくーを救った」

「そして狗楽は命を落とす運命にあった天姫を助けようと対価を支払い終わって人形となった」

にんぎょう、人形って今のクーちゃん、が？

「あの子達は互いが互いの為に対価を支払っていることを知らない」

「知らずに、あの子達は同じことを繰り返している」

「そして天姫は繰り返すのでしよう。自分の妹を助ける為。この先の未来で」

クーちゃんが、天姫さんの妹？

それじゃあ、クーちゃんの本当の名前は……狗楽ちゃん？

世界は俺が知らない、想像もつかないほど同時に存在しているらしい。

天姫さん、彼女はある出来事から逃げる。忌々しい記憶を、もう一人の自分から逃げる為。逃げて全てを忘れたくて、でも結局は逃げられない宿命にあった彼女。

そう、全ては【必然】。

天姫さんは一度死んで、また死を繰り返すと言う。それが彼女と、彼女の妹の必然なのだ、と。

「己が何者なのかを知らずに天姫は全てを捧げた。愛する妹の為に。狗楽は全てを知った上で受け入れそして全てを差し出した。大好きな姉の為に」

彼女たち姉妹だけじゃなくて、彼女たちと深く繋がっている人たちまでも巻き込んで。

全てこうなることをわかって願ったという、神崎光さん。

侑子さんの昔からの友人で一癖も二癖もある人。

「こんな、こんな悲しい事があって、いいんですか……。だって二人は」

たった二人だけの、姉妹じゃないか。

それがどうしてこんな形になってしまうのか、俺には理解できない。

理解、したくない！

「あの子達はそれで幸せなのよ。それが【筋書き】だから」

「侑子さんはどうして、どうして、俺に教えるんですか」

「それはアナタが【最後の選択肢】に必要な人だから」

「【最後の選択肢】？」

「くーの代わりに四月一日、アナタは選ばなくてはならない」

「真実を教えるか、それとも真実だけを伏せて全てを教えるか」

「光を与えるか、闇を与えるか」

「どちらを選ぶかは、アナタ次第」

侑子さんの言葉を終えて、俺は、もう一つ並ぶガラス瓶に視線をやった。

そこには、彼女がいる。

俺が知る、くーちゃんではない、彼女が。

「スイマセン……俺には、見られません……。見たくない……」

俺は、拒んだ。顔を、背けてわざと視界にいれないようにした。

この場に一分一秒でもいたくない。

出たい、もう出たい。

もう何も見たくない。知りたくない。これ以上何も見聞きしたくない。

こんな事、知りたくなかった。どうして侑子さんは俺に見せたのか。

考える力は今の俺にはない。逃げるしかない、逃げるしか。

「そう」

侑子さんはそう返すだけに止め、宝物庫から出た。

俺はそれに続くように速足で宝物庫を出て、扉を閉めた宝物庫は、再び暗くなった。

【重い枷】

## 29 【有終の美】

クーは何をしても君尋を助けたかった。二階の窓から硝子枠ごと一緒に落ちた君尋を。ひまわりが君尋の肩を叩かなければ落ちることとはなかった、と責めることはしなかった。ひまわりが君尋と出会わなければなんて言わなかった。

どうして百目鬼が一言注意するように声を掛けなかったのか訴えなかった。

ただ、助けたかっただけ。過ぎてしまった事よりも、責めて相手を傷つけるよりも、大切な人を手放すことがないようしたかった。繋ぎ止めたかったのだ。

ただ、ただ侑子に縋り付いては必死に訴えた。

大粒の涙を零して、髪をぐちゃぐちゃに振り乱して、訴えた。

『わたしが！わたしが対価を支払うから』

『だから、だから!!』

『君尋を助けて！お願いゆうこお』

瀕死の君尋を救うには願うしかない。クーは直感した。

救えるのは侑子しかない、だから侑子は直接店に運ばせたのだ。

だが侑子は静かに首を振る。襖一枚隔てた向こう側にいる、君尋に向けて視線をやりながら。

『クー、貴方が払える対価はないわ』

『貴方は、すでに対価を支払った後』

『何も知らないままのクーでは対価を支払えないのよ』

クーはただ見守っていることしかできなかった。

彼女は思う。わたしは、役立たずだ。

百目鬼さんがたくさんの血を流して、ひまわりさんが君尋の傷を背負って、じゃあわたしは？わたしは何もしないでただ傍にいるだけ？

ただ、君尋を助けられずに、ただ彼の手を取って涙を流して悲しむだけ？

君尋を救えずに、自分が誰かもわからずに、ただ居るだけ。

力があっても、わたしがわたしを取り戻さなくちゃ誰も助けられない。

誰も、救えない。わたしは誰かを救いたかった。そう、誰かを救いたかったの。

自分の命を投げ打つても、助けたかった。

わたしは、一体何の為にいるの？わたしは、どうして生きているの？

つかれた。もう何もかもわからなくなっちゃった。もう疲れちゃった。

考えることに、悩むことに、囚われることに

全てが億劫で、煩わしい。放り投げたい、何もかも。

ただ視界を閉じて耳を塞いで、小さくなつて殻に閉じこもつて遮断させてしまおう。

心を凍り付かせてしまえばいい。そうすれば、きつと、らくに…。

一命をとりとめた君尋が、かすかながら意識を取り戻した時、真っ先に口にした言葉。

『くーちゃん、今も、泣いてますか？』

想いの強さ、絆の深さ。君尋はくーを大切に想っている。くーが思う以上に。

けどくーは気がつかない。自ら閉じこもってしまった後だから。

縁側で一人ぼんやりと座る少女に歩みよる侑子。

「くー」

と、名を呼んでも少女は振り向く気配がない。

侑子は少女の隣に膝をつき、ぐいつと正面を向かせた。

少女の瞳には光りが宿っていない。

いつものあの天真爛漫な明るさが残っていない。

ただ、座り、ただ正面を向かせられたからまつすぐ見つめるだけ。

「……………」

「その道を選んでしまうのね、やっぱりアンタは」

「不憫な子」

侑子はそつとくーの頭を自分の胸に抱き寄せた。くーはされるが

ままに身を委ねる。

同情ではない。では何か？古い友人に頼まれた子だから？ただそれだけの関係？

自分の中ではとっくにそうなっていたのかもしれない。

馬鹿な子ほど可愛いというけれど、まさにそうね。

「光もくーにそんな顔させたいわけじゃないのにね。……あの子も天姫も不器用だから。馬鹿な、子」

自分を守る為、殻に閉じこもるのは天姫そっくりだわ。

大丈夫よ、大丈夫。

きつと、時が満ちるから。それまで、あたしが傍にいるわ。

侑子にとつてくーは依存するに値する存在だった。だからなおのこと、この魂を慈しみたい、守りたいと思う。自分の手元にいる内にだけでも守れたら。そう、思わずにはいられない。

【依存する怖さ】

◇◇◇

己の出自を知りながらも最後には願いを叶えた少女。

『私の命を差し出す代わりにあの子を頼む』

大切な者を守る為に全てを差し出した少女。

『どうか姉を助けて』

互いの絆は確かに結ばれた。それは過去の彼女たちから未来の彼女たちへと受け継がれていく。蝶は籠の中でずっと見守っていた。二人だけではない。

蝶が導いた数多の人。彼等にとって蝶は希望の星だった。

叶えられないと思つた願い。それは蝶によって叶えられるのだから。

勿論、願いを叶える代わりに対価を支払う事になるが、それでも願いは叶うのだ。

たとえそれが身を斬るよりも辛い対価だったとしても人は願う。

助けてくれ、と。

願いは引き継がれる。だが受け継ぐか、拒むかは選択することができる。

それを選ぶかはどうかは、彼次第。彼の答えはどのようなかしら。蝶はぼんやり考えた。すると、一筋の光が籠に照らし出される。

『——嗚呼。ようやく、きたのね』

終わりとは始まりだ、と白い鳩が言っていたのを思い出した。蝶は、たしかにそうねと相槌をうつ。

籠の扉が開かれた。時、来たり。

蝶はひらひら、と羽根を閃かせて籠の外へ飛んで行った。何処へ向かうかも分からずに。

籠は空っぽになり、二度と何かが閉じ込められることはなかった。

物語の最後は本当は最後ではない。始まりだ。

けどそれは物語の住人が最後だと思ってしまうえば最後になる。

カーテンが閉じて灯が消されて観客は席を立ちいなくなる。

時計の針が『ぼーん、ぼーん』と終了の時を告げ、真つ暗闇が広がる。

侑子さんがいなくなつて、どれくらいの時が過ぎただろうか。

外の世界では目まぐるしく季節が廻つただろう。

俺は以前と変わらないまま、店に居続ける。帰り人を待ちわびながら。

時々、大好きなあの子がお土産片手にお店にふらりと来たりする。

その時はやる気がみなぎって空回りする俺だ。この間は走る飴とか意味わからないモノを持ってきて、庭中を走らされた。

彼女曰く、『普段運動してないからピツタリだ』そうだ。

確かに運動不足だけど、飴に追いかけられる俺ってなんだろう。

こんな事、普段の日常だったらないことばかりだ。けどそんなのも楽しいと思っている。

ふと、思い立って俺は、宝物庫に向つた。普段、立ち入ることのない部屋。

俺はアレ以来、彼女たちに会いに行っていない。正直、会える自信がなかった。

二度とみなくてもいいと思つた。けど、今日は違う。今日は、会える。

◇◇◇

ようやく会えた。くーちゃんの前のくーちゃん。

初めまして、そして

「オヤスミ、狗楽ちゃん」

くーちゃんではない、くーちゃん。俺の知らない神崎狗楽ちゃん。

俺はあえて君の名前を呼ぼう。それが相応しいと思つたから。俺



が知る以前の君だものね。

——君が一身に見つめるのはおねーさんだけだ。他は一切目に入らないくらい、繋がった【絆】。それは誰にも断ち切れるものでもなく、誰も介入できない二人だけの世界。

逆に羨ましいとも思う。ここまで想って想われて互いに互いがなしでは生きられない二人。

最後の瞬間まで、君たちは互いの事しか考えていなかった。

天姫さんの魂はなく、器だけ。

狗楽ちゃんの器はなく、魂だけ。

君達は互いに足りない部分を補いあう一つの存在。

最高の姉妹だよ。良かったね、君たちはもう離れることはない。君の夢路はずっとおねーさんと一緒だよ。隣り合わせで、同じ閉ざされた空間で、君たちは永遠に手を繋いで眠るのだろう。もう覚ますことのない蒼の世界に優しく包まれながら。

見慣れた顔が目の前にあるのは正直淋しいけど、君たちは違う。ここは君たちだけの世界。君たちだけに許された領域。

「君たちの夢の旅路が【光】で満ち溢れていますように」

祈りを込め、呟いた。俺はゆっくりと扉を閉じた。

願わくば、この扉を開く時がありませんように。それまでは静かに静かにさせてあげたいから。宝物庫にて眠る二人の顔はおだやかなまま、俺は静かに扉を閉じようとする。

光が室内から消えていく。

もう、二度と彼女たちは離れることがないと思う。

なぜならそれが彼女たちが望んだことだから。それが、彼女たちの最後の【願い】だから。

——君が一身に見つめるのはおねーさんだけだ。他は一切目に入らないくらい、繋がった【絆】。それは誰にも断ち切れるものでもなく、誰も介入できない二人だけの世界。

逆に羨ましいとも思う。ここまで想って想われて互いに互いがなしでは生きられない二人。

最後の瞬間まで、君たちは互いの事しか考えていなかった。

天姫さんの魂はなく、器だけ。

狗楽ちゃんの器はなく、魂だけ。

君達は互いに足りない部分を補いあう一つの存在。

最高の姉妹だよ。良かったね、君たちはもう離れることはない。君の夢路はずっとおねーさんと一緒だよ。隣り合わせで、同じ閉ざされた空間で、君たちは永遠に手を繋いで眠るのだろう。もう覚ますことのない蒼の世界に優しく包まれながら。

見慣れた顔が目の前にあるのは正直淋しいけど、君たちは違う。ここは君たちだけの世界。君たちだけに許された領域。

「君たちの夢の旅路が【光】で満ち溢れていますように」

祈りを込め、呟いた。俺はゆっくりと扉を閉じた。

願わくば、この扉を開く時がありませんように。それまでは静かに静かにさせてあげたいから。宝物庫にて眠る二人の顔はおだやかなまま、俺は静かに扉を閉じようとする。

光が室内から消えていく。

もう、二度と彼女たちは離れることがないと思う。

なぜならそれが彼女たちが望んだことだから。それが、彼女たちの最後の【願い】だから。

完

## 必然に抗おうとした男の話。

自分の結末を知ってしまったとしたら？

死に様がいかなるものかを教えられてしまったら？

人はどうなるのだろうか。絶望するだろうか、それとも残少ない命を懸命に昇華するだろうか。人の数だけ様々なストーリーがある。

その内の一つ。限られた者だけが知ってる隠されたストーリーがあった。

これはある男が全てを捨てる覚悟で願ったある話である。



何ものにも代えがたいものができてしまった。それは男の命さえも惜しくないほどのもの。

今まで生きてきた中で、大切なものをあえてつくろうとせず、避けてきたもの。それを男はつくった。別に男はつくろうとしてつくったわけではない。

いつのまにか、大切になっていったのだ。

そのもの自体が。男の中で大きな存在となっていた。

悩みに悩んだ末、一度は手放した。そのものの幸せを願ってだ。

男の手は血と泥で汚れていて、真っ白であろうそのものを汚してしまっただろうからと。

だがそのものが、いざ己以外の男と共になろうとした時、男が取った行動があまりに突拍子もないもの。まさか、あのような大胆不敵な行動を思いついたものだ、男は後から思い出しては苦笑いしていた。

それは今まで築き上げてきた地位と名誉、そして国を敵に回すという赤の他人から見れば滑稽なことで、確かに捨てるにはもつたいないほどのお宝と男は思った。だがそんなものがどうでもいいと思えるほどの衝撃が走ったからだ。

アイツが笑っていない。いつも、俺の前で笑っていたアイツが。

男は後悔した。そのものが笑うのは、己がいるからだ、痛感させら



並々ならぬ闘志に湧き上がる男に怖気づく兵士たち。障害となるそのものの父親との一対一の対決。仕組まれた婚儀を気に入らないという理由であえて、花嫁を男に放り投げ渡す婿。目まぐるしく変わる場面についていけなかつたりもしたが、なによりも優先すべき相手が目の前にいた。男はそのものの名を慈しみを込めて呼んだ。

『…っ…っ…』

男の声に返すかのようにそのものは男の首に両腕を回し、離れまいと身を寄せた。さきほどまで仮面を被っていたかのように表情がなかったそのものに、初めて感情が現れていた。

微かにすすり泣く声が男には聞こえた。

『すまなかった』

男も離してやるものかと、そのものの背に手を回し己の中に抱き締めめた。

迫りくる追手や刺客も怖くはなかった。

これから待ち受けるであろう苦難の道も共に進むのならば、恐れなどない。

男は幸せだった。その者と共に歩める人生に陰りあろうとも、からなず光差す時が来ると信じていたから。その幸せは突如として崩れ去った。

全てを知る者だと告げる怪しげな男から宣言されたのだ。

『お前はあの娘の為に生きながらえさせた。私がそう仕組んだのだ』

と。つまり男は愛しい娘の成長の為に今まで生きてきた。

赤ん坊の頃に息絶えるところであった命の楔を別の命で補い繋ぎ合わせた。だからその命には終わりがある。

その終わりこそ、娘が成長するために必要な過程。

決められた筋書きであって、その舞台の上で役者としてのお前は終わる。

抗うことはできない、どのみち娘の手で終わらなくてもお前の命は尽きる。

幸せのまっただ中、男はなぜ今この時に現れた！と怒鳴った。な

ぜ、出会わせたのだと!?血走った目で迫り口走った。

そして、膝から崩れ落ち、ぼろぼろと女のように涙を零した。

なぜ、なぜ……俺とアイツなのだ。

一緒にいられると思った。手放さずに済んだと安堵した。この先の未来に希望を寄せていたのに。

なのに、なんで!

絶望という名の檻に閉じ込められそうだった時、全てを知る者はこう言った。

『ならば足掻けばいい』

『抗う事はできない。だがお前は足掻くことができる。この必然から逃れられはしないが、下準備しておくことだけはできる』

『選択するのはお前自身である』

そういつて男は絶望の淵に立たされていた男に片手を翳した。するとそこから目も眩むような光がうまれ、それは次第に男を飲み込んでいった。

◇◇◇

魔女はある男へと問いかける。

「貴方の願いは?」

すると男はまるで自分がどうやってこの場所に移動したのかわからないと動揺した態度をとった。

「願い?願いとは何だ?というか、ここはどこなんだ?」

「ここは相応の対価を払って願いを叶える、店。あたしはこの店主」

魔女の冷静な受け応えに男は眉を顰めた。

「店……願い……」

「貴方は『彼』にここへ送られたみたいね。それも『彼』なりの優しさなのかしら。……まあ、いいでしょう。貴方は強い願いをもつてこの店に来た。この店に足を踏み入れられるのは願いがある者だけよ」

魔女にそう教えられは男はハッと我に返ったかのように早口で魔女に迫った。

「だったら……俺の、俺の!命を永らえさせることは可能か。少しだけでもいい!」

そう懇願するかのように男は必死に魔女に訴えた。だが男の願いはそうたやすいことではなかった。ある者が男に告げた必然を捻じ曲げようとしていたのだから。

魔女はゆつくりと首を横に振った。

「無理よ、貴方の寿命は定められたもの。永らえさせることはできないわ。そして、死者が生き返ることもない。それが可能なのは道を踏み外した者だけよ」

「だったら、どうすればアイツの傍にいられるっ!？」

男には死ねない理由があった。たとえば、それが愛しい者の為だとしても、だ。納得などできるものか。たとえば、それが少女の為の成長だとしても、だ。

魔女は男にとってそれほど価値ある人物を知っていた。だからこそ、こう尋ねた。

「それほどまでにあの子が貴方にとって大切な人？」

「……ああ、死ぬほど大切にしたいやつだ」

矛盾している。男はその少女の為に死ぬというのに死ぬことを拒んでいる。

愛しているはずなのに抗おうとしている。その矛盾こそが人の証だと魔女は思った。

「ならば貴方は今までの己を捨てなければならない」

「捨て、る?」

「今まで培ってきた己(おのれ)を捨てる。それは己ではないということ。今まで親しくしてきた友人、家族、恋人、全てを捨てて、貴方は新たな己(こ)となる」

「つまり、以前の俺は綺麗さっぱりなくなるってわけか」

「貴方が願いを叶えたいと望むのなら」

魔女はそう、言った。男に推奨することも強要することもなく男の意思で決めると、ただ黙って男の答えを待つ。そして、男は。

「願う、俺は。どんな形であれアイツの傍にいられるのなら。憎まれたい。アイツを見守れるのなら」

男は願った。己の死の結末を受け入れ、新たな生を得る為。

そして、少女に己の死をまざまざと刻みつけ、なおかつ、己ではない己として少女を見守る事を決めた。

「ならば貴方の願いを叶えましょう」

「ありがとう、……えーと。今更だけどアンタ名前なんていうんだ？」

魔女は呆れた視線で男を見た。

「今更な質問ね」

そう返されて男は後ろ頭を掻きつつ苦笑いで謝った。

「ああ、悪い。俺から名乗らなきゃな……。俺は劉瑛李」

「あたしは、壱原侑子。『次元の魔女』とも呼ぶ人はいるわ」

「そうか……。本当にありがとな」

「礼はいらないわ」

「それで、……俺はどうやって戻ればいいんだ？」

「さあ？」

「え!?おい!帰り方なんてわからねえぞ俺!」

「それはそうね。その内、迎えがくるんじゃないかしら」

「……投げやりだな……。はあ……。なんか腹減った……。何か食いも

んあるか?」

「ないわ」

魔女はキツパリ言い切った。男は脱力して重苦しいため息をついた。

「ハア~~~~」

「肉まん作る材料ならあるわよ」

「……それは俺に作れって意味か」

男はジト目で魔女を見た。

すると魔女はわざとらしくニヤリと笑みを浮かべた。

「食べてみたいわねえ、絶品とされる貴方のに・く・ま・ん!」

「……いいぜ。俺も腹減ったしな」

どうもはめられたような気がするような、しないような微妙な流れであったが、どうせ迎えなんたらがなければ戻れないのだと男は諦めて魔女に案内されるまま店に入った。



そこで男は魔女がいう迎えが来るまで、魔女にこき使われることをその時男は知らなかった。